

江戸名所圖會

十七

西垣文庫
文庫10
6556
17

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43

文庫10
6556
17

西垣年

下谷岡

東之上野のあらを描く

小田原北条家の古文書山林下高光陽

戸田氏と義を領す

又

武藏國風土記殘篇曰

豊嶋郡下谷岡貞鹿狛兔狸山鷦鷯等又

貞暮蘋松脂云云

本朝霞道の祖神又

北野天満宮を相殿と

菅神の像の寔承トハ急眼

太師尾眼アリト社の相殿よ

御所の邊ナリ

五條天神宮

東之巖山の裏の桂懶川氏の比より祭神少彦名命

坐當社

東之巖山のうちより一ノ寔永寺草創の御連

歌師瀬川昌億り宅地ニ近ナセラル

御所の邊ナリ

の夜向本神事を施行す

北國記行云正月の未しよりやのまゝの出と優遊しては坐の社

五條天神と申すアサヒ松と茅原を焼く

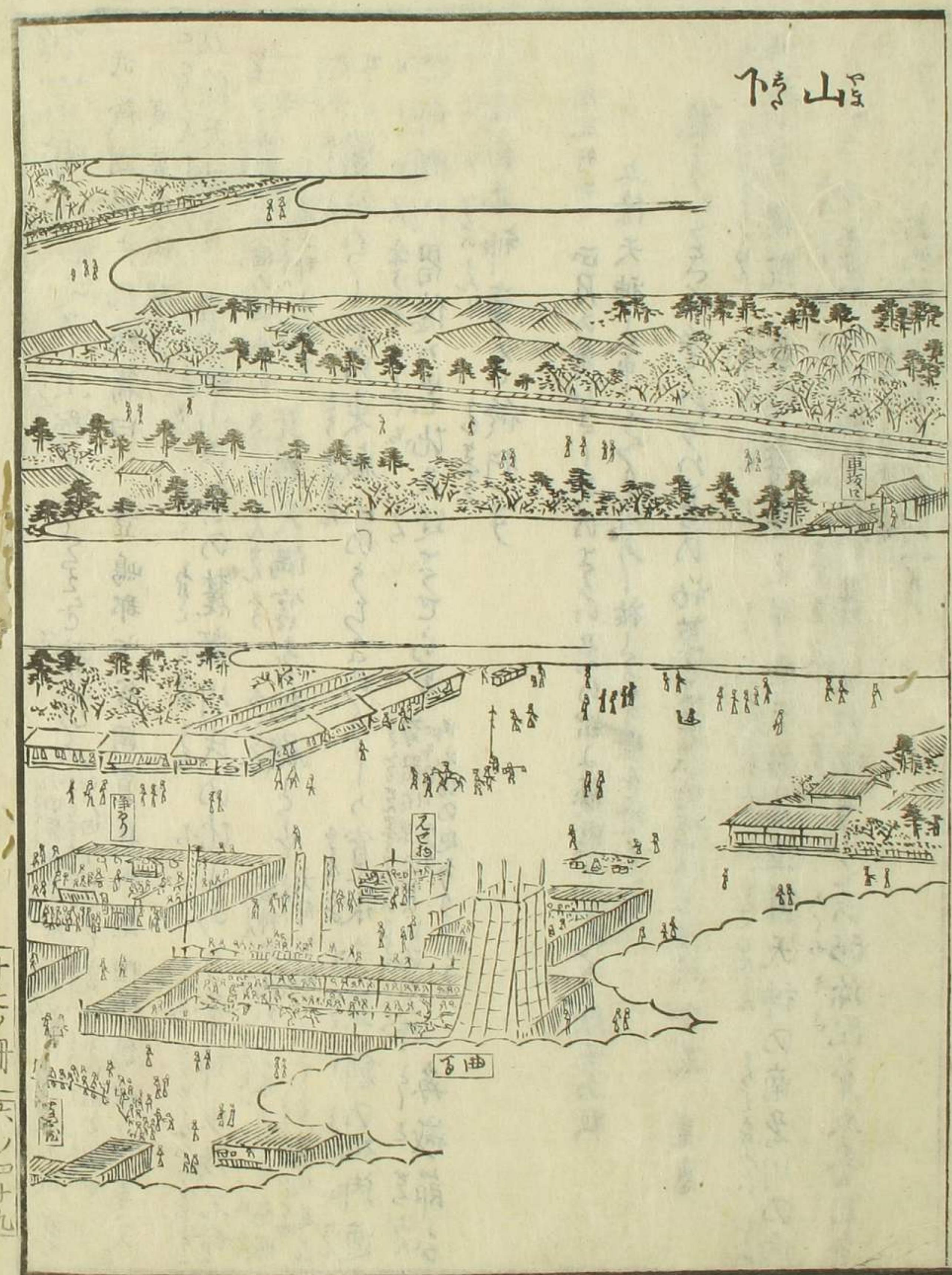
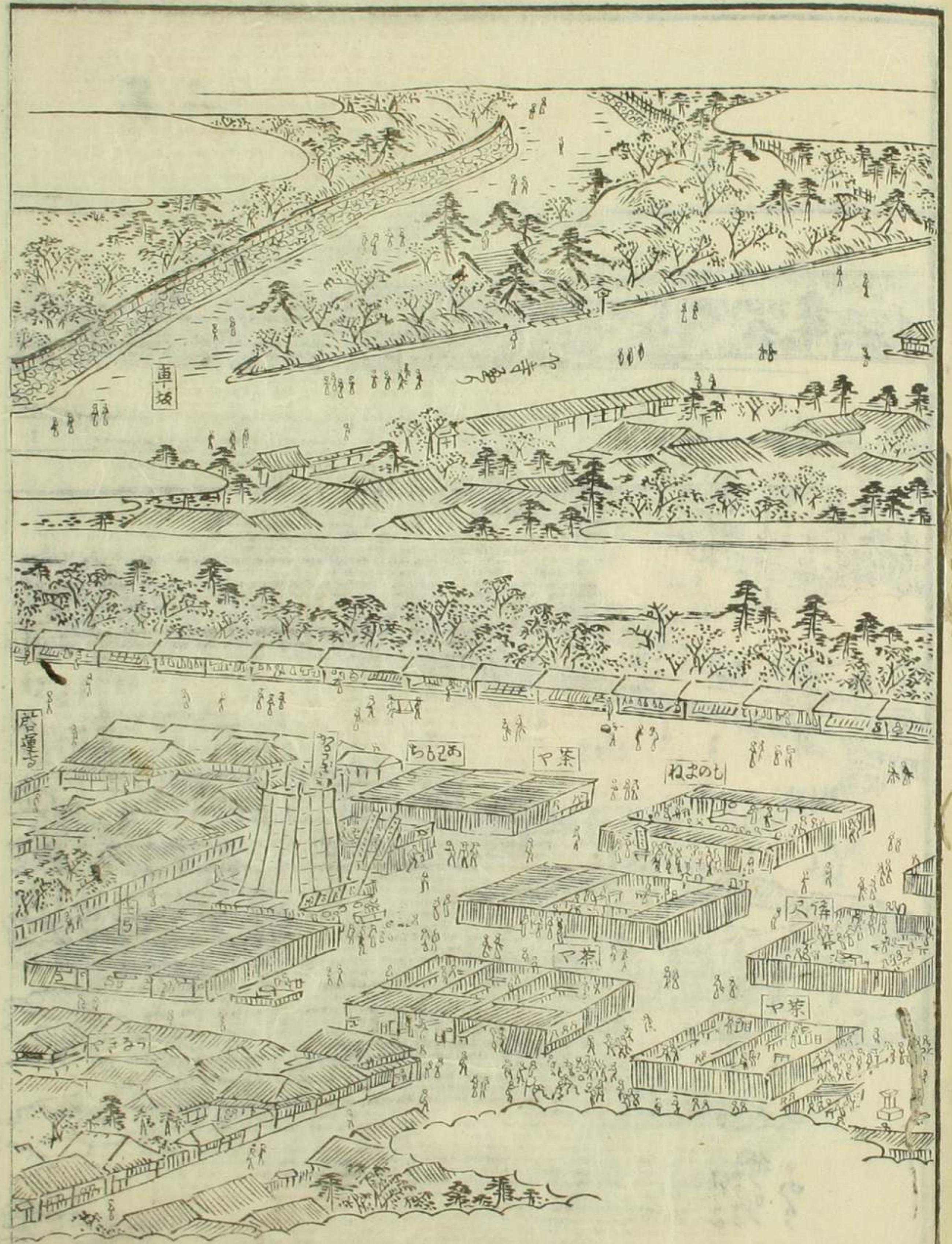
矣りをもとまれりの草の初草と毎日の出のあはてや若 競惠

宝王山常樂院

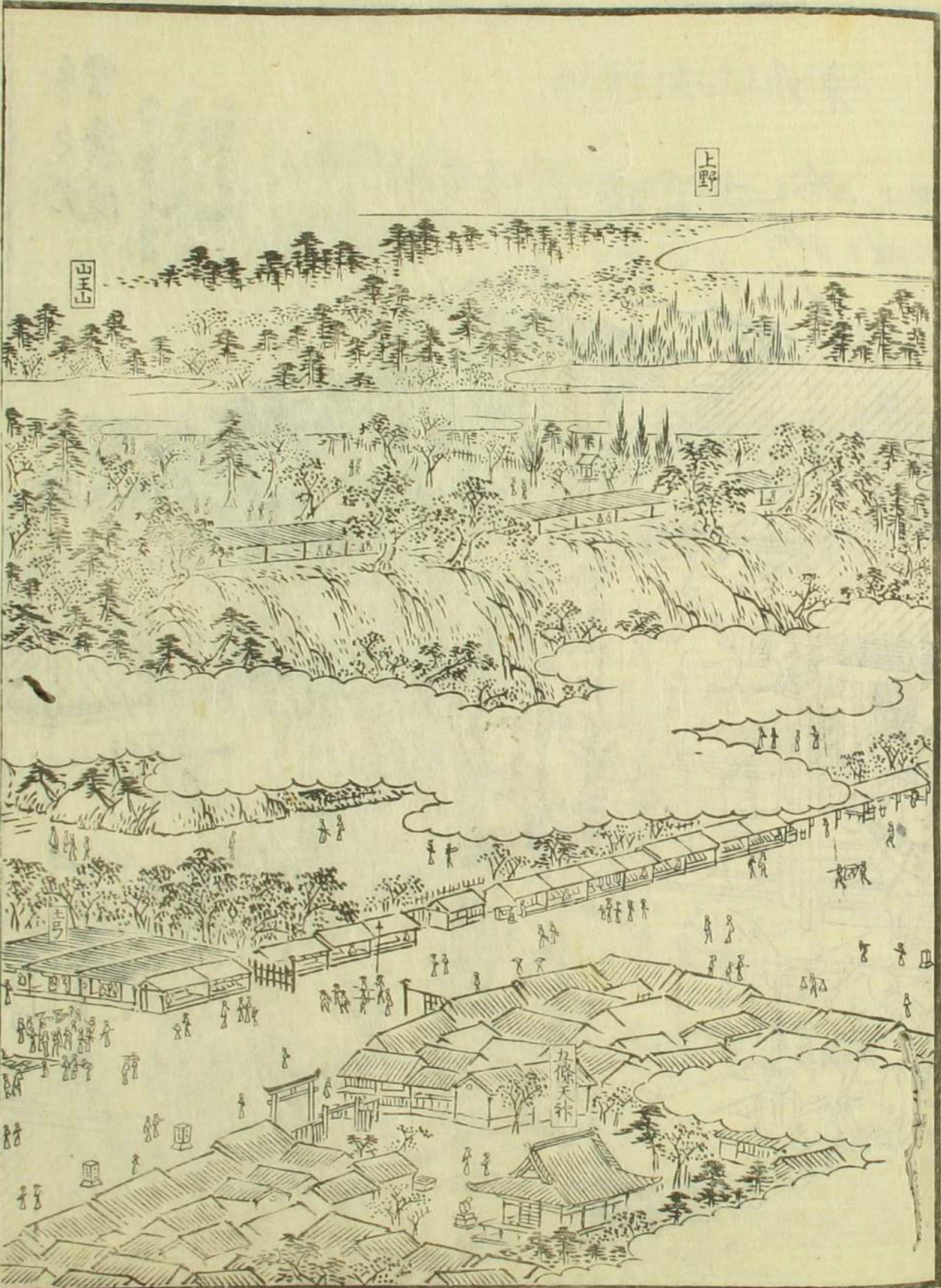
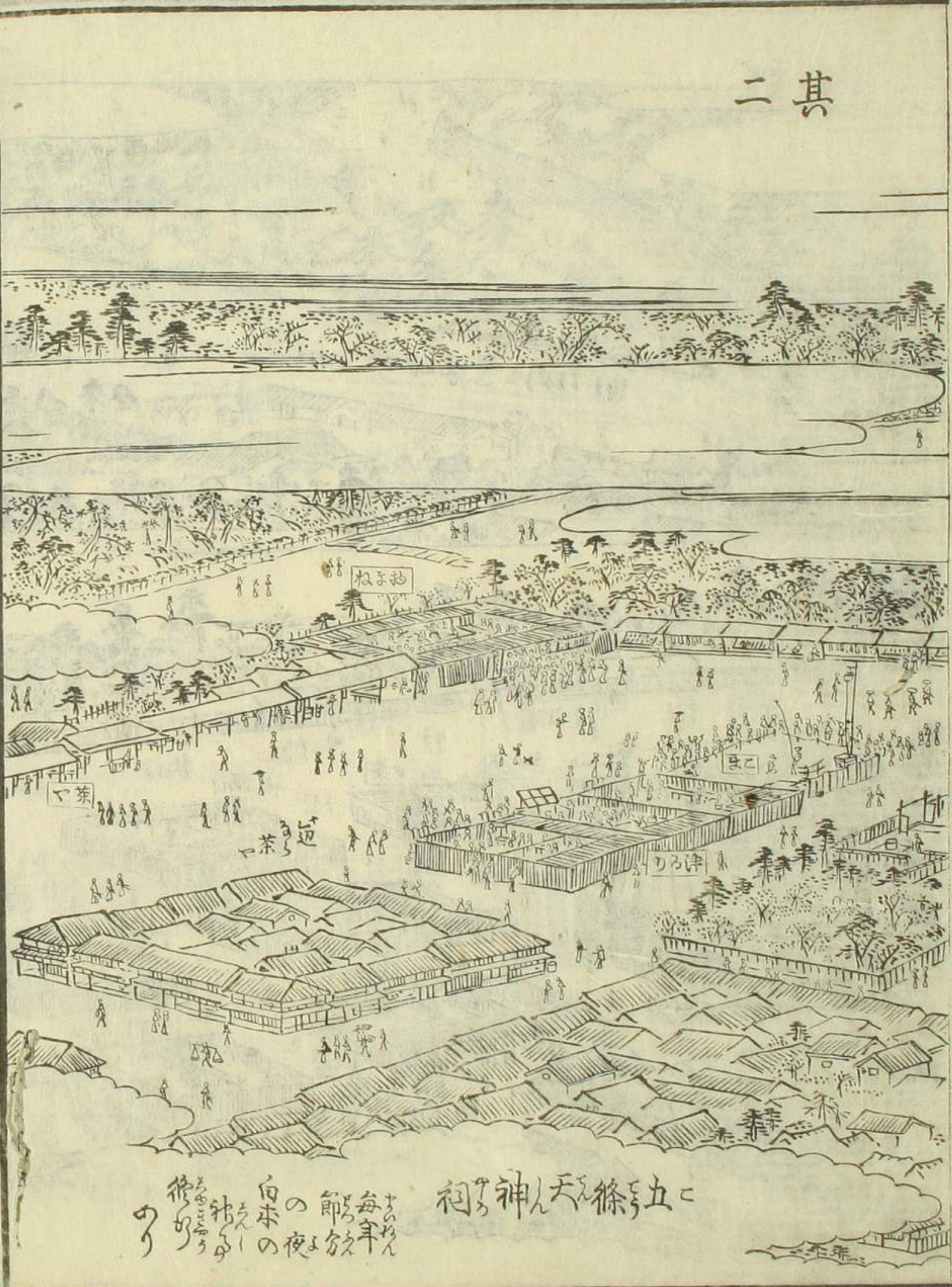
長福寺と号すと天台宗五條天神の南多川の向

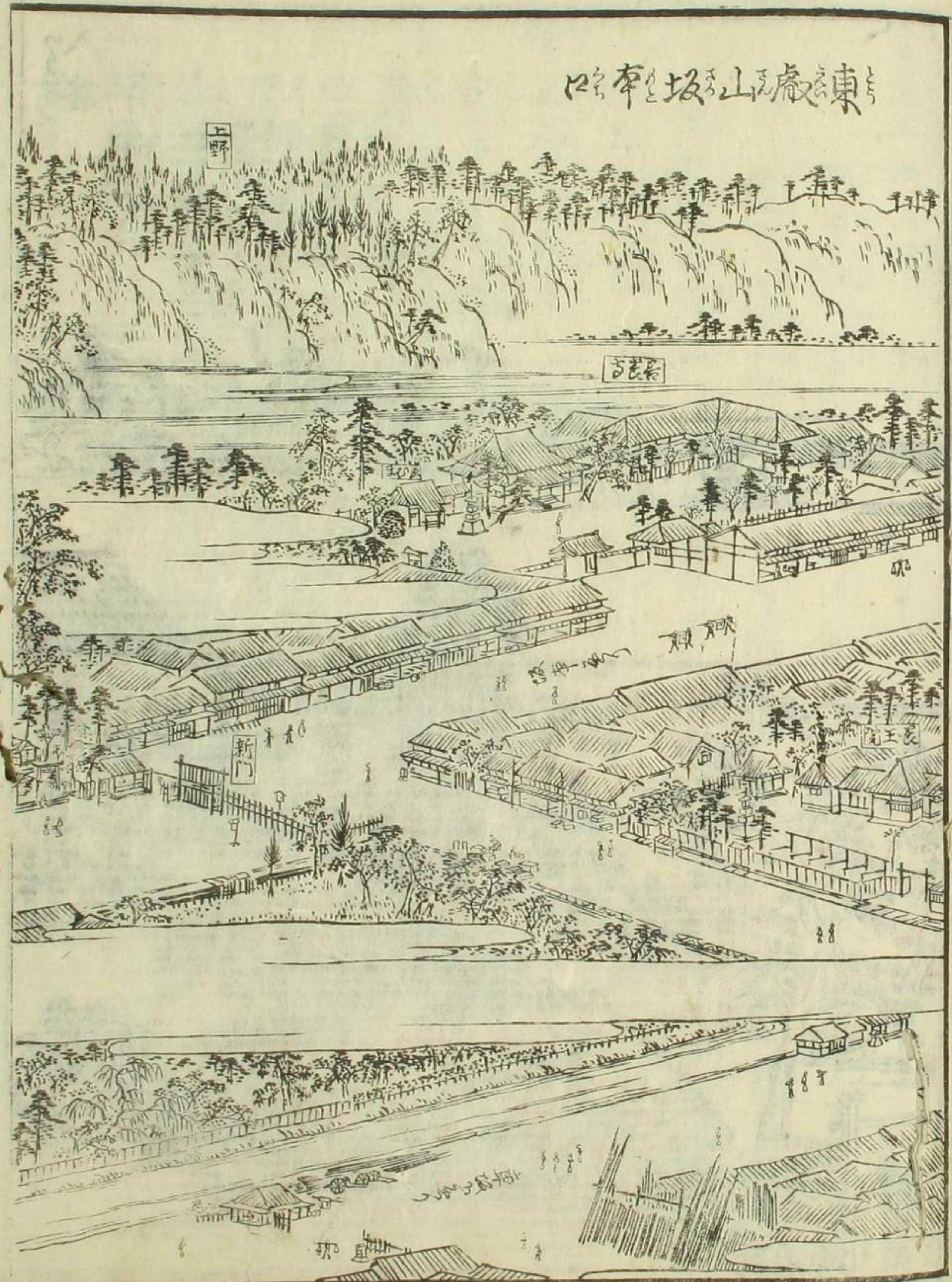
又すアサヒ阿弥陀如来が行基大士の作すて六阿弥陀并立番目

至二月八月の彼岸中甚振りア



二其





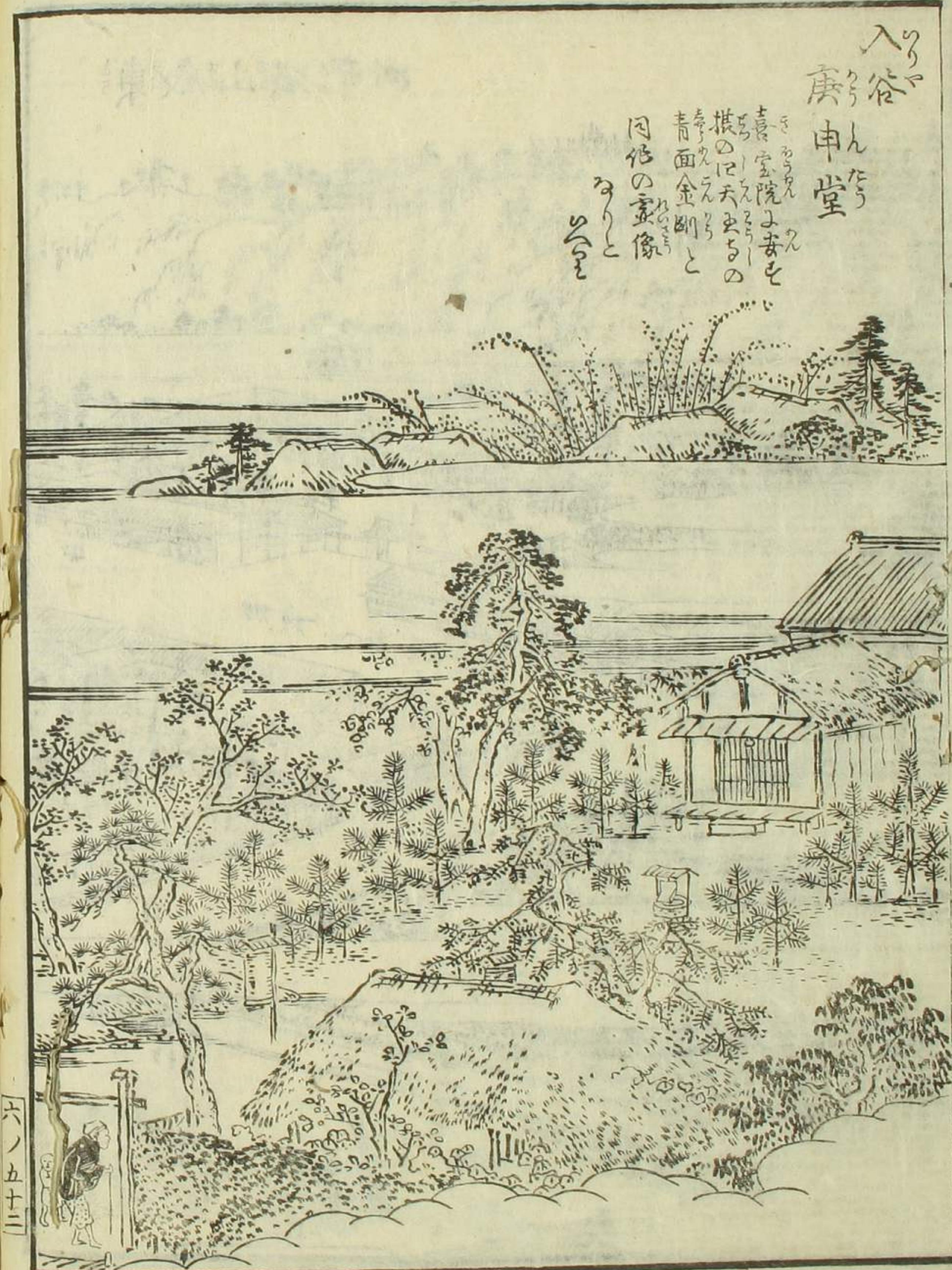
常樂院

六阿弥陀堂
秋二月
の御祭中振



入谷
庚申堂

喜宝院
青面金剛と
因幡の薬像



六ノ五十三

金光山 義玉院

下谷坂本壹丁目の南より天台宗にて往昔今

御体内大木の邊りより

と慶長の頃今の大木又はさざらの往

古の三藐院と号ひを宝永年間今の大木改るとつり當寺より釋迦の般槃像の画軸一幅を藏し上は慈眼大師の讚あり三四傳燈大

僧正天海書ともある也り毎年二月十五日是れ法事ありし

藥王山 善養寺

延壽院と号ひを同石坂本壹丁目の左側より天台

宗よりて卒尊の藥師如来を安坐

寺僧云此寺その小所に號明神の本地佛す
相持なりとあり

當寺の天長年中慈覺大師の草創本尊も國大師

の作ありといふ額よ圓滿の二字を刻し黄壁本庵老人の筆す

境内より魔堂あり圓滿の像の運慶の作あり正月七日十五日參

請羣集と

或人云く當寺圓滿の像の跡也利學校より

小野照崎明神社

同所三丁目の右側より祭神恭儀小野翁の

靈ありといふ社傳あれとも詳れども故より始より累積を當社の坂

入谷庚申堂
喜宝院より天台宗の御體内大木の邊りよりと慶長の頃今の大木又はさざらの往古の三藐院と号ひを宝永年間今の大木改るとつり當寺より釋迦の般槃像の画軸一幅を藏し上は慈眼大師の讚あり三四傳燈大僧正天海書ともある也り毎年二月十五日是れ法事ありし

藥王山 善養寺

延壽院と号ひを同石坂本壹丁目の左側より天台

宗よりて卒尊の藥師如來を安坐

寺僧云此寺その小所に號明神の本地佛す
相持なりとあり

當寺の天長年中慈覺大師の草創本尊も國大師

の作ありといふ額よ圓滿の二字を刻し黄壁本庵老人の筆す

境内より魔堂あり圓滿の像の運慶の作あり正月七日十五日參

請羣集と

或人云く當寺圓滿の像の跡也利學校より

小野照崎明神社

同所三丁目の右側より祭神恭儀小野翁の

靈ありといふ社傳あれとも詳れども故より始より累積を當社の坂

奉の鎮守として八月十九日を祭日と別當の大曾宗として

小野山嶺松院と号すと

或入云當社は其先より出雲堂あり頃の傍よりと小野神と稱と小野宮と云
儒教を崇敬し序列是れ由學子校を開く故よ其後彼地より所生の傍より草の傍と
奉祀を施行とすふもかく此例より準じて思ひ出雲堂の傍より並びに堂宇陽島

在るの後今之跡は又云當社の化主輪行門作の使者より白狼夜海より屋の赤
鷹やアヒル台嶺の松樹よ映しけれり尾の毛寫とり如意より彼此混じ交へ小野宮

ノ殊勝なり

佛迎山安樂寺

金松より正保年中正蓮社意前和尚當寺を創立

也當寺の多因院宮朝法親皇

立也御宝居の舊也

心院のホリヤマ捨立一派の淨域

ハリ昼夜不退念佛三昧

根岸の里より済家の禪林すて釋迦如来を

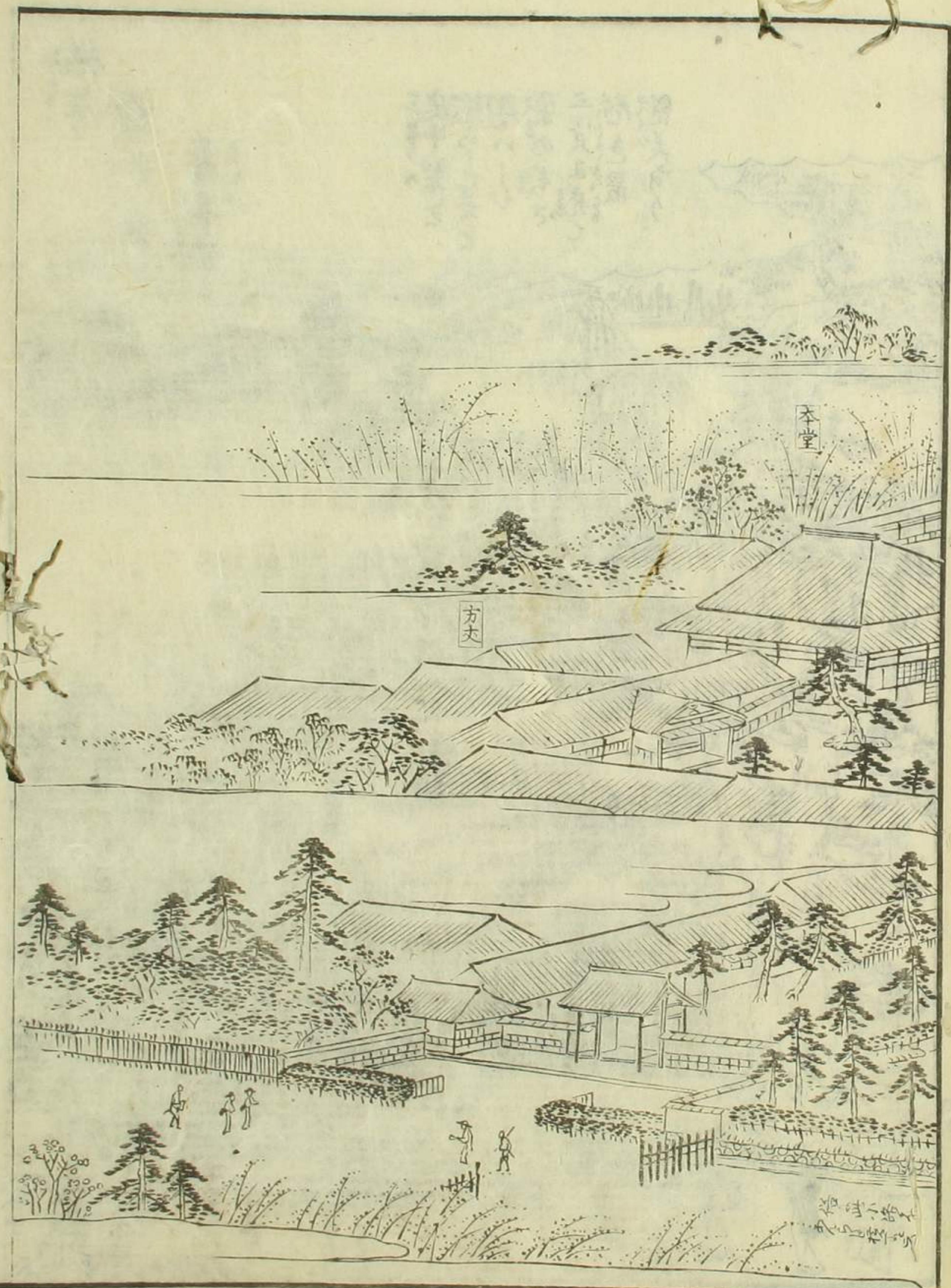
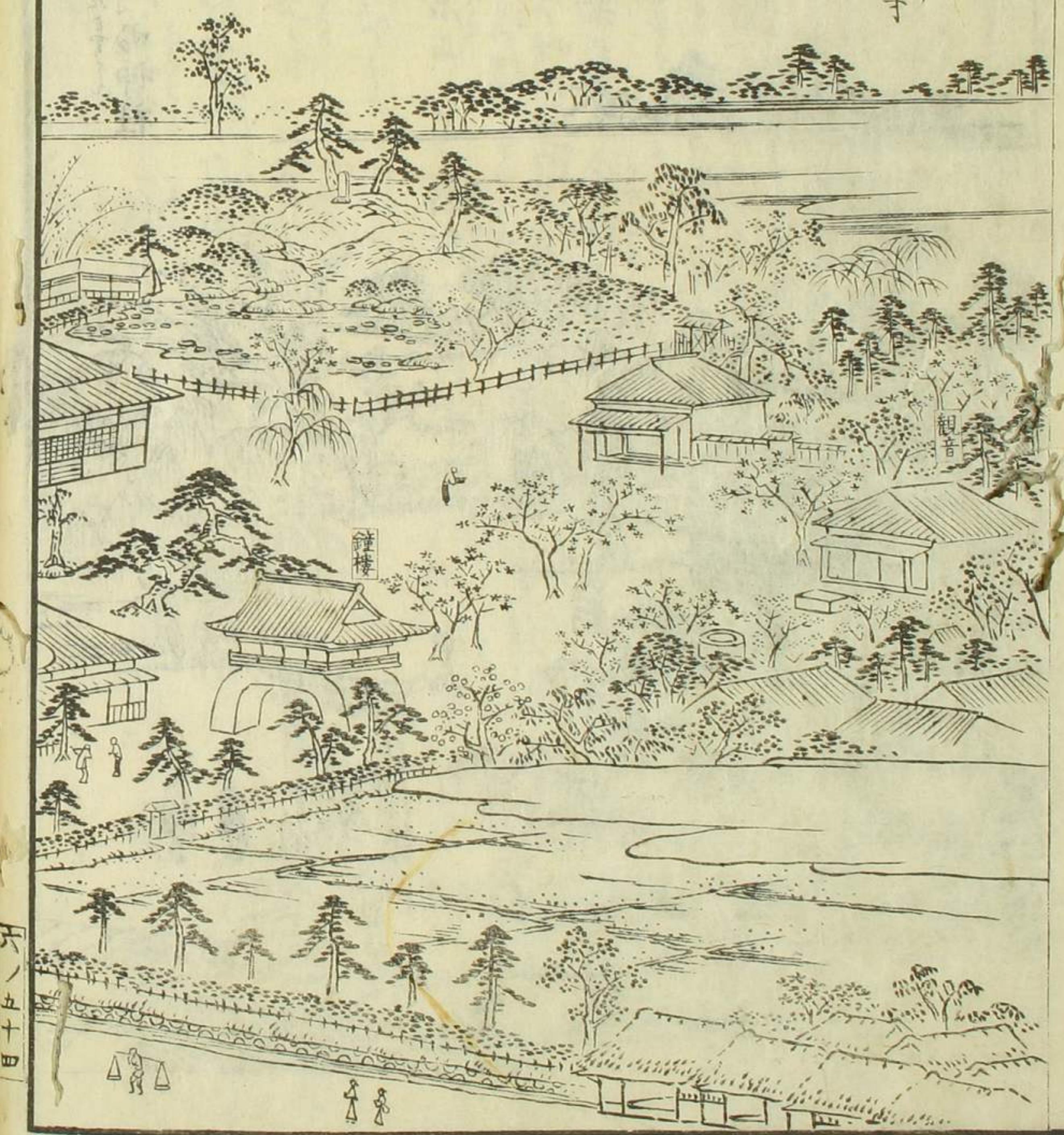
奉るど當寺庭中小紫藤うりて花の頃の一奇觀焉主なるよ俗
向あれ祇園寺と梅石うりて堂前よ鏡の松と唱ふる名樹ゆ

鎮守の辨財天の弘達大師の作なりとぞ



小野照崎の神社

金松
安樂寺

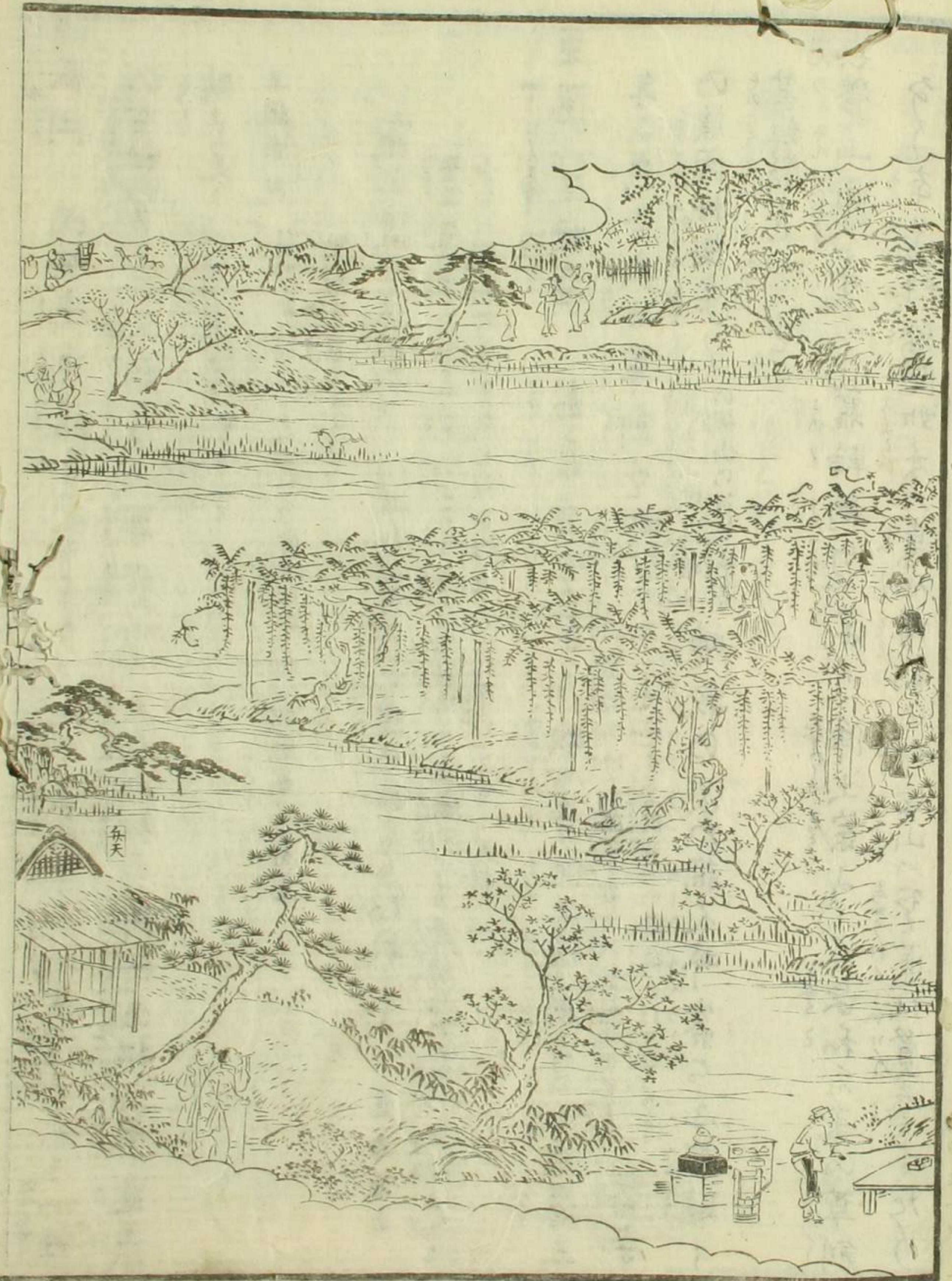
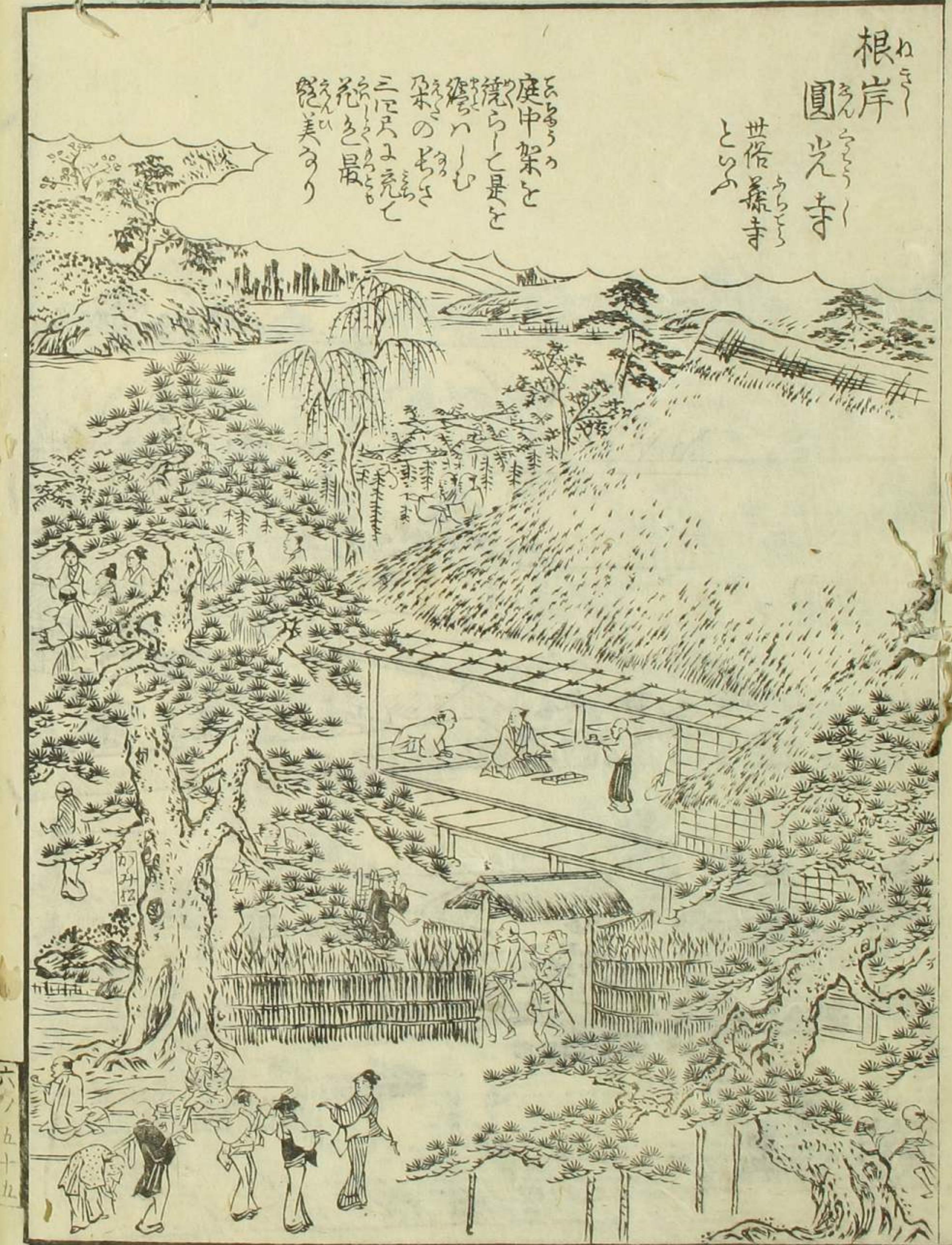


根岸

圓光寺

世俗樂寺

庭中架と
徳らしとは
篠のよし
花のよし
二に又え
花を最
美うり



時雨岡

因所庚申塚

三丁艮の方小川よ傍アリ一株

の右松のリと不動尊の草堂あり土人此松を御行の松と号未由
始くらゝ省界を松もよ一小时雨の

圓圓雜記

そこの岡とくろ石と松庵のありある

シケよやどミ

霜の後あらわれ小なり时雨をひきの出の松もみれ

道典准后

按云此の出とくろ東嶽山の旧名あり此俗も東嶽山うる連綿なれ圆圓雜記云出る

ところの和氣の意を有て後世好事の人の号けりとくん矣

東陽山正燈寺

龍泉寺

町より妙心寺派の禪刹

と兼應二

年又愚堂和尚草創也

和尚大因宝盤圓仰

と謚号を天性明敏すと大よ

當寺

の後園楓樹多々

其先山峰高雄山

の楓樹の苗を裁と云

晚秋の頃ハ詞人吟客らふ群遊

其紅艶を賞も

直貞山西光寺

襄輪新町より

淨土宗すと長和え年の草創

年又卒その阿流院如来ハ惠心僧都の作

安山へ石と蓮社賛譽上入たり

牛東郷

龍泉寺町の辺今僅の地をひそも

一又篠堤と字を菊岡

治涼の説又此地を佐く律見の里とも号くとあく誤ありこの境不

義祠あり千束稻荷と神社と

或人云往古の上アとくろて浅草天王町の辺うる子俊の楊闊庭をまくとふ本ととひると

と

仍て接ニ佳草寺五德に年の鐘の名

武昌豊島郡千束の金龍山浅草寺

と

境内ニ西高輪井と稱するあり里老傳へ是を上手千束稻荷と号すと云

田原山茶水の

京文書

と

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

内

の

吳竹の根岸の里へ
上所の山蔭すて
幽遊わろり故ふや
都下の遊人多くは
小隱棲を拵え
あく嘗水アをむ

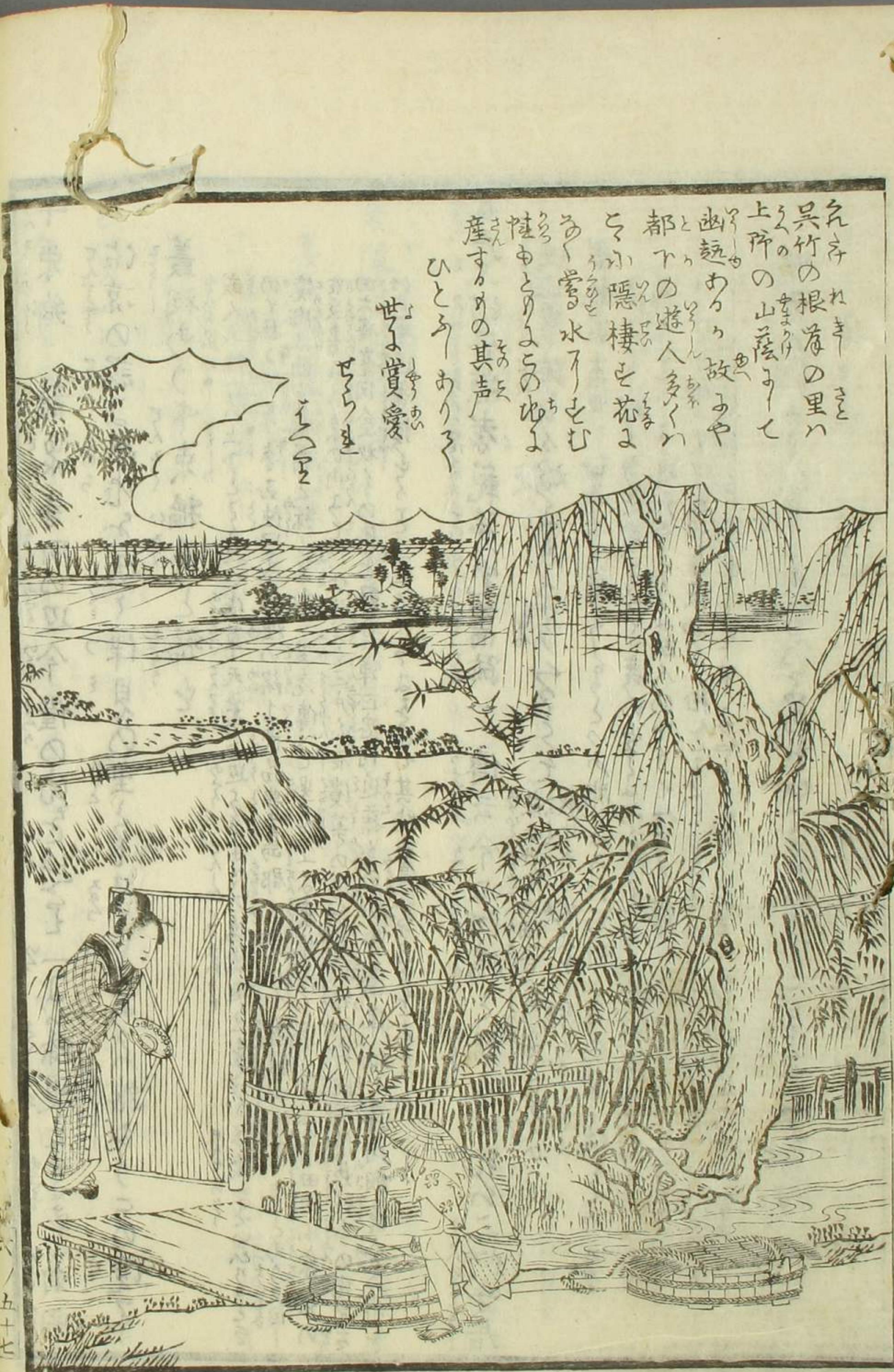
産すリの其声

ひとうありそ

世よ賞愛

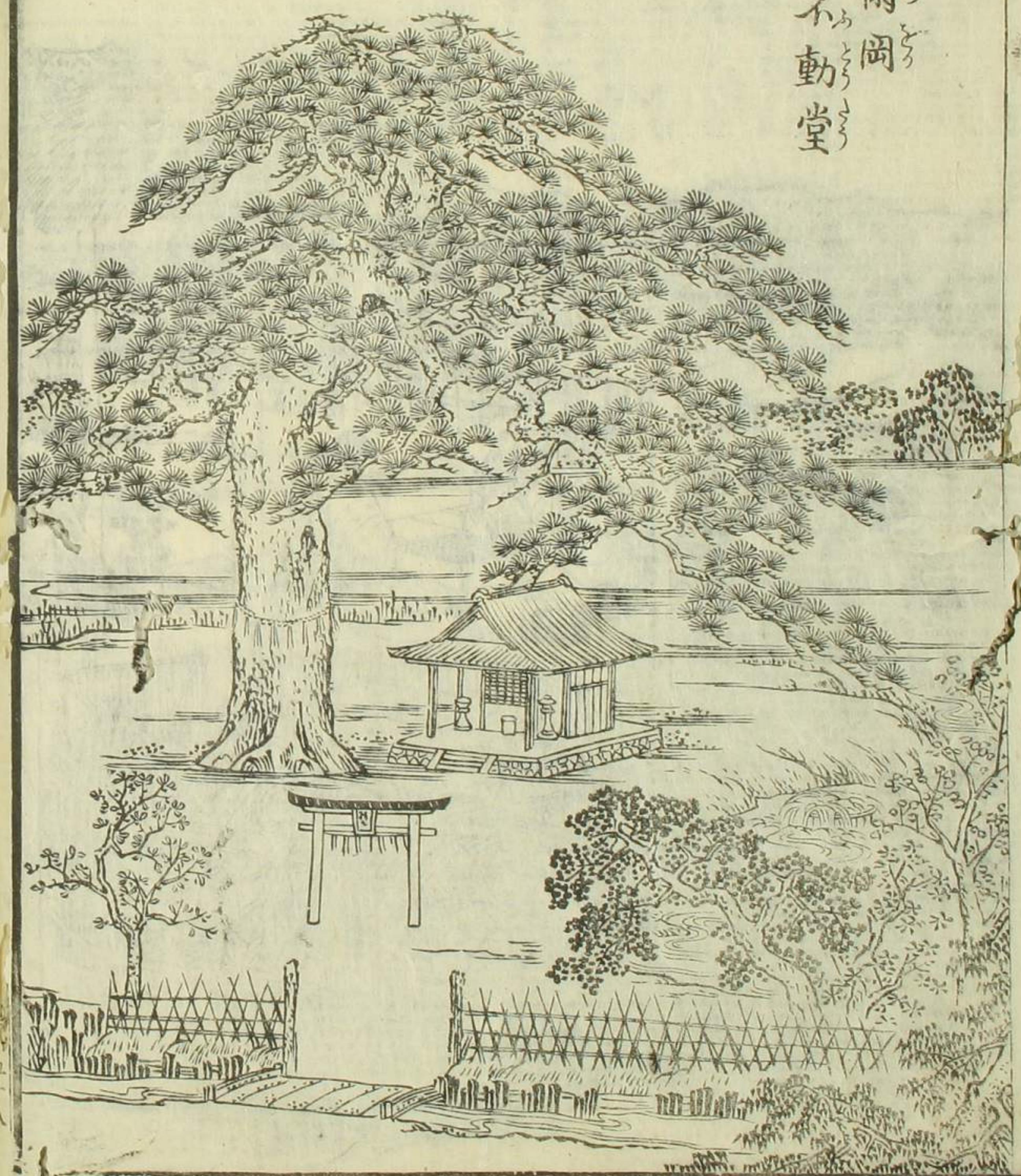
せら生

もと生



時雨岡

不動堂



田國雜記

霜の後

あらすよ

時あそ

あひの

岡の

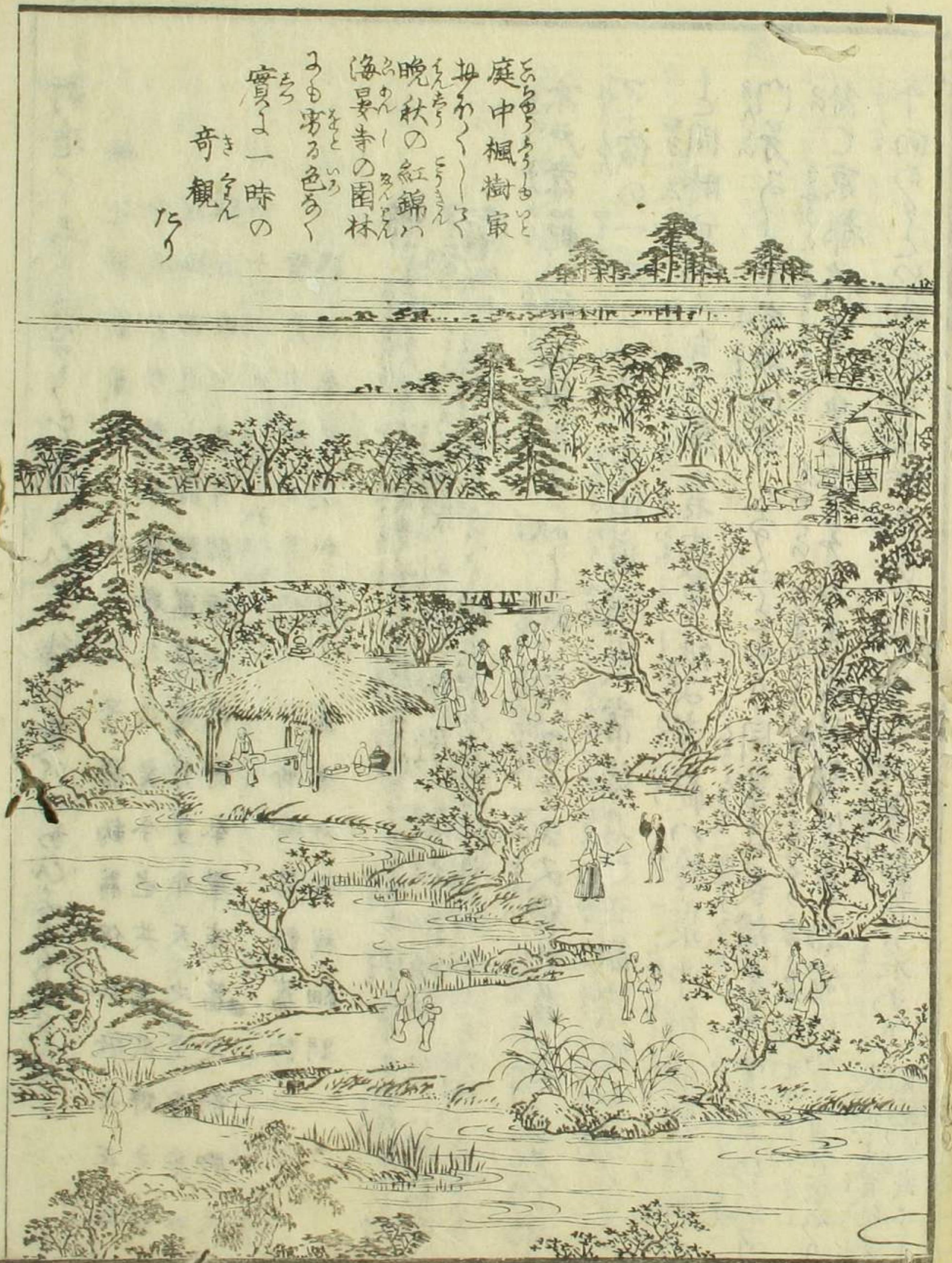
松あひ

う

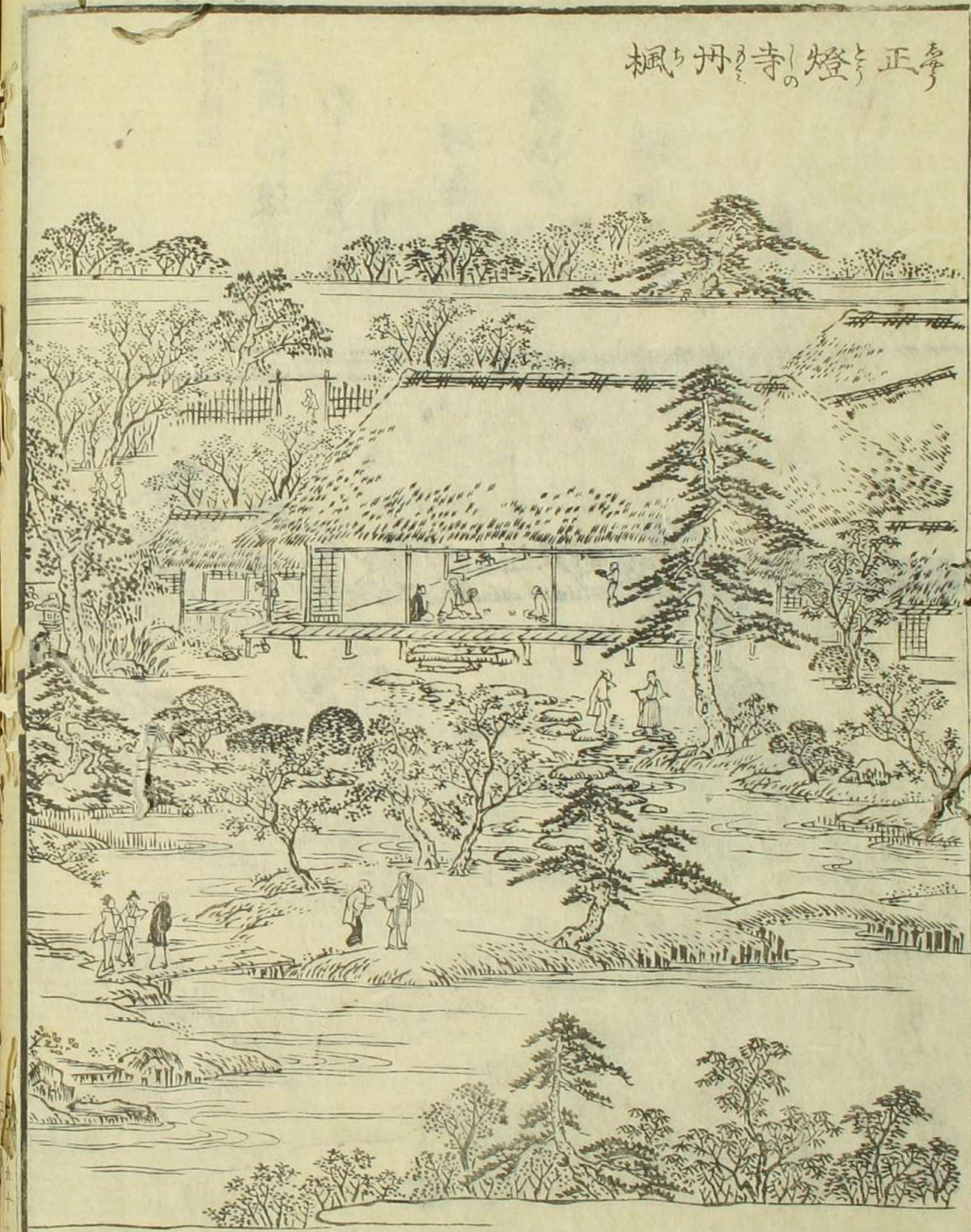
道真准后



正臺
楓寺の燈



15



軒廻りあらえうへと宿とひへと侍へ夜はのあひよともまけ

梅

花無盡藏云余在洛而聳厥聲譽久之矣今也共寓武野之正脉

賜詠歌三篇
二十六日
十文明二十七年乙丑也

木戸公号罷釣翁保和歌之佳脉

閑田之流往還無虛月豈非天之至幸乎云昨

吟聊答數篇韵

雪月寧非老年伴

鳥若知都戎細問

接ニ孝範翁の集ニ成る圓豐寺塔といひ那より入はく芦と萬葉と云又梅花そぞれの詩の序よおゆを罷釣翁と号す其よ此所の佳境閑田の上流より寓をとりて餘を教ふまた二作鶴の形跡アハ傳ひ

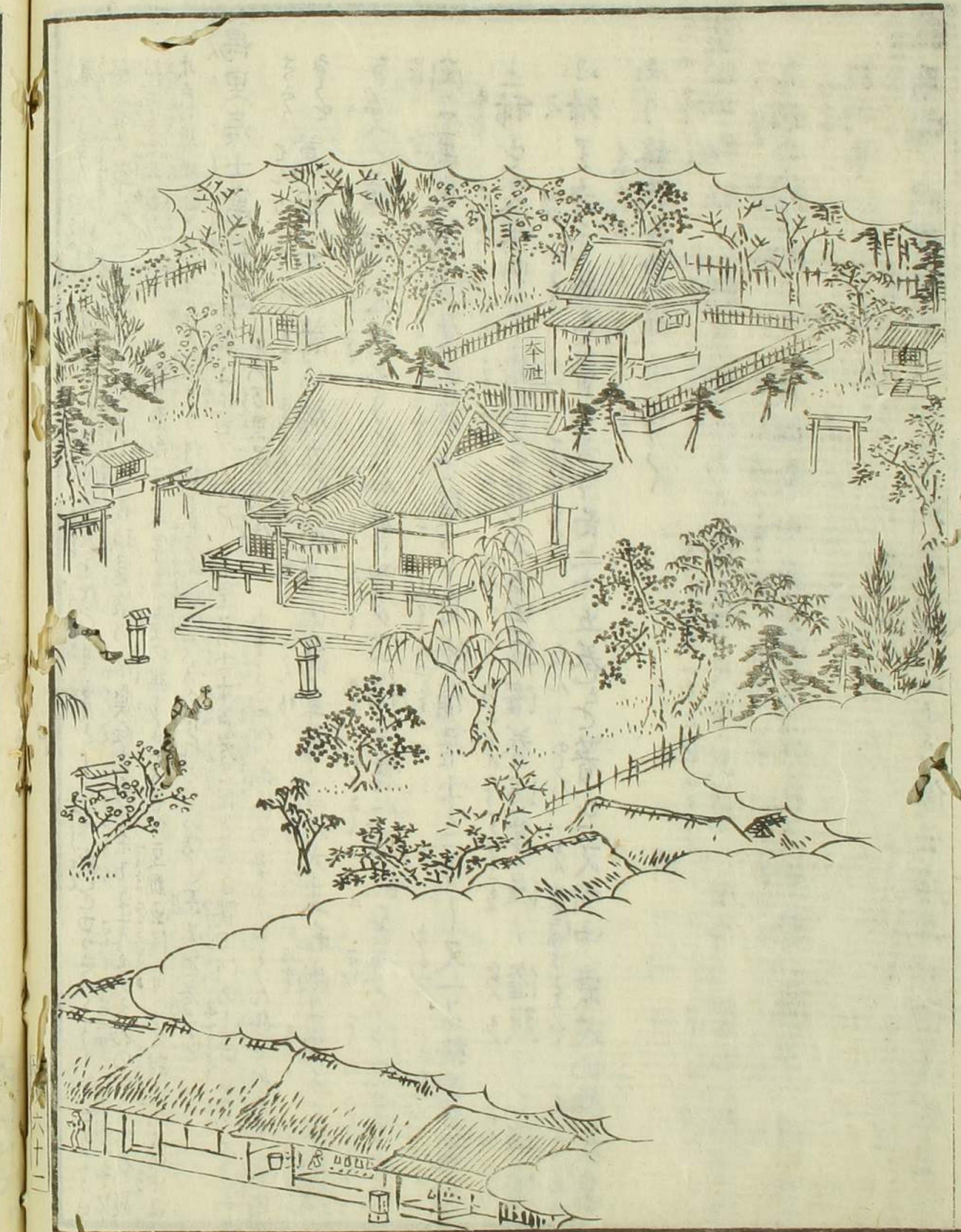
本戸孝範ハ從五位下より叙。前二阿守と云又罷釣翁と号も今川
子俊の一族ナニモ左田道灌東常縁及び正徳宗祇公歎万里探
門弟ニシテ多双の哥人ナリとより同書より長藻元年冥東の丸ノ
松と京都將軍家の舍弟左馬頭政矩冥東の軍の宣肯を示す
萬里居士寓居地シテ万里居士の住也ナニニ作鶴のあきをくみん次されと今其地
ト向あとの条件より供奉の人の中より此孝範の名ナリ

孝範建武二年
貞建武二年

新田明神社新鳥越小坐祭る所日本武尊一坐ナリ當社の往古え
間ニ寓ヒ後淳層の業を廢す自隣桶居士と号す又一子梅花無盡存
ト稀ヒ文明の末東武又遊ひ左田道灌眷遇甚強ヒ僕殺ヒて後濃
小歸主老を投ヒ曾て天下向二十五卷を著ヒ文明中東遊の詩文集
あり梅花無盡藏と号す

駿馬塚同所南例何某別荘の中より傳云康平中原義家東征
执行を

山えん
熱谷
田と
明神社

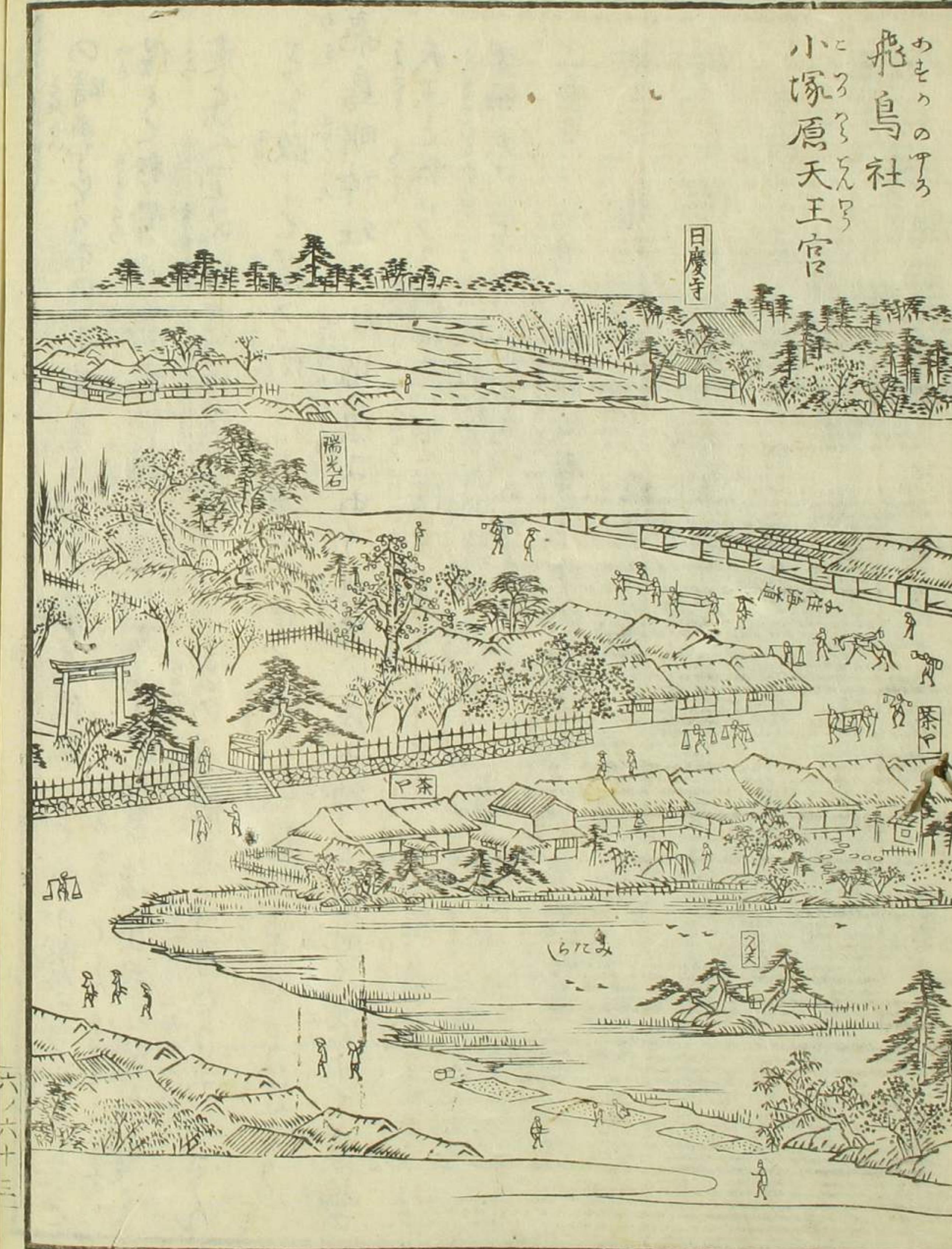
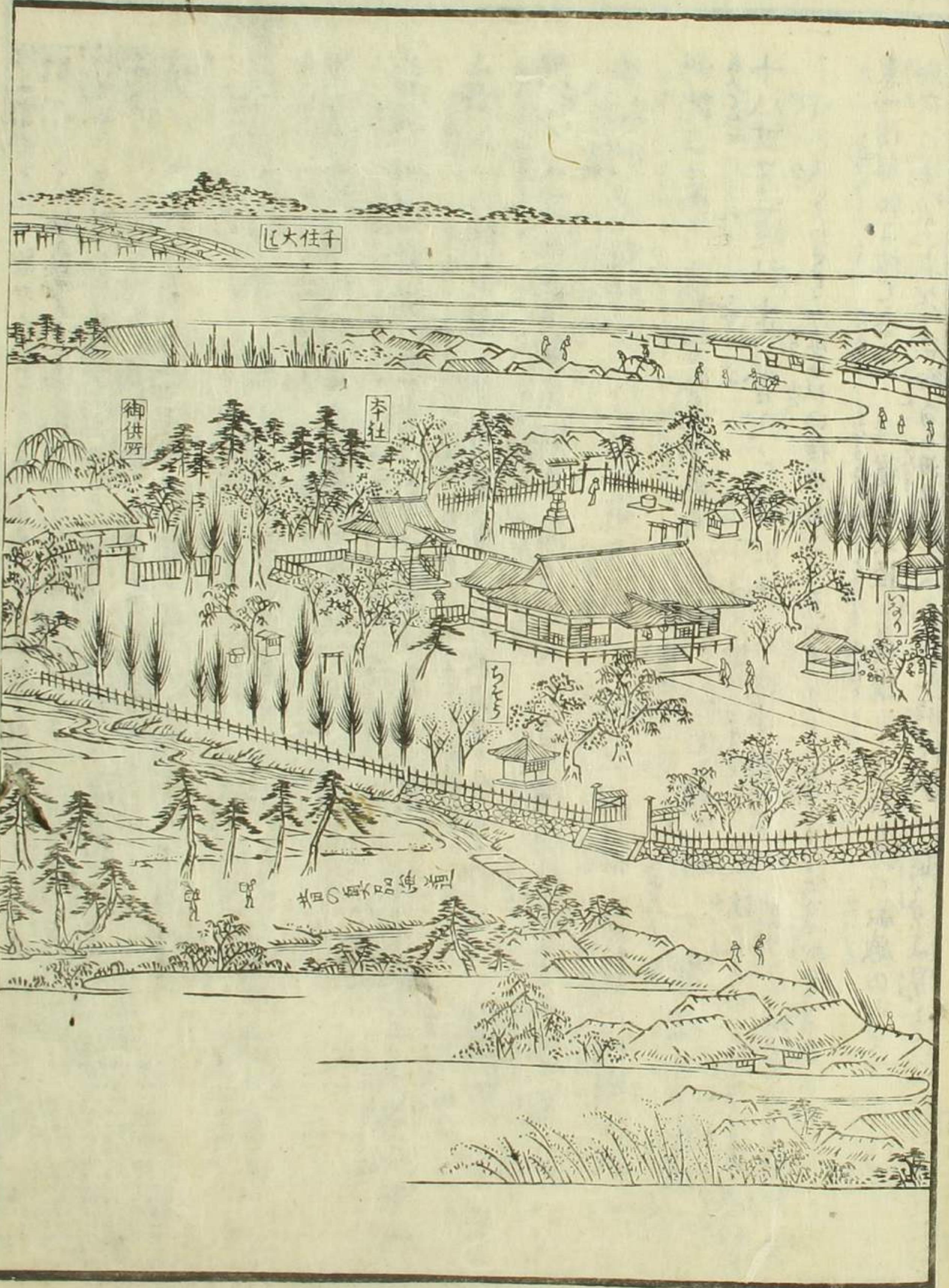


駿馬塚



六ノ六十二

の時毛むすら不の青海原とりの強之偶病一てこそ小薨をム大又豐之を
傷みて朽骨を釋路の傍よ埋めゆふとを其後里民小祠を堂え
建とひ又近き頃其地のありムの明徳をみ咸の下又顯さん
とを欲して塚の側よ石碑を建て祠れ其塚の東の方よ迂ぢ
龜鳥明神社 小塚原又あり此地の產土神ととせ人混して寒輪の
天王と称せり列坐もハ至り篋院宮末よて莉石山神翁未と口す
祭神大己貴命日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとあり素盞鳴命の御子ありとあり
二坐日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとあり事代主命大己貴命の御子ありとあり事代主命大己貴命の御子ありとあり傳因往右延曆年中比叡の黒肱師東國化度の歎此地ス
至る小小條の茂焉日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとあり一堆の小塚あり此塚よりと此地と其塚日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとあり夜日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとあり光を観日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとあり白衣を着日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとありたる二人の足荆棘生日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとあり石の上よ降臨あり
と黒肱師よ仰日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとありと曰く我の素盞鳴命日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとあり大己貴命日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとありと云云仍て忍教鵠
仰日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとあり清淨の心を撰むて此神伐一社又奉日本本紀古語拾遺等又大己貴命の御子ありとありすと牛改天王ハ毎第六月二日より
は九日ヤとみ住大楊の南侍よ



傳は富貴と譲り猿原山を神幸す。其神の權天文十年辛丑六月二日此荒川へ神嘗一基造れ。うなみよ景す。後此日よりて祭日とする。其神靈を奉揚し。也。今御宿とス猿の根を普請。彼地に生じる茅草を用ひ。端光石。本社の右方の小塲の上に四例。例と花鳥神の祭祀。九月十五日。物語を。ニ神老翁。化らの石上に観。一木立とつ考ふ。よしとあそく。上古の荒墓。

豐德山誓願寺

惠心院と号す。

恵鳥明神の北より。

淨土宗す。

幸多の御院。寺院。未を安基。惠心僧都。

ゆり

寺傳曰。僧都顯密の二教を究め。於諸宗を渡。遂に。

願

ニ歸入。往生要集等を著。大日自化を化す。

弘法の功。

僧都上足の慶祐法師。説くと同く念佛の教。

今世念佛。

東圓弘法。行く弘法。もくとす。仍慶祐法師命を受。東圓が遊化。

弘法の功。

此地。よまく當寺を建立。宇治の惠心院。比して。

中古額破。

十八世了蓮社定誓上人隨彼大和尚中興せり。

中古額破。

十八世了蓮社定誓上人隨彼大和尚中興せり。

中古額破。

惠心僧都。勅。依。泰内。称讚淨土經。侍講申。され。か。敵感の。す。幸多と。之。

御衣を。錫。り。一。う。右。御。方。御。衣。を。錫。られ。一。返。か。よ。是。と。榮。と。も。

かれくう。恨られ。其文。

以上取意畧文

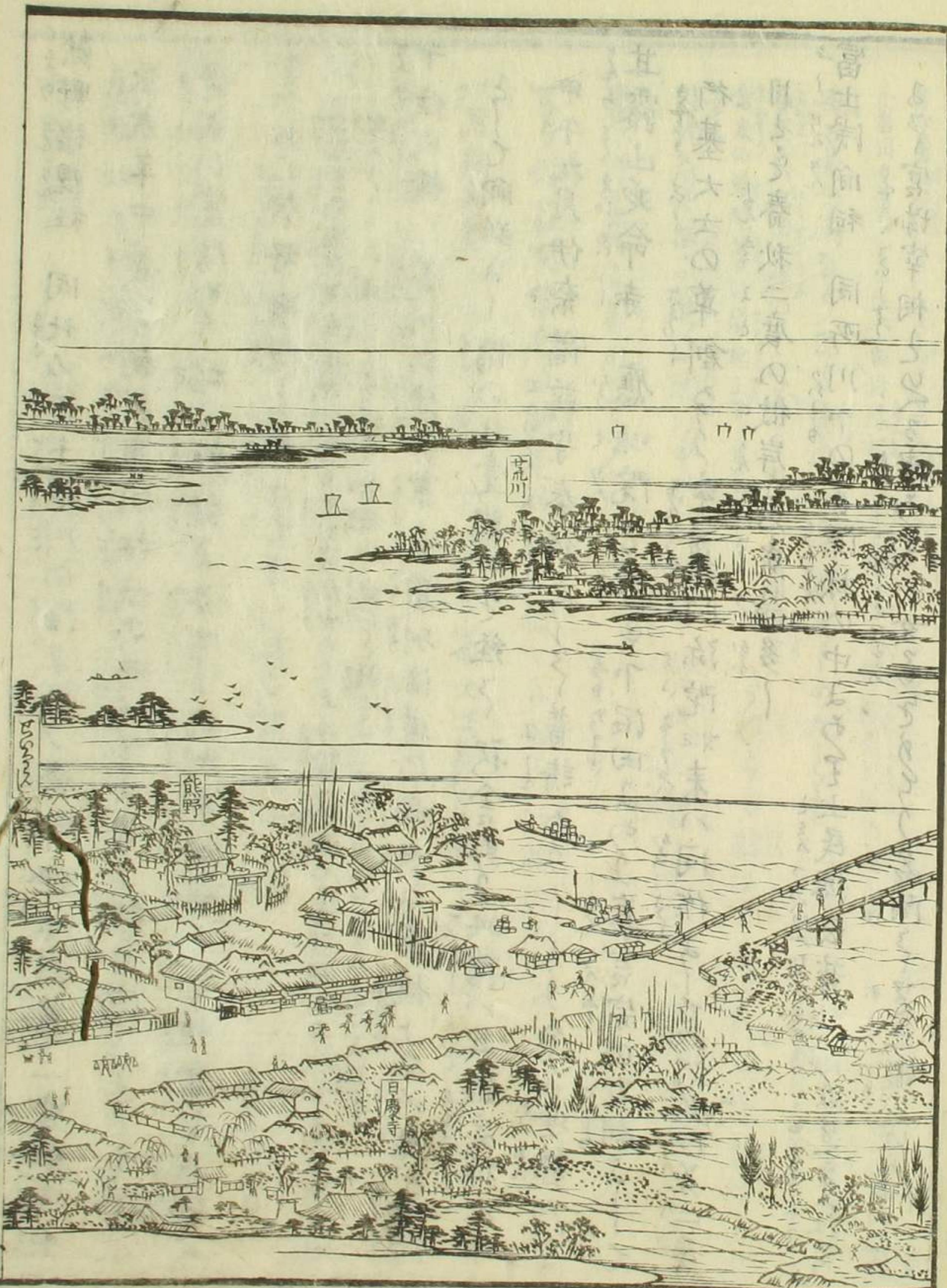
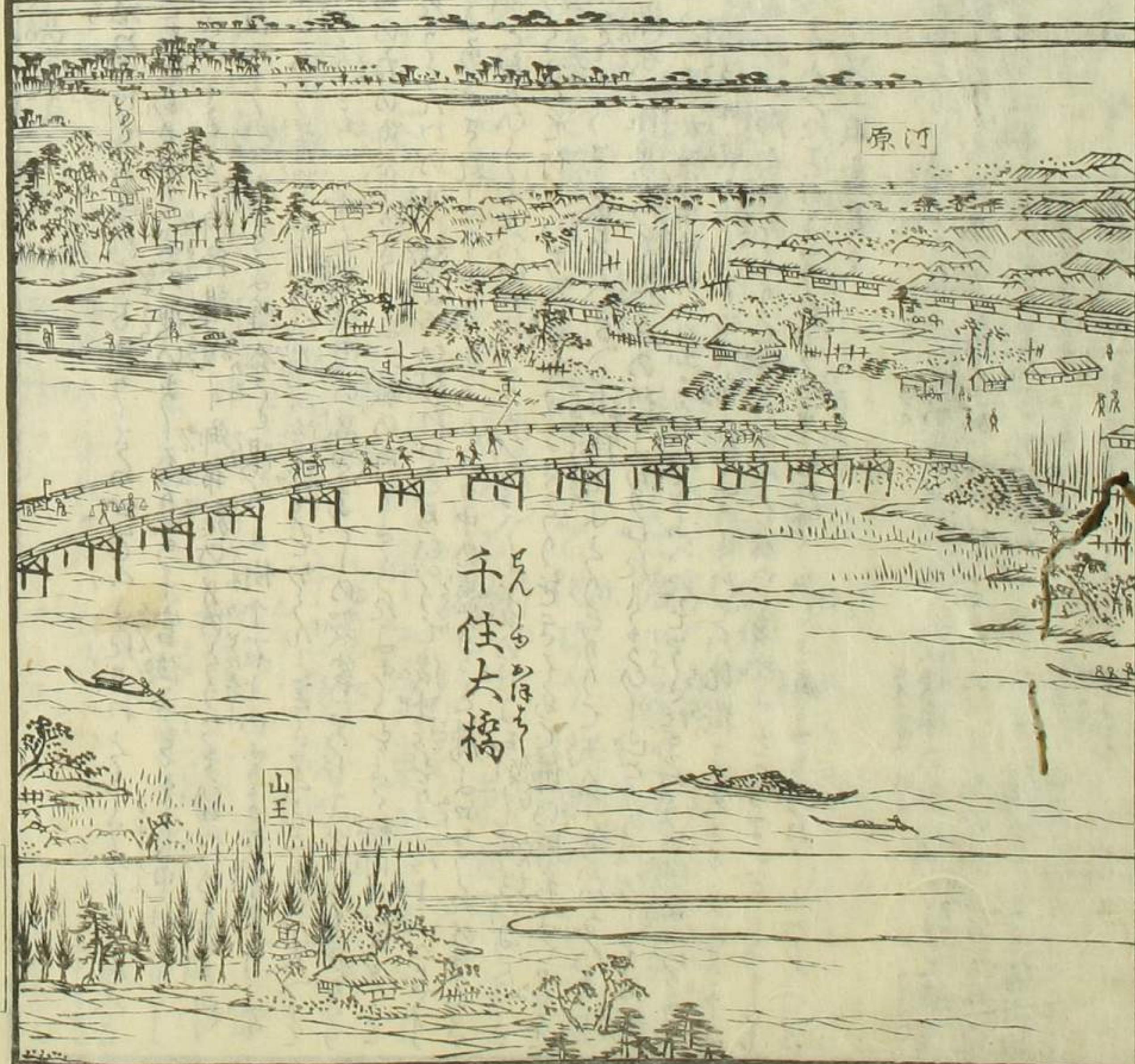
嗚呼。賢き。うれらの老供。わざと。僧侶。後。才。と。厭。ゆ。故。諱。の念。あく。と。往。生。要。集。と。述。自。作。を。利。益。保。衣。の。れ。應。よ。て。捨。身。の。行。え。り。した。よ。ま。い。ヒ。ト。リ。の。ゆ。の。何。れ。く。も。一。因。の。名。利。よ。ろ。く。それ。よ。う。か。の。佛。教。す。む。い。ね。れ。こ。と。後。世。と。り。と。そ。と。う。ら。と。之。が。の。な。よ。說。法。利。難。の。名。の。御。布。施。す。よ。御。階。の。品。す。ま。く。の。袈。裟。う。も。よ。り。と。も。を。わ。う。惠。心。僧。都。勅。よ。依。泰。内。称。讚。淨。土。經。を。侍。講。申。さ。れ。か。敵。感。の。す。幸。多。と。之。御。衣。を。錫。り。一。う。右。御。方。御。衣。を。錫。られ。一。返。か。よ。是。と。榮。と。も。

千住川

荒川の下流
隅田川の上り

隅田川上流

荒川の下流
隅田川の上り



熊野 権現社

同

北

の

方

千

住

川

の

橋

より

祭

社

伊

勢

冊

尊

一

坐

社

傳

云

永承年中 義家朝臣 奥州征伐の時此地より河を渡りんと云々^ノ奇異の靈階あり故に鎧櫓を安らし紀州熊野 権現の神常を此地より

とて 熊野 権現と稱したと云々^ノ

按此所推現赤鳥明神也れも紀州より坐あり又此地より兩社のもの所謂ありとされども今は記すくと詳しきと澤モ余教を傳ひと能と云ふ事もあつてをいと云ふ事も

千住大橋

荒川の流より架せ奥州海道の咽喉あり橋上の人馬ハ絡縛

とて 剣断す

橋の北壹貳町を経て祇舎あり此橋ハ其始文禄二年

甲午九月伊奈備前守奉行

とて普請ありしより今より連綿たり

甘路山延命寺

應味院と号して下沼田より真言宗の石刹にて

行基大士の草創あり奉尊

阿弥陀如来ハ同作みて六門弥陀第二番

同として春秋二度の彼岸より參詣多し

富士浅向祠

同所川下の方深林の中より土民傳云昔此地より足立莊司

三番目五番目

六番目七番目

と云ふ

嶋左衛門尉あり者よりとて

城をめんとと

と云ふ

嶋起より沼田中補のりとて送りとて三番目

六門弥陀第一番孤起より足立庄司

余本の施院等の縁起上り

と云ふ

外化す故又是より隨ひと父母強

婚を替へとて此よりとて此よりとて

忠へと竟より荒川より入る

又沼田川より云み住川の

嶋起より

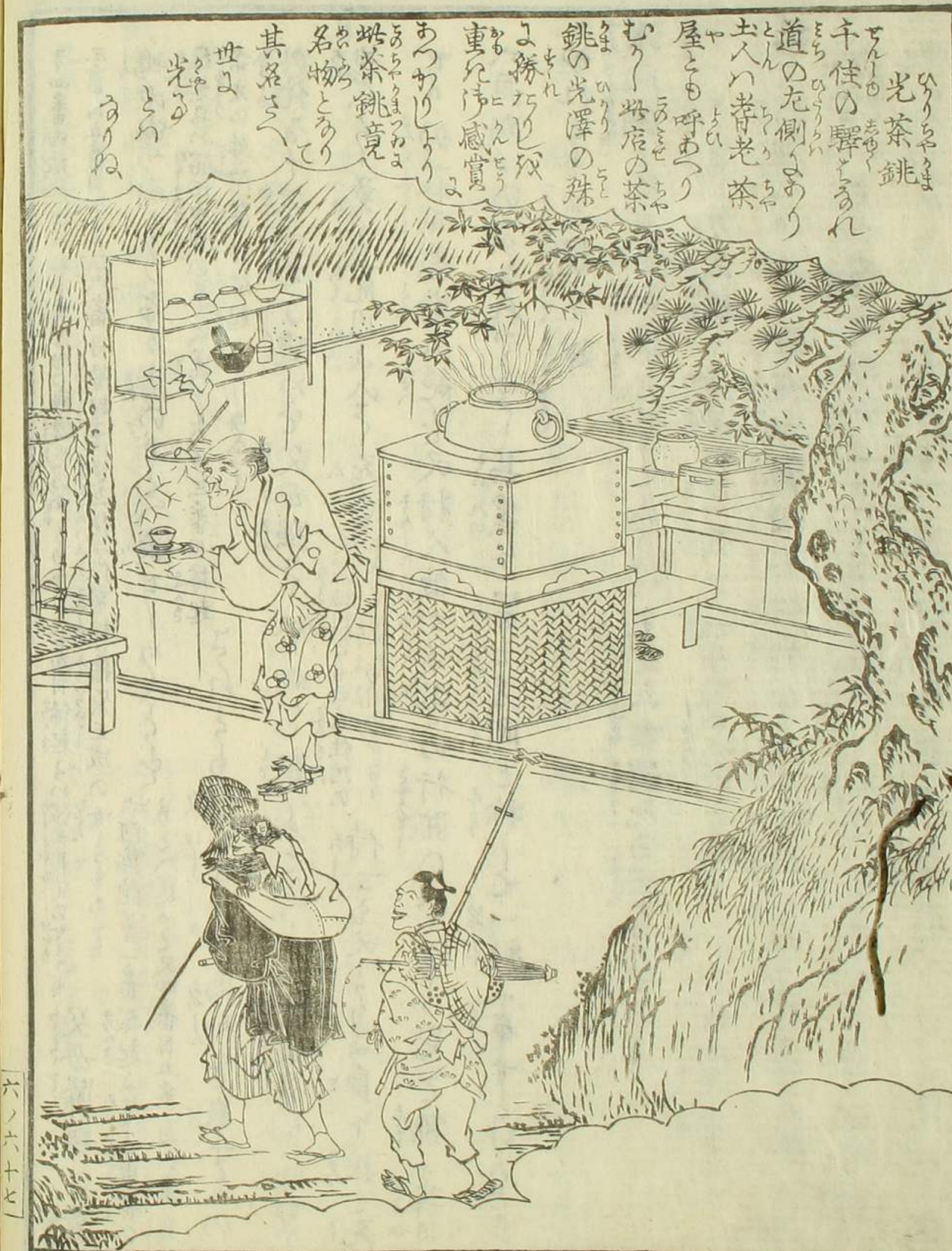
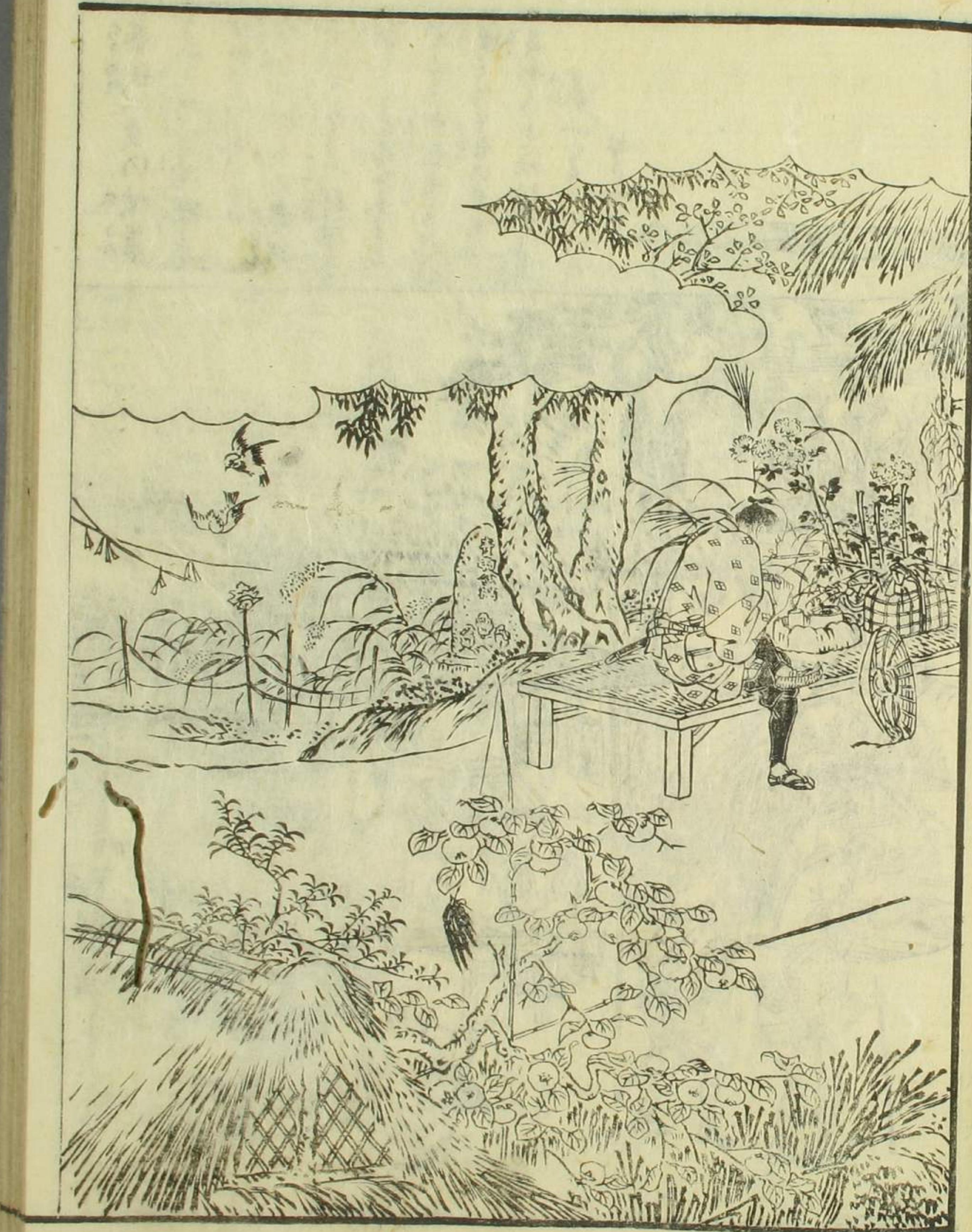
足立庄司の

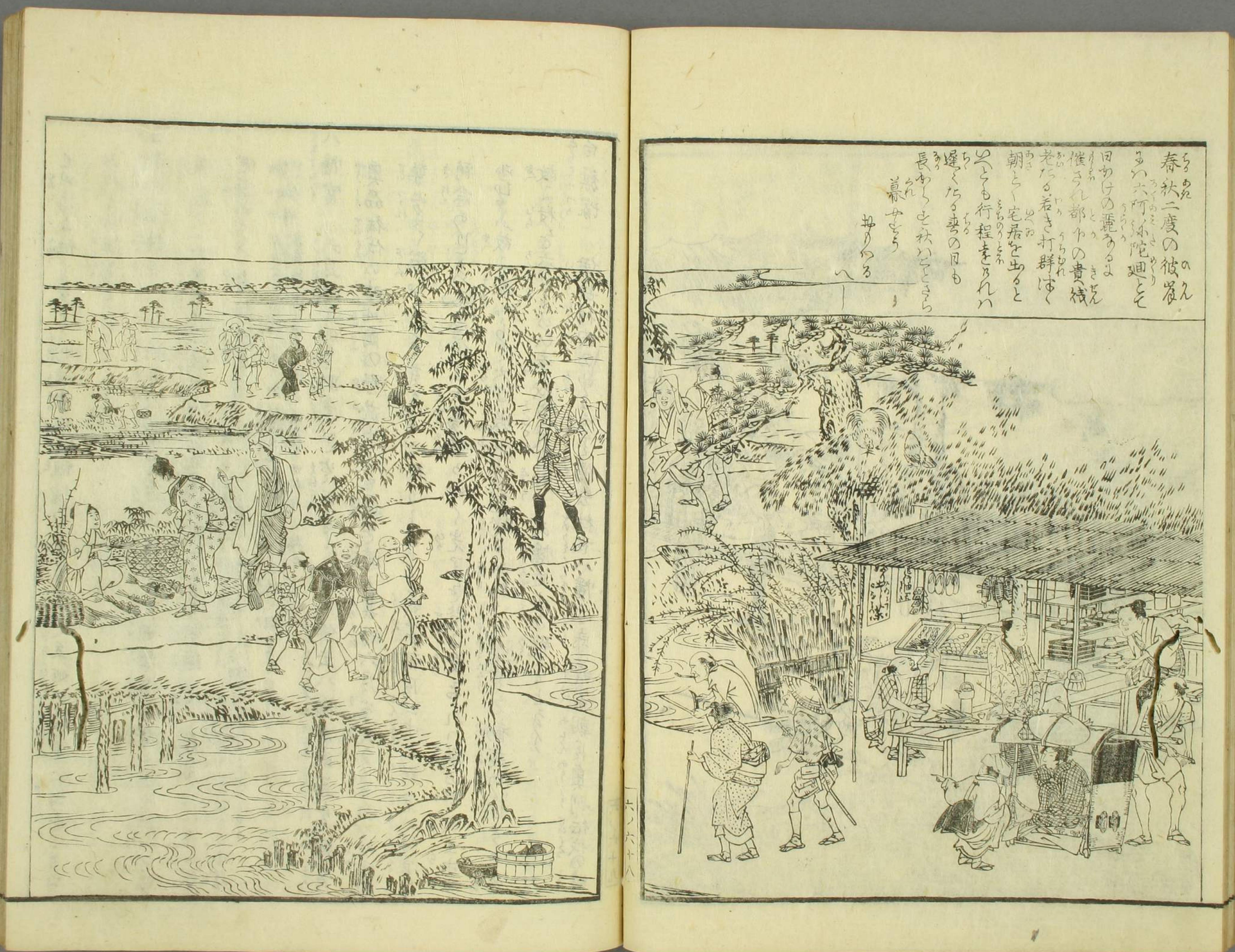
侍女も又とて身を投て死

されとも彼女が常より佛神を殺するの

外化す故又是より隨ひと父母強

婚を替へとて此よりとて此よりとて





春秋二度の彼岸
多の六阿弥陀廻と
因かけの麗ありよ
催され都下の貴様
老たら若き打群浦
朝と一宅居を出ると
ゆとも行程をりれり
遅くちる季の日も
長かくも秋いどまら
暮すまう

此地より住りて則此寺の元祖たる當寺足立姫の墳墓と稱ゆるゝのあれとも詳るゝと

五智山總持寺

西新井材

爰を真言宗

と号すと遍照院

と号す弘法大師の

草創よりて奉る弘法大師の靈像も同作すと靈驗著く毎月廿一日みを拝帳ありて參詣額拂は（或人云尚寺弘法大師の靈像ひのう北總真間山弘法寺より置け）

阿伽井

其無縫あり此井より則弘法大師の加水水あり洗目服第より用ひよ

八幡宮

六月材

爰を別當を空天寺と号すと傳云八幡左郎義家朝

臣奥州征伐の時此國の野武士との道を遮る其時六月空天寺より味方の

勢勞々戰ひとどる氣色もるかくよらず義家朝臣ひ中又鎌倉八幡宮を

祈念あじき不思儀よ大陽繞ら如く先手を背え走られ敵の野武士木日

小矢の故よ眼くらむ大敗北へね依て此地より八幡宮を勧請あじとと此

故より材を六月といひま絞天と称す又幡正山と號すと

白旗塚

伊與材田のゆゑを傳云往右八幡左郎義家朝臣奥州征伐の時

此地より向旗を建勸請を當へて此必ありと近頃返此塚上より小祠あり

其傍へ立寄りのあれに崇あまし故社荒廢よをもひれども其傍より再建も

せざりと今塚をめりを存なり（今も此塚の上よりあまつたもの登る所を極む此邊の田面を向旗耕化と

り）又應據と称するの五箇所あり（鳴首實檢あり後其首を埋めし所と云ふ）

萬德山明玉院 梅林寺と号すと梅林材より新義の真言宗と号す

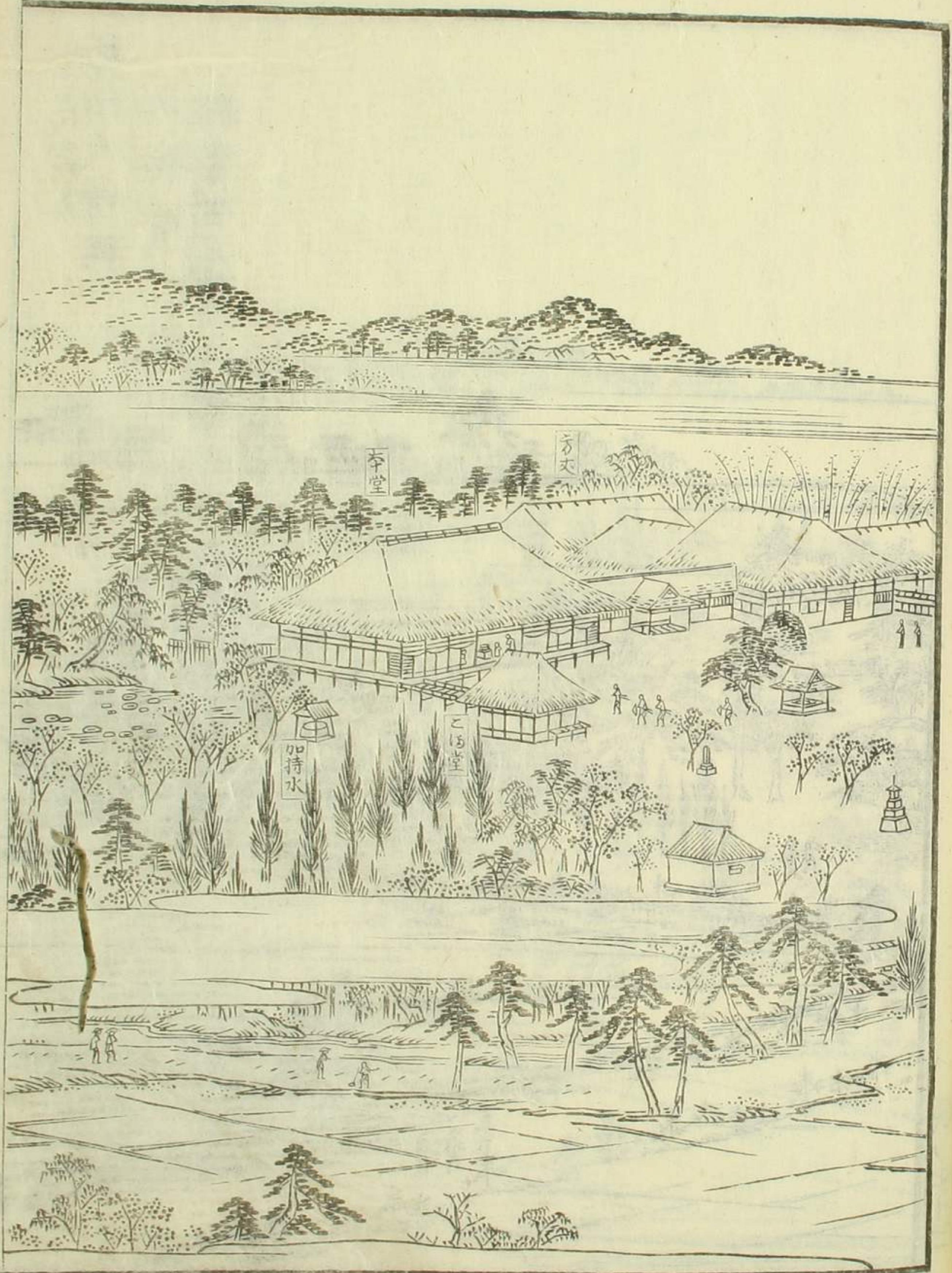
地菩薩を安坐と寺記云當院元基志左三郎先生義廣の八幡左郎義家の孫六條判官為義の三男あり

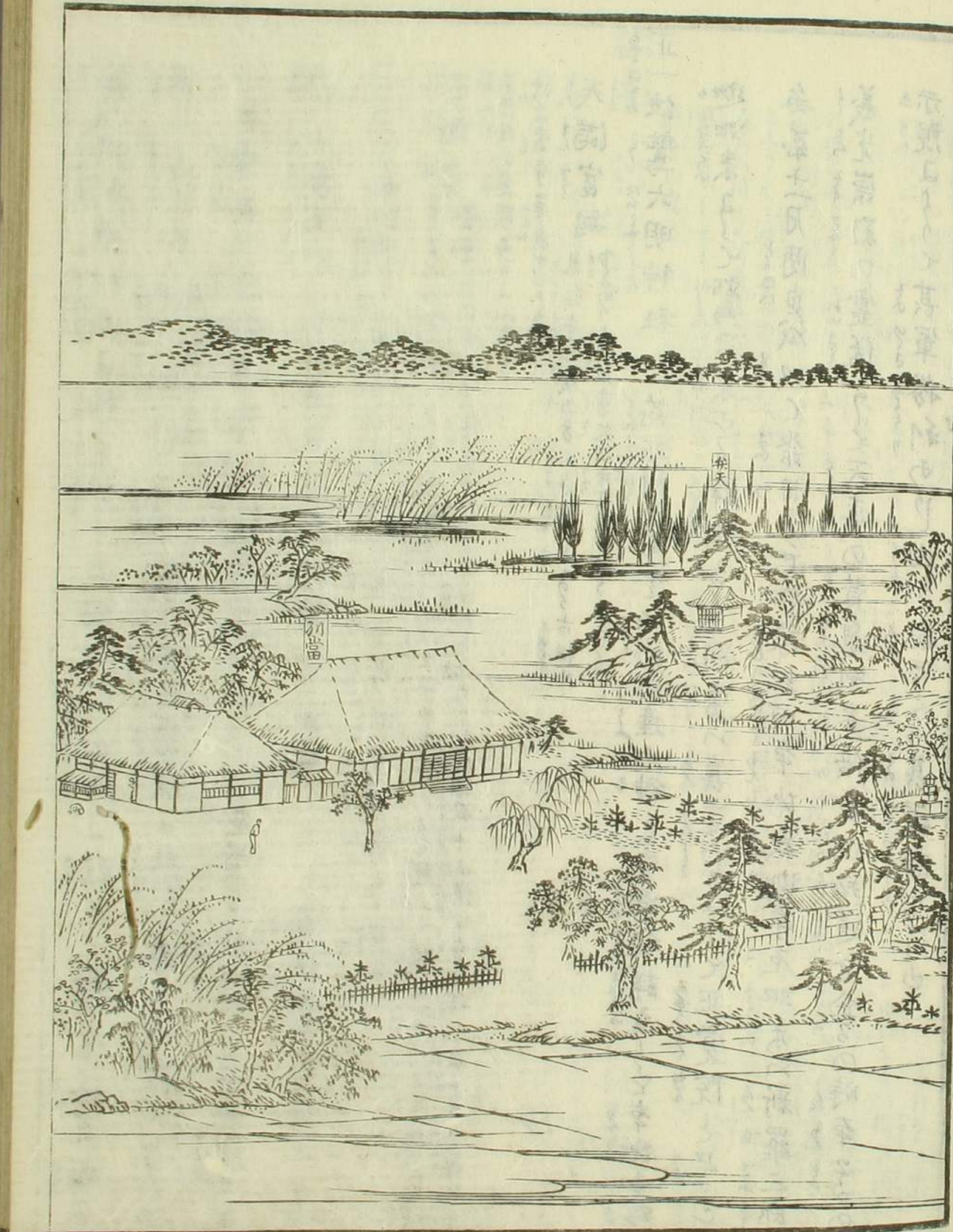
梅戸院を創基し新願所とと當院是より昔より是より先生治承の頃賴朝初

政が兵よ敗らる其後同左馬み義純の孫より蟄居して此梅林材より住む（今寺の外右の方を東とすまほの往古そのうちのものより）

義純の弟宅の跡ありと云ふ其裔常陸み久廣二代の孫也當院の傍より始て天瑞宮を勧請一鎮守とぞ又神告より姓を梅田と改め小ち郎と号すと又室より後永正年間冥東大より乱る同左郎左馬久義

（久義の父より後左馬みと号すと是を）





梅田天神祠
不動堂
別當明王院

而ひ丹別嶋材城又移り住り又同四峯山城又移りとひとも遂に敵の

爲よ生害と長子久頼をひ久友も其後國民當院又亂へ遂に破壊ひ其後慶長の頃頼専坊舍今地より遷りて寺院を再興し真知法印を以て中興定山とす又寛永二十年の春

大樹

御放鷹鳥の三毛立

とくセモひ摩も當院の末由を守り石御寺領等を附せらる天満宮祠不動堂本堂右の方すあり本堂不動明王ハ弘法大師の作にて寶鏡上人根東傳法院草創あり頃護摩堂の本堂より安坐ありして天正三年故ありと花落歌中山清保寺又寶元年不思儀の靈験あり仍テ

正一位鷲大明神社

花亦材又此地の產土神とぞ祭神詳りと本地を釋

迦牟尼佛とて鷲鳥又葉毛の鮒相あり別當ハ真言宗よりて正當院と号を毎第十一月酉日以て祭日として縁起曰奉地御幸迦牟尼新羅三郎義光崇教の靈儀とて天喜の昔奥列安倍貞任叛逆を企るの時奉毛の示現よりて其軍勝利あり由を記らる其說詳りと

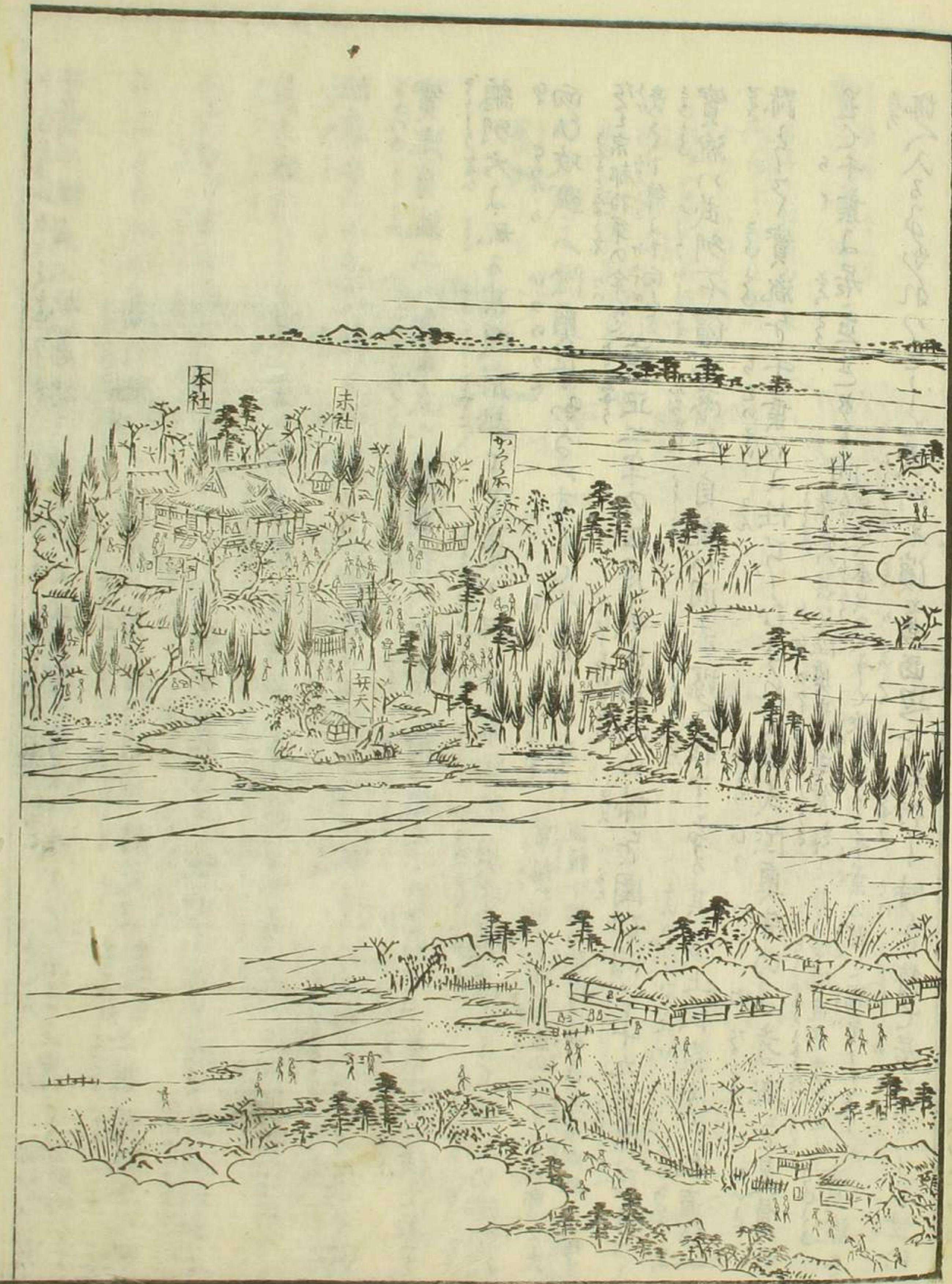
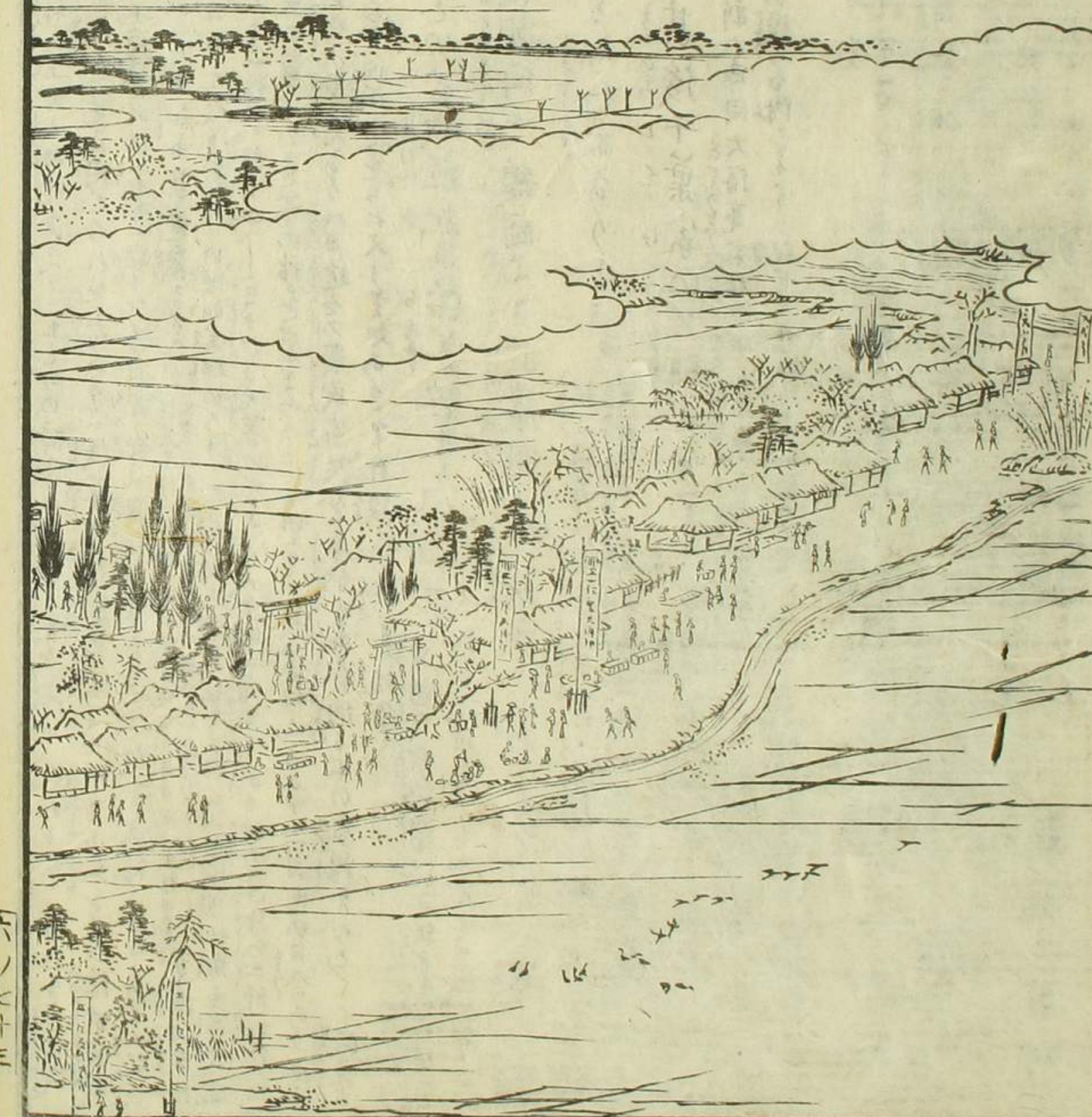
石濱 今橋場といひ義經記又治承四年九月十日 東船に轉朝陽田川と號て武藏國より戻り右大將頼朝御下總國へ武藏國へ打綱ゆふとある条と云石濱と申れり江戸を郎り知行不ありと云云 按曰同書江戸を郎・重長・八箇國の大福長者とあり則ちあよ所領のうち其後千葉家の所領と云代々恩を知行せりと云 田原北条家の右文書より文中又善門院京の隅田川に跨の跡の跡を加へたり又本内官内少輔石濱の今津を領一或いは今川の領すも附らる記すり余て寺の總泉すの事本内官内少輔石濱の領すと云石濱の事跡合考より起り如く神明宮の北の方その体止るへども

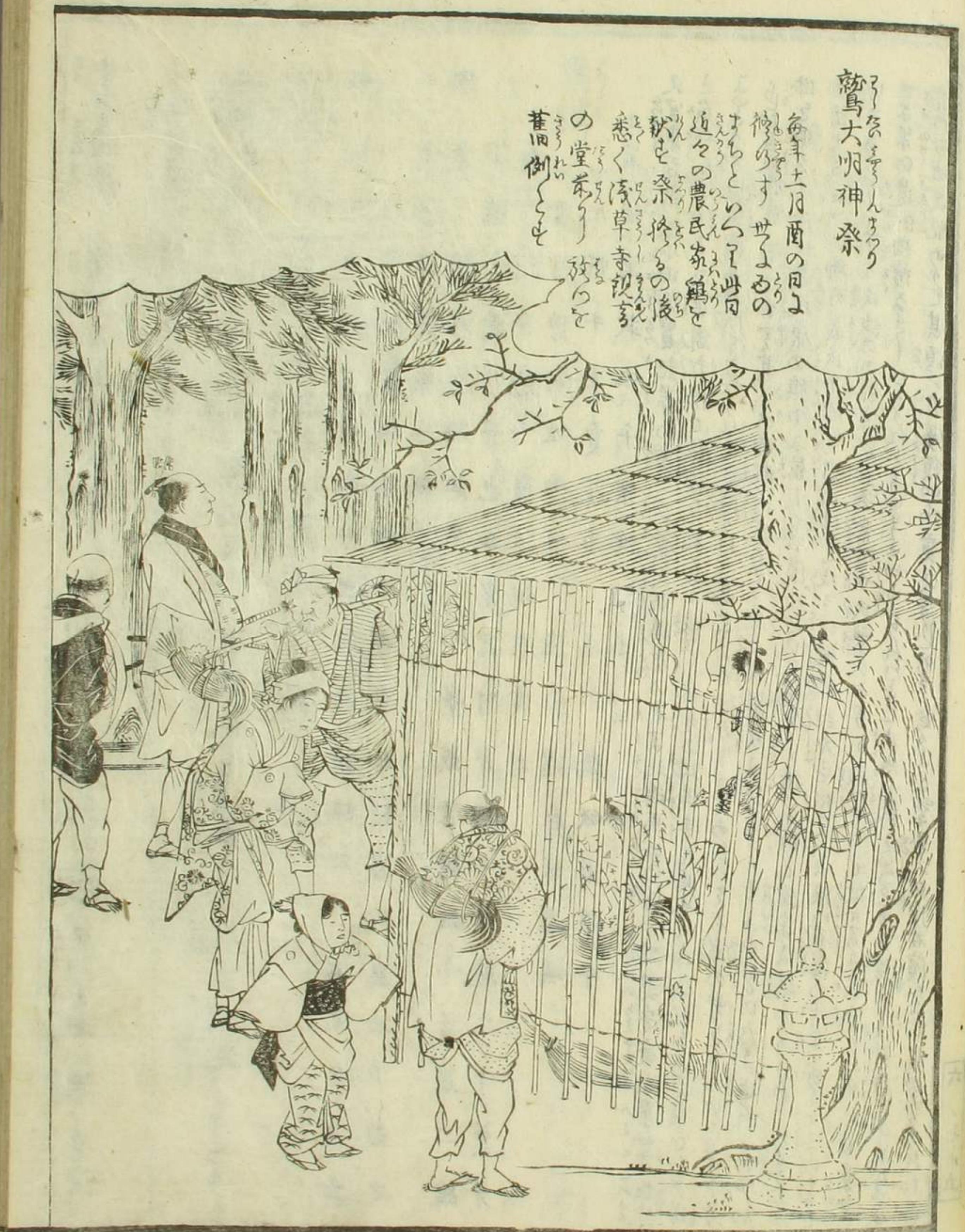
石濱城址 其地今江戸の事跡合考より起り神明宮の北の方ありと云 按曰善門院供養の沼隅田川瀬の跡と舉たる文中又善門院京の隅田川に跨の跡の跡を加へたり又本内官内少輔石濱の領すと云石濱の事跡合考より起り如く神明宮の北の方その体止るへども

石濱 今橋場といひ義經記又治承四年九月十日 東船に轉朝陽田川と號て武藏國より戻り右大將頼朝御下總國へ武藏國へ打綱ゆふとある条と云石濱と申れり江戸を郎り知行不ありと云云 按曰同書江戸を郎・重長・八箇國の大福長者とあり則ちあよ所領のうち其後千葉家の所領と云代々恩を知行せりと云 田原北条家の右文書より文中又善門院京の隅田川に跨の跡の跡を加へたり又本内官内少輔石濱の今津を領一或いは今川の領すも附らる記すり余て寺の總泉すの事本内官内少輔石濱の領すと云石濱の事跡合考より起り如く神明宮の北の方その体止るへども

鎌倉大草紙云

鷺大明神社





千葉久胤直上松憲忠又説つれ又子兄弟共一味にて成氏又背く

成氏の背く

馬頭も

千葉久胤直上松憲忠又説つれ又子兄弟共一味にて成氏又背く
馬頭も
うよまと放千葉大助満二男陸奥守入道常輝又子基房ありふさト總國馬加の跡
う打て出成氏の味方とありて合戦と竟る亨德四年三月廿日胤直敗北
其子胤宣をうひ千葉入道常輝全吉又中勢入道了心等患く切腹とす
陸奥守ハ千葉へ移り千葉の跡を絶ゆるゝ上松よりハ中勢入道了心の子息
實胤自胤二人を取立下總國市川の跡又權籠そくらうとよをひと千葉家二流とれど
總別大よ死る其頃京都さかまち東下野守常縁陸奥守退治とて馬加の跡まかを
向ひ攻戦ふ陸奥守ゆるいすと千葉へ引退くひきぞと常縁の千葉久胤の六男東六郎とうろうを夫
佐々木京都市さくざき軍の手てをうけ康正二年五月成氏市川の跡を圍む同赤坂あかさかへ移り其後上松家より胤直の一
實胤の武列石濱いしはまへ落行自胤の同赤坂あかさかへ移り其後上松家より胤直の一
跡しきうよ実胤を千葉久胤に任すむされと成氏陸奥守の子孝胤こういんを見負ひいきあ
まを千葉久胤に任すまを孝胤こういんが其父陸奥守入道常輝と其子放胤直兄弟を亡おとす
近々の農民家鶴つるを殺すねり後悉く淺草寺あさく寺觀くわんの堂前まへを改め
舊御きゅうごとも

中を述懐し濃冽又宋居を依り上松家より寶龜の跡を兄の自龜に賜り玉葉以

ニ住を是を武列の千葉と号す

意を據る
以上簾倉大草紙の

南朝紀傳云丙子康正二年二月千葉の家も成氏と上松と相論又トコ

ニヨリウレ雅龜と園城寺の某武列よ頗く云云

梅花無盡藏文明丙午隅田河詩註云

隅田在武藏

下總兩國之間路傍小塚有柳道灌公爲攻下總之

千葉構便面題詩註云八景或雪讚獻千葉蓋上總

書下總千葉所管也今寓武列者與上下總之千葉矛

雪月碧湖煙雨後漁歌鐘色送鶴鴻

蓋祝寓武文千葉惟種也

云

又室東右戰錄小田原實記等の書より葉大助備嵐の庶子北總馬加の主陸奥守康胤墨母牛惟龍

と布督をあるとひ康胤打勝て總領をねどを依り宿老の田博寺た馬久郎惟龍をゆさびひ戸内海

みづノ方田道雀と麻陰と頼りへ道灌れり高京子と微力ありをあられミ石賓の若を守りて是を守

らむ其後惟龍自身から其子ひ郎胤利をもと上松朝良又仁へりりちと南方の方又退れて戸内

海を退去し後北条氏康の旗ひふ属一と石賓近辺の所領を安堵一跡を能宗と讓りうされと天正元年

癸酉十月右行の御所義氏下總寛高の陣を攻る頃胤宗討元を依り其後の石賓の千葉あるるのをも

男子あつてより氏政の下かうて北条常陸久氏繁の三男を娘あくして彼女ある妻合已以郎胤利と名乗

せふ紫の遺跡相續るく一むちうれともいまと幼少うれいとそ本内上野とゆる者よ預らう上野討元の後の其子

宮内少浦支配ありと其頃の石賓領四千貫文ありしれども其子よも葉事人の後石賓を没す

事跡合考よりと石賓の義經記より後美四年庚子九月十一日

東、延喜四年十月二日
頼朝を井隅田の西泊を

地今ひ入と喰ひと云々

流らるとあはれ井川河称川の

云々又按此石賓の海の天西又名千葉の一部也ナ一ト後廢ぢうるを

とれ

時二二日の兩よ洪水岸を侵し軍勢攻渡し兼ひよあれハ武衛江戸左郎

車長よ仰ア浮橋を保めむと重長あつて諾つと依て千葉又常葛西

兵備重兩人江戸左郎を助むと之を行所今井栗川をめう一トまくらひ

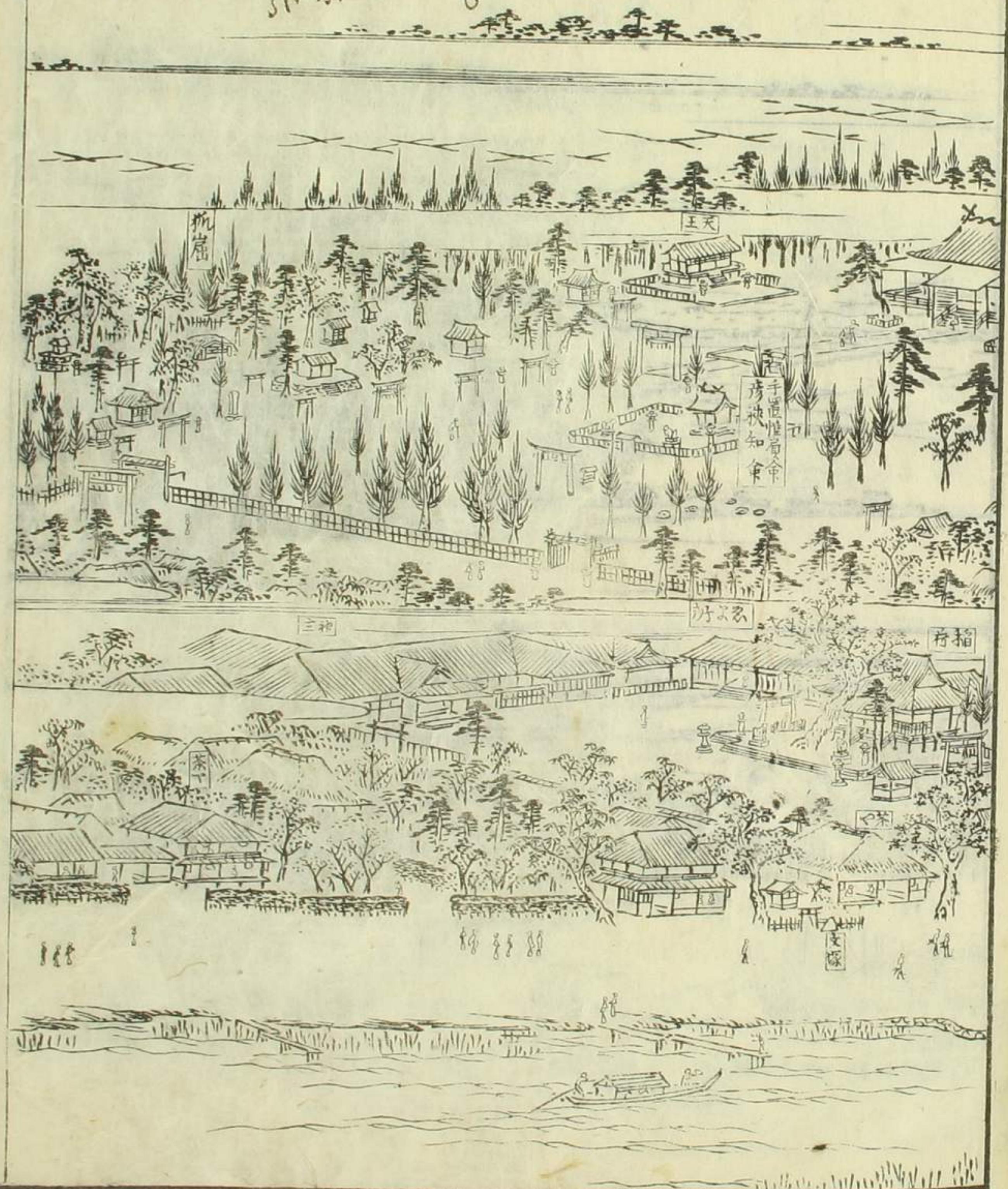
兵備重清喜えとのたらう

よも栗川をめう一トまたおとねうかえとのたらう

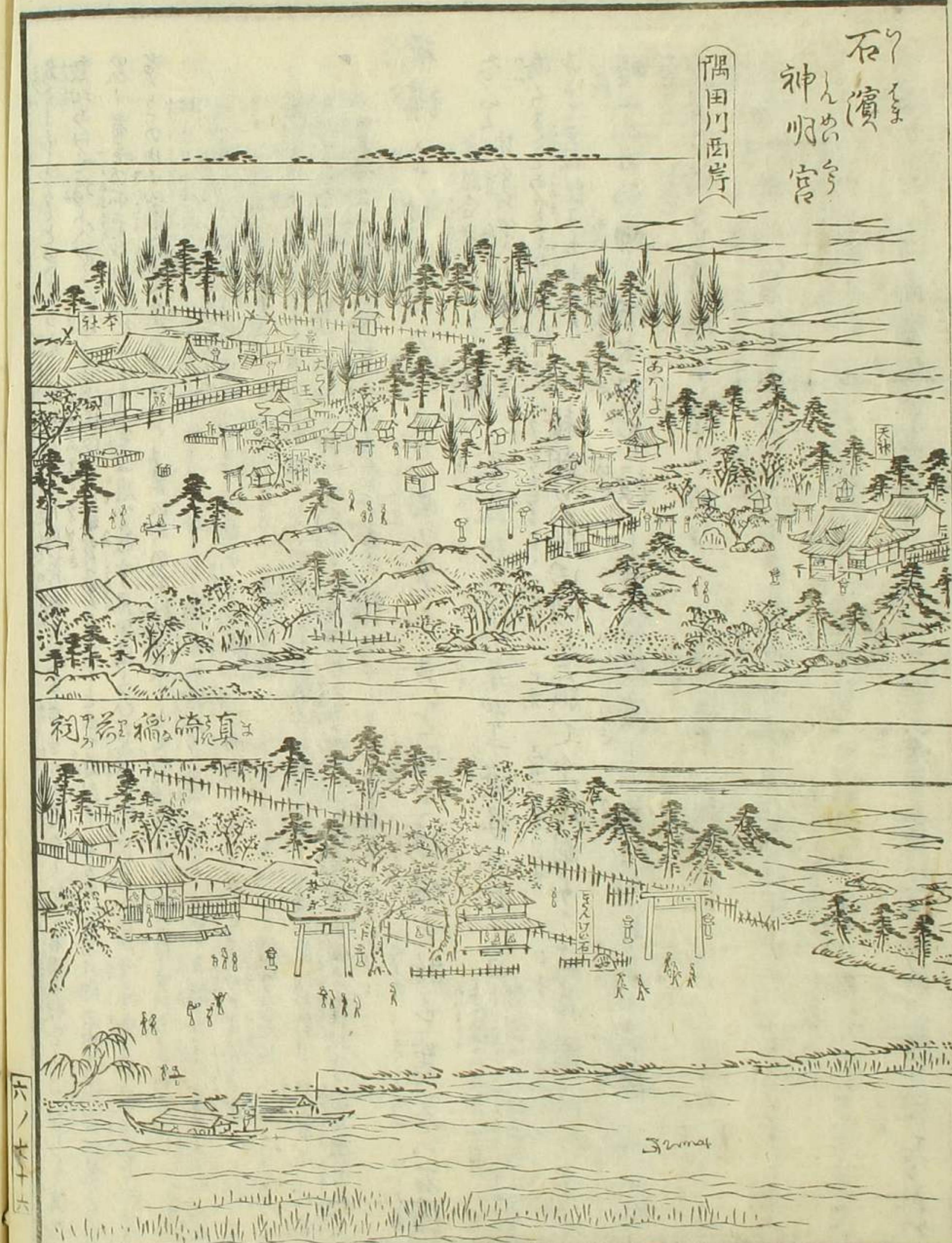
よもとおと群あくも海人の釣舟をね多登せ江戸左郎が航行所うと海あ

石賓よ折節西國船の着たりとね千艘集め二日の中江浮橋を組むれり

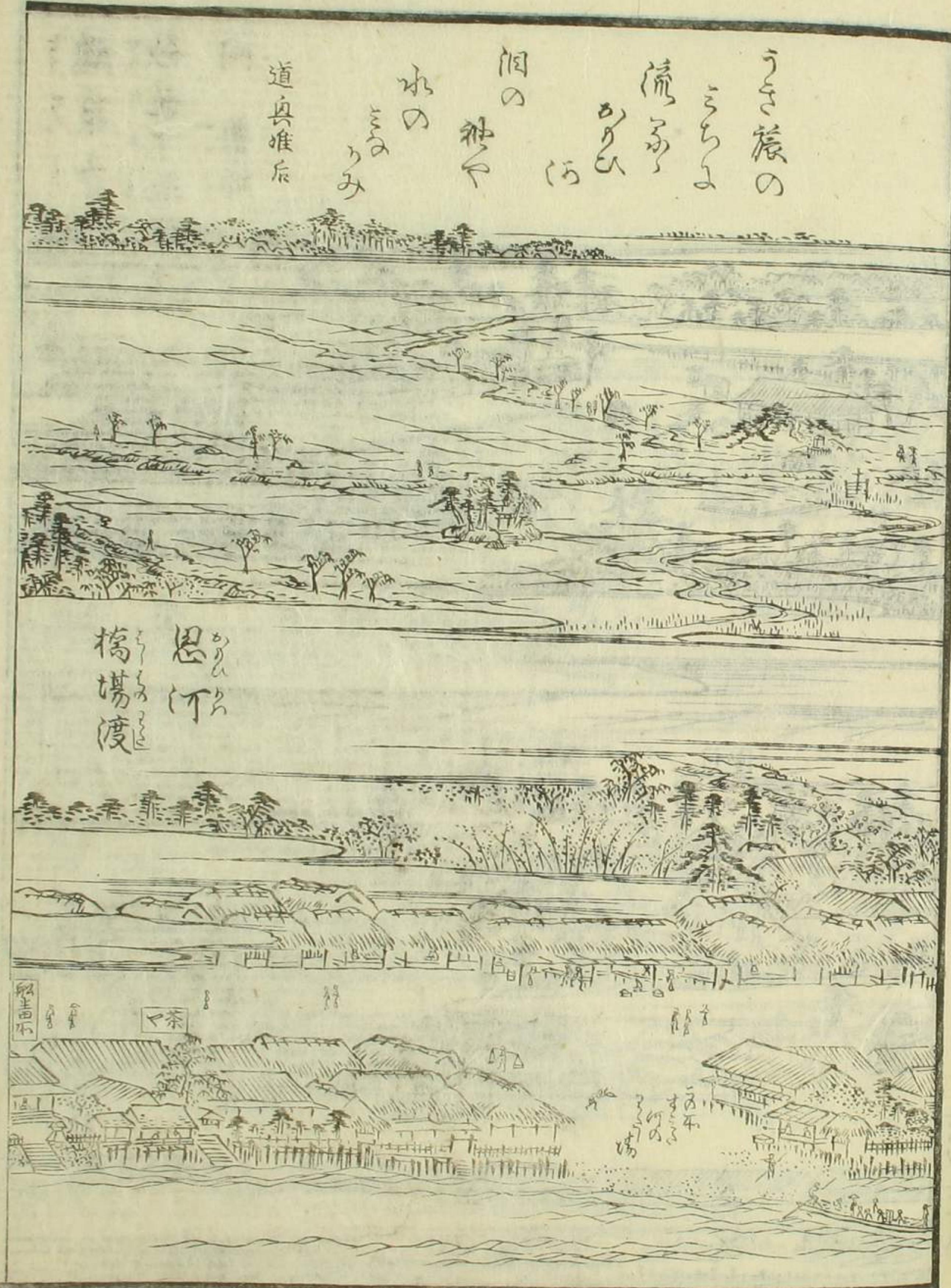
竹の
紫り
一本
芭蕉



石の
神明宮
隅田川西岸



其二

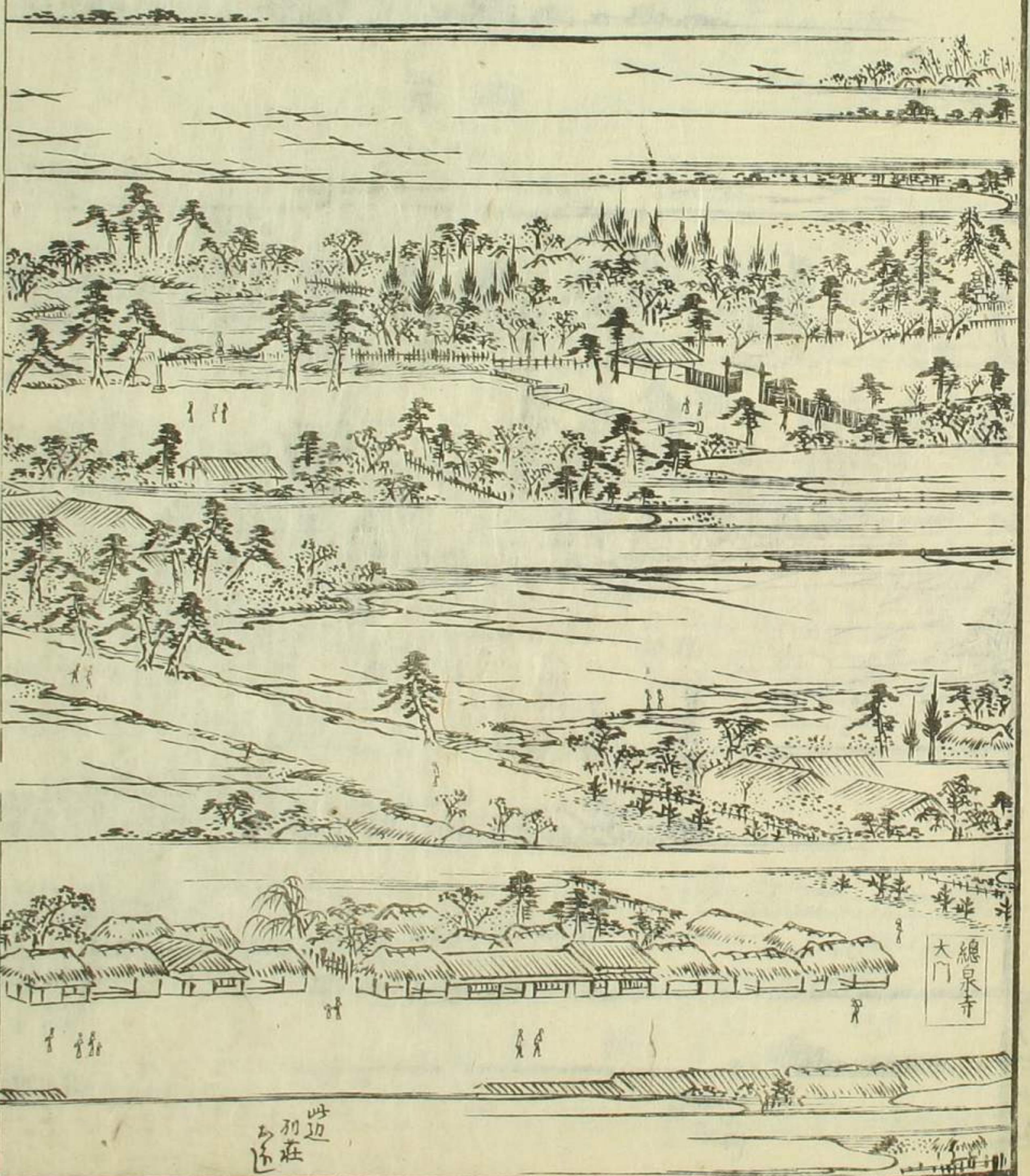


道典准后

うきの旅の
間の
水の
神や
流る
りみ
うらよ
かひ
け

恩
橋場渡

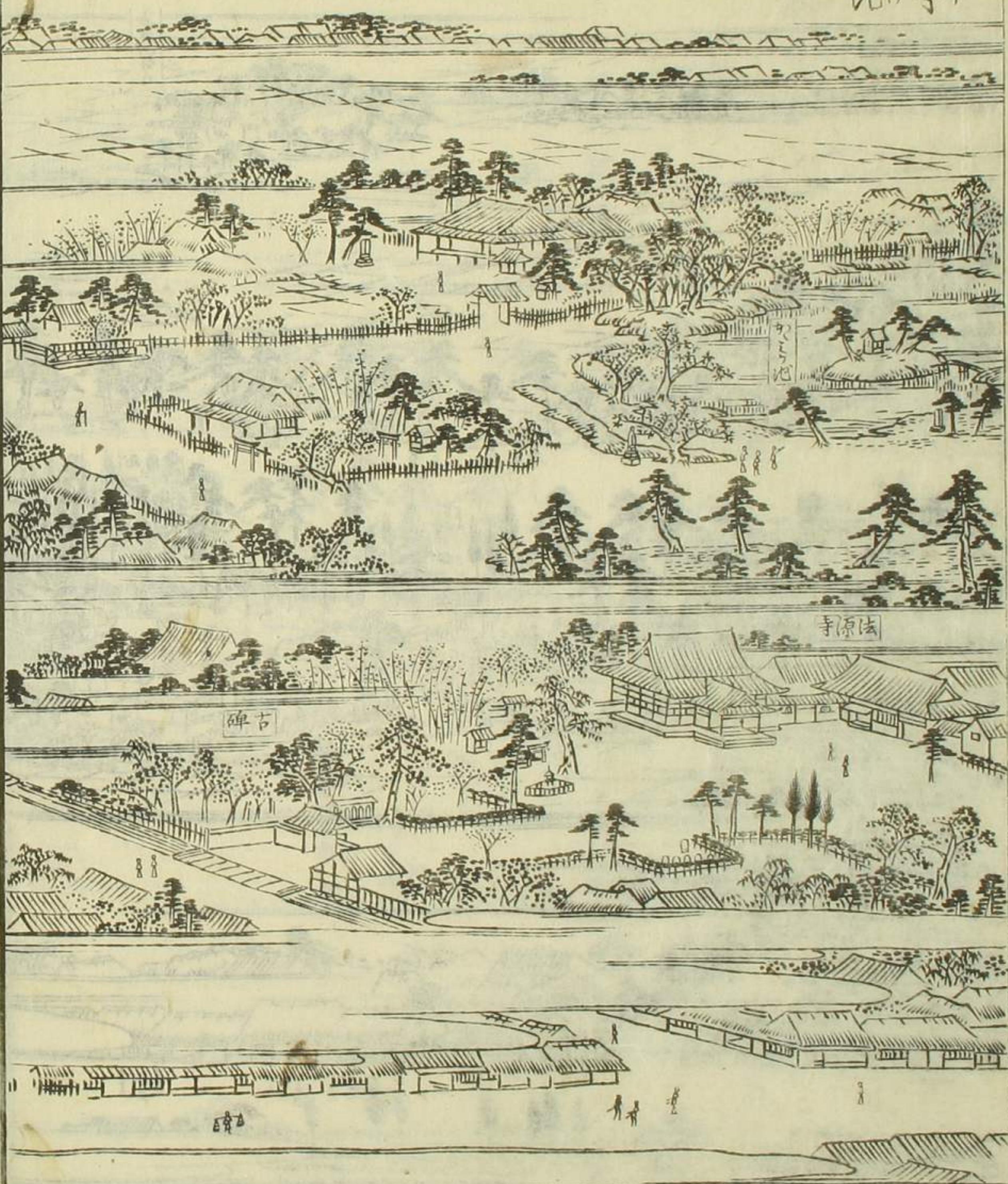
其二





法源寺
鏡

其五



佐殿神のみより仰られた井隅田を打越て板橋よ着ゆふもく
夫木抄
隅田町むかひまうと今こその身を浮橋のあるせうと申れ 光俊
梅花無盡 藏詩註云 隅田在武藏下總兩國之間路
傍小塚有柳道灌公爲攻下總牛葉構長橋三余云
挿手源平鹽裴記より光俊鹿島記行等の書より載る内ノ便切よまうと不の橋あり。源平鹽裴記
をさへ本記等其い事の書みも浮橋の名とし。浮橋の号をさへ川の道権下總の御禁裏を攻る頃
舟筏の事もよまうと云。いはれし其橋の頃のりのと云。云付て考へ。今のうち一場と申
一町もあを河上神明宮の門の通り其舊跡みえきをさへ里老(里老)此地は法源寺大門の通りをさ
今のうち一場より南の方。監船所のあつち。共に之の橋の右端水底とのこども
かくよ仙くつれよふくて考へ。其の梅花をそなへ。所謂長橋。二条と構をす。意よ協へる。もん
いしやう

朝日神明宮 檜陽より石濱神のみりて或人の説によれば。此地は神明宮なり。或信小檜陽
神めりも早く祭神伊勢よ因にく内外兩皇主神宮紙御まつる社傳云云
人皇四十五代至武天皇の御宇神龜元年甲子九月十一日慎坐と云
牛頭天王社 本社の左の方より檜陽の守とされ。毎第六月十五日より世又以入の押合
祭して神輿今戸櫓をつらて。氏家の董らしく。神輿昇よ。其神輿よ

角田河渡

きくたこうのよし

名子

とく
さん

都鳥



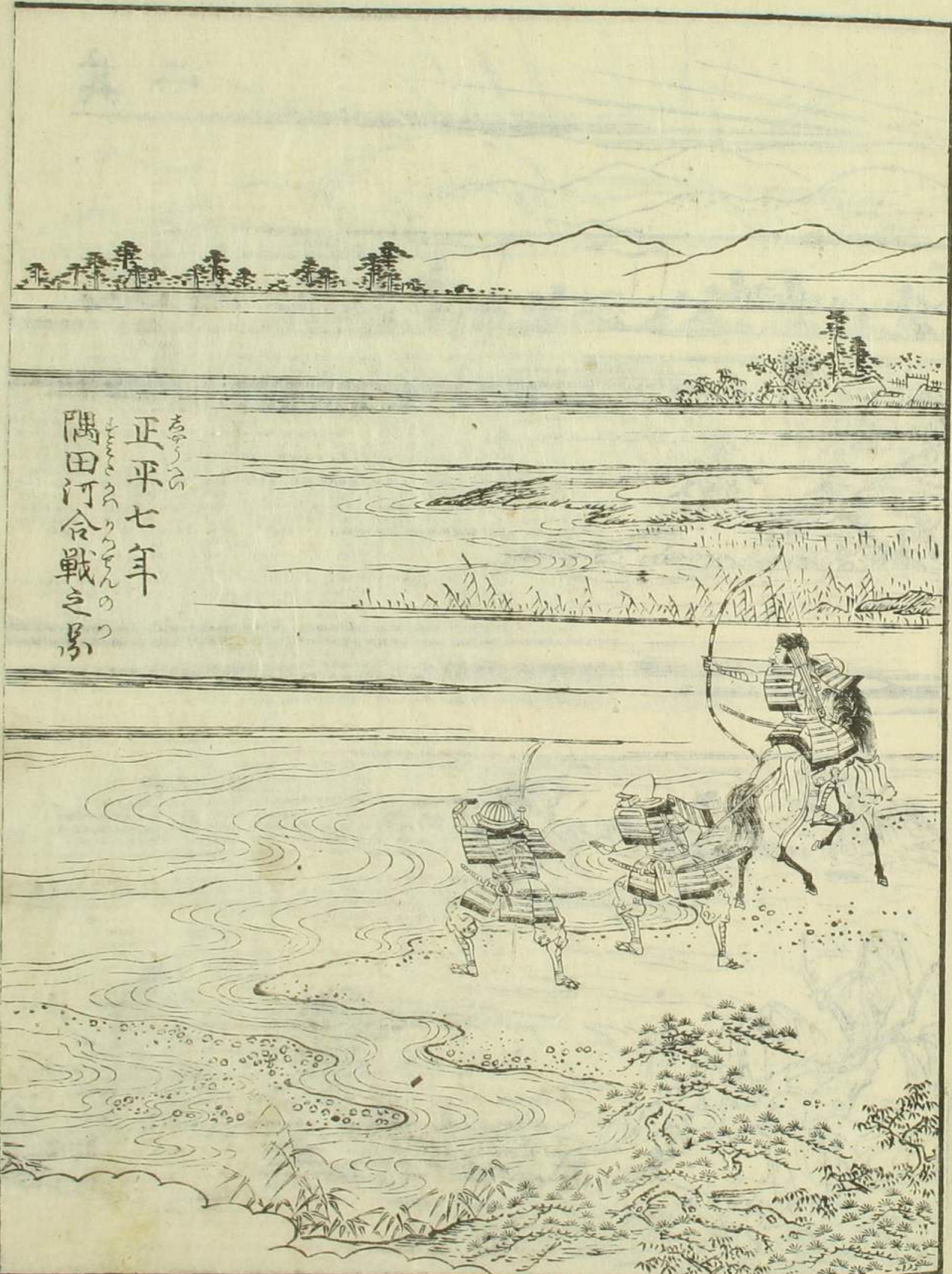
六〇八十一

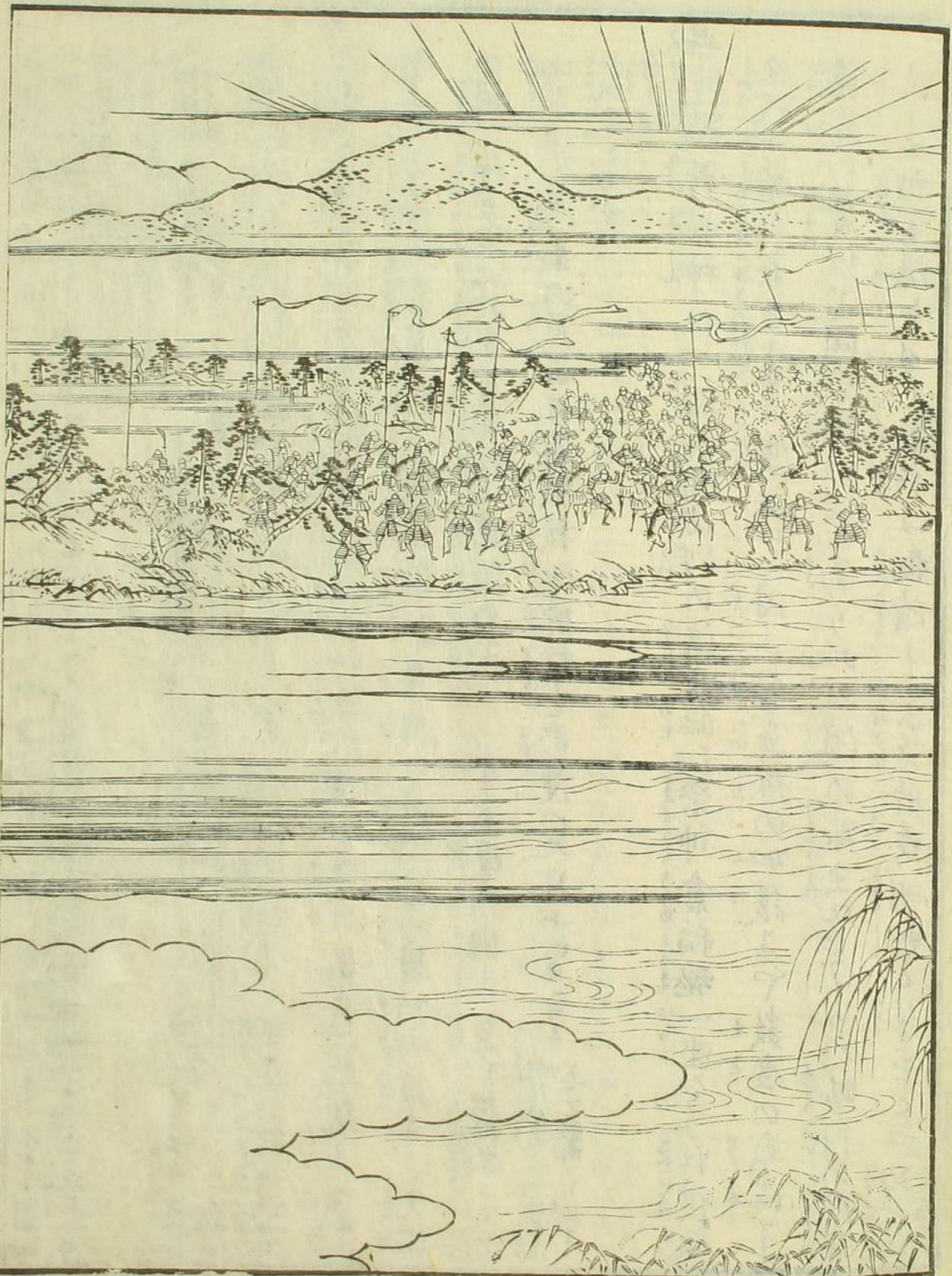
ゆうや
ひと
とや

在原業平

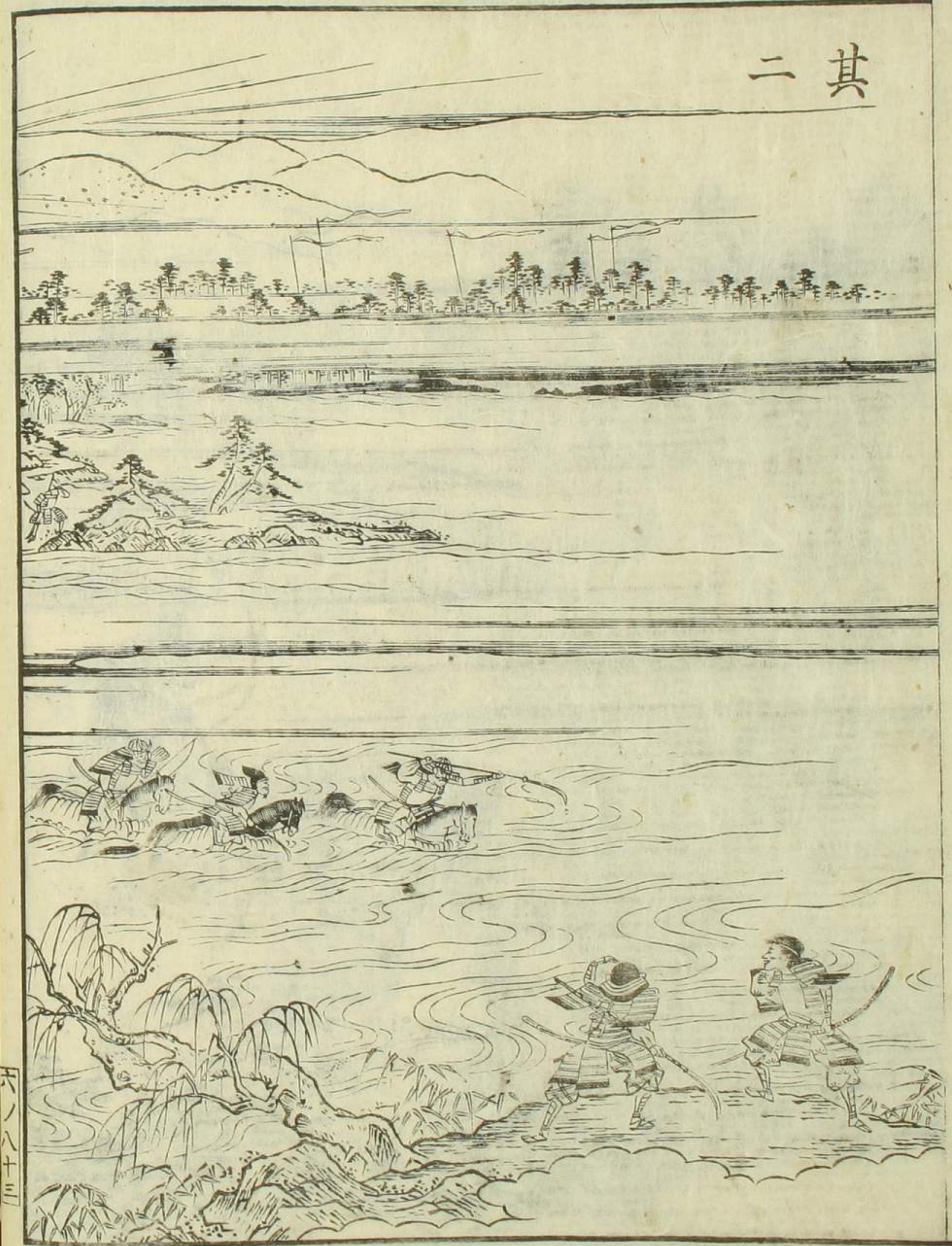


正平七年
隅田河合戦之図





其二



此を附る事無く御廟ノありより押合ノ故に押合祭と云ふ事。御食者等々ノ社
小倉神社、霧室基あり。家根の知より天正十五年丁亥四月山林住人高須美作指之又同棲れ又同年陰本三郎
翁翁者半と申す是ハ則翁社

神主の名子にて代々於木氏有り

天満宮

本社の右の方より神像へ舊神の真作にて明和四年丁亥六月五日高辻前大納言筋長
勧請ありとあり額ハ天満宮とありと云はれ於大浦せ長筋に之其餘未社でれども省略す
當社ハ建久正治の頃般船局の北より一とそ甚ばに大社より寛東の諸民伊勢
小森宮セんよりかと申す事ハ當社又詣て板を受取て殊アみ皆
宇都宮等の神尊信一神田等を寄附此地昔ヒ奥州街道にて文治
の頃ハ簾倉左大物家モ当社又詣めとて境内樹木多く簾倉として
上久下モ毎岁六月晦日名誠祓を行ひ祭禮ハ九月十六日より此日社沈メを以て生
後間是を生義

參と聞へ

真先稻荷明神社

同所隅田河の流より臨ひ祭神食稻魂一坐なり。社傳云

久代千葉久兼胤家より靈附を傳へ此靈附の加護にて數度の戰勝了

先登の奉

之

同守胤の代より此石濱の味主たる川味内の守

トテ彼靈附をりと稻荷又勧請

之

真先稻荷明神と号と云。往來之傳

トテ彼靈附をりと稻荷又勸請

之

思川 稲荷のあより橋場の渡場へ行道を横まれる以入の小溝をり。治承四年唐子廉倉將軍頼朝此地を過ぎて河を渡りて船を洗ひ。故に駒込川とも呼ぶ。里民云傳。

按。治承四年庚子十月廿七日佐竹冠者秀義追討のみ。頼朝もしく進發あり。同年十一月西日常陸國府より着て。其の下にス。小糸九代記。文治五年七月十九日。翌年九月。泰衡追討の前途より頼朝隅田河をくぐらす。を載。たまう。往古の奥州海道。いふ。こも。ある。きん。か。

うき猿の道ふりうる思ひ川後乃神やあのみみ

道真准吉

隅内河渡

橋場より須因堤のりと/orのちを渡るを今橋場の渡と

唱人 緑冠板の戸鹿草紙よりの渡へ今と云うを川上ありと本のうき

歌

古今集 ひさの圓とおりうきの重とあるすまほのわくよりくわく故のゆく
うひくせはえりれらむく一河のわくと/orのゆくかくとおもひゆくもあく
あくられとおりひづてうくわをくよつておくと舟のれ日も暮ねとのひくられ舟のゆく
わくらじとぞくよしき人物といへくて都よりくわくともあくとさるかくよくきかのうと
あとあくたれのわくよあそいはと高むれえうねをくわくられみみ人見あらとわくさく
思くと何をとと向りられ思るむ都鳥といひりととまとてよらる

古妻の道の記

角田けらりとまくと見よりく今も船よ

のんとくへぬわく一宇のくぢるやあくん

長嘯

名ゆ もりひでゆとくむ都もくあれ思ひの人とあつやめと
うてたとれとすのまびすくにうれしれおる島のあらぬやのと

かくまう道よあくまきの觀音と圓をとくとあくと

因

夫本抄 夕霧小須田のワツヒ見え能くの舟人よくのあゆゆげり

経兼

石濱古戰場

橋場のゆまと石濱とのべるよ似く

新安手筒は向夜先生の石濱の
教あくとく一器と

左平記云正平七年壬辰閏二月

小朝の觀音三年

故新田義貞の次男左兵

源氏義興

故新田義宗

後足利才左衛門義治義兵を紀し其勢十萬

余騎

武藏國

打滅ひとくられよ依て將軍尊氏も簾倉を進撃し

敵を道より待て戦を決せしと同十六日僅

五百余騎

て武宗國

向ゆと追と小弛集る勢とく八萬余騎

同廿日武義院

の先陣急々敗きて引退れ後陣をひみたれと大よ戦ひあくと足利方

小手持原ひら打て出新田足利の両勢二十萬騎入乱て大よ戦ひあくと足利方

の先陣急々敗きて引退れ後陣をひみたれと大よ戦ひあくと足利方

自諸軍を率て大よ呼て云天下のあくへ朝敵あり承ぬう父の讐言あり

此戦

よむて尊氏の首をあくしに付の時をう期をくまとて只二列両の

大旗の引よむて小手差原より石濱坂東道既

四十六里を片時う間

小追射たと此時お軍の石濱を打渡虎口を遁る

天正年間

隅内川とく猶お軍の兵

士残モ止テ先途をまひリ向ニ四モ既モ西の川モよりて行の湖瀬も見え
ワラされハ義字ある續てワモトモあくと又後ナリはく味方もアタレ奉シ
カクナリのやれと牙をかじて卒陣ヘ引歸スアトアヒテ以上左平記

砂尾不動院

捨傷寺と号すと渡場のサノ南の方道ト右エアリ天台宗

サニモ浅草寺ニ属セリ

往古法相家有レシト佐野報田所の代長賓癸未歲トミ家風を移シ

宝龜四年癸未良辨僧都相別大山寺小告

の上足寂昇上人當寺を寔基ト卒すニ不動明王の像を安ヒ
縁起曰卒尊不動明王ハ良辨僧都相別大山寺小告
三軀の一子ト彼寺の卒すと同本同作ナリ僧都一時上足寂昇師小告
て云く三軀のうち一軀ハモカ持念ビ殘る不の一軀
ハ故ニ附属シテ何方ニモ有縁のゆゑ安ヒトナリ仍て僧都化寂
の後宝龜四年歲半ニて寂昇上人上總の方へ赴く道の次適此地ニ即リ靈告を
得て有縁の地ナリキトアモカ持念ビ殘る不の一軀草堂
を嘗々砂尾不動尊と号す云云砂尾藥師如來寺内ニアリ卒すニ

惠公僧都の作

頃彌刺ナリ

妙龜山總泉寺

曹洞流の禪林ナリ

入戸ニ箇寺の一貞院と寔山の靈殿

宝龜和尙と号すと當寺ハ千葉家の畠苑院ナリ

を嘗々砂尾不動尊と号す云云砂尾藥師如來寺内ニアリ卒すニ

のゆきを云

千葉氏墓

境内卵塔のうちより長尺八寸の青石モ

榜文

昌熾大居士

とあり寺大檀那

守胤の靈牌と稱シテ

總泉寺

長山

の碑

又戸内喪主

常觀の墓碑

ハ春淨院

貞院

の碑

余年

最不審

から

津宮跡

入道墓

日卵塔のうちより青石の碑二枚其一モ西元年

按又當寺より下る木の下は三郎の頼郷入道實信

御空上人の法を承て後善惠上人又號て出家と云々元年己未十月高僧ニ寂

の石塔の傍ニ供奉する西山上への御見立其處の則京師西山三経寺の東の坂より仰て考へる

又當寺より下る木の下は其祖族も此邊より安らかに建り木の墓碑を立しと云々

余年

最不審

から

柳當寺ハ正法眼藏のみ理をもめ實相無相の心印をひらく向上の一路

より着相實有の草を拂ひ言下の一喝より異體ふ狹解の塵を拂ひと云案
の床の前より一千七百の則を重て以ひ傳ひをばく坐禪の食のりと云朝三

暮四の助を浮く文字言ひの詰頭を離らる

淺茅原 總泉寺大門のあぐりをり

圓國雜記

勝茅原をもとづるあゆて

人りそへ少れて游へたゞうくれ佛寺をうくの西宿をわづく 道奥准后
妙龜塚 み亀大師社と称せし
古墳一基 云号をらしくめり又は安十二年正月廿二日と題すてあると改えある
巻第十四云く加禄二年六月廿二日此年正月真山門の裏後美年を贈て大谷法門の
と其模法蓮坊観音塔は上人の檀を寄附して蓮生塔を贈り信生塔を贈り法門坊東氏の誕辰立位
道場僧堂西佛塔頤宮去處の如也坐化の身よりともば衣よき材を常へ身を供すに應付の事
運河内空き所よりとぞを記すとあらまの法門は坐化の日第六月廿二日と云
麻六甲通の才ありもとの古墳をもく
のほの墓碑うらん

鏡ヶ池

圓所西南の方かあり傳へ云み亀尼梅若丸の跡をもとひ京と

すあよひあをとし梅若丸身まつゆみと耳と身を投てむれ
あもねとぞ 此化を洞の化と名けりとある

傍小蘋池庵と号する小菴ある

辨財天を女と見てもみ亀尼をまつるなりといへ
袈裟衣懸松 池の傍より一名を衣掛松ともいふみ亀尼の松の枝よ衣をクリ並アシル
采女塚 は不より寛文の頃吉原町よう移りといふ近づき放てと夜のよきれどく
小袖をうそ一首の詞をそつた

名をそれとあくどくもあれ豫譲のあとをゆみう池よもや

東野先生之墓 同所橋場の通り獨毒院とてる禅林より先生へ下野のへ詩の烟圖東壁を字

宝龜元年庚戌の春智海法印始て

沙尾石濱の道場

三年甲子の秋材里の人民力を合て一宇の梵刹と

と号す 宝大僧正智海法印の太祖元年丙戌三月十四日化嚴ニ世祖大僧正法印の天長七年庚戌四月

隆性院後二位蘿原朝臣四辻有理卿墓碑 天六月廿七日とあると云まことに南向亭云く青石

の碑あると云四辻の姓名三才の官名實名あれとも云ふと云
其末由もあらねどと云寺はもともよはまひりきと云

按よか譜極記云西園寺大政大臣公達等の四男四辻權大納言西二位實蘇人なり十五世の孫權大納言西二位公達

延宝五年丁巳六月廿七日薨也トテ平八とあて實蘇之妻貞子永徳の夫人にて四辻家の祖也トテ

大御子なり後之傳也ニ位有曰公達也延寶八年ハ九羊己酉丁巳の號也トモを薨也の日即

附合せりうれと文す刹缺して讀へやと後之傳也ニ位有曰公達也

齋院別當寶盛墓後五位德山貞道真ら大居士壽永二癸卯年五月七日と刻一まこと當寺七世の住

侶法晉上人え泰和尚え禄七年甲戌五月廿一日夜靈夢を感一孫兵庫助信利是と建立もろとを號也ト

法晉上人の實盡の氏族もとト南向事恭誇もとえたり法名の其頃新命一十五と玄鑑の壽永二年五月

賀則給承よ鐵也ト

鎌倉權古夫景道石塔塔名ト法名也ト人歿年の年月いまよ考へと是も忌も後世の一族の人

きくの造立也トるんを景道の眞守府將軍良兼四代の孫た開つ尉致経の二男出小五郎忠通の三子

其余當寺歷代住僧の石塔もと化奉昌泰正壽永康元文永弘安正寺嘉永正和文應正慶文正寺の年

号を刻也ト古蹟づれも印塔の中と存也ト

それどもうれ故に近年散失也トとぞもくと

當寺天台宗の古跡也ト保元年間中興也ト保元寺と号へり遙の後

大よ荒廢せしも明蓮社聰鑒上人西仰和尚の時也ト合掌を改めて淨家

小禪也其時又文字も法語もあつてめ寺院再興ありと云

を載也今既得てあとも文す保元寺と作る又蹟内より院至觀音一光ニその像を刻へり又妙具

色林昂の五事をりよも裏よ廉平二年武列保えましある古蹟あり鑑とも存下す

えのうちもくもく

深榮山長昌寺法源寺の南隣る當寺御府内日蓮宗の古跡也ト延山

小属也と延山日寂上人へ始淺草寺の住職也ト上古の天台の法流を汲て
寂海法印と号せり弘安二年己卯始所よ旅て日蓮上人の弟子日常上人と

宗義を討論を或へり宗論あり弘安五年壬午とて發小日蓮の宗風也歸一身

延山に登て宗祖上人へ謁り弟子の禮を執て名を日寂と改後淺草ア

帰室金龍を辭して庵をレヒ妙高寺と号すあててくよ隱る浅草所の西僧も

又とも小受戒して日増日可と改む同九年丙戌十一月一日日寂上人歸寂也

墳墓境内より中古より遣もととぞり依て其後日增と云可と云

長昌寺と号く當寺新鑄の鐘の鋸も其也元鷹田門接と偶水難も罹

堂塔漂流鐘亦沈沒と其所と鐘も洲と云の號也ト元亨元年辛酉寺を今

の地も猶もとある按よ壇ノ劍の末由の龜戸村善門院の邊の傍もあくありといふれ是もく

あらんのて本堂の下も扇の形よ作もて今生の中央よ樹木一株ありとぞよ一の標石を建

宗論芝うひ歳海法印寫本の日常師よ然て宗教を叩見竟よ日蓮大士の弘法よ歸り證と承

せよ示さんだらま

并のとしお

今戸八幡宮

今戸橋

北の方道

たかみ祭神山神圓石清水

まくろのとしあそ

水鷄の橋場の

のすみひ佃嶋

を佳境とせり

源氏物語すも

あらじみ春秋の

あまめくらの

花紅葉のさく

あるよのうた

そことうとうと

あけれるあけとも

あまめせなよ

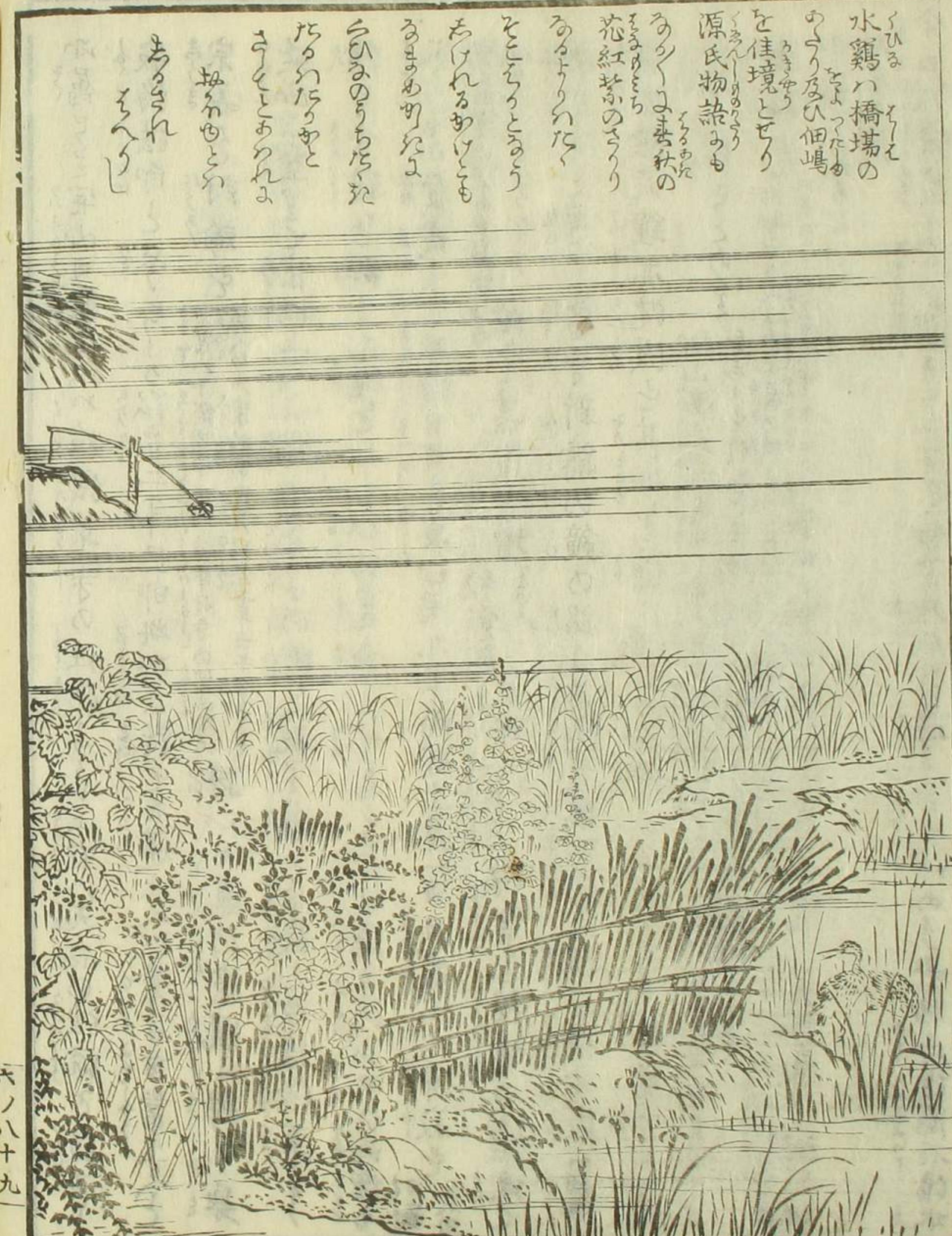
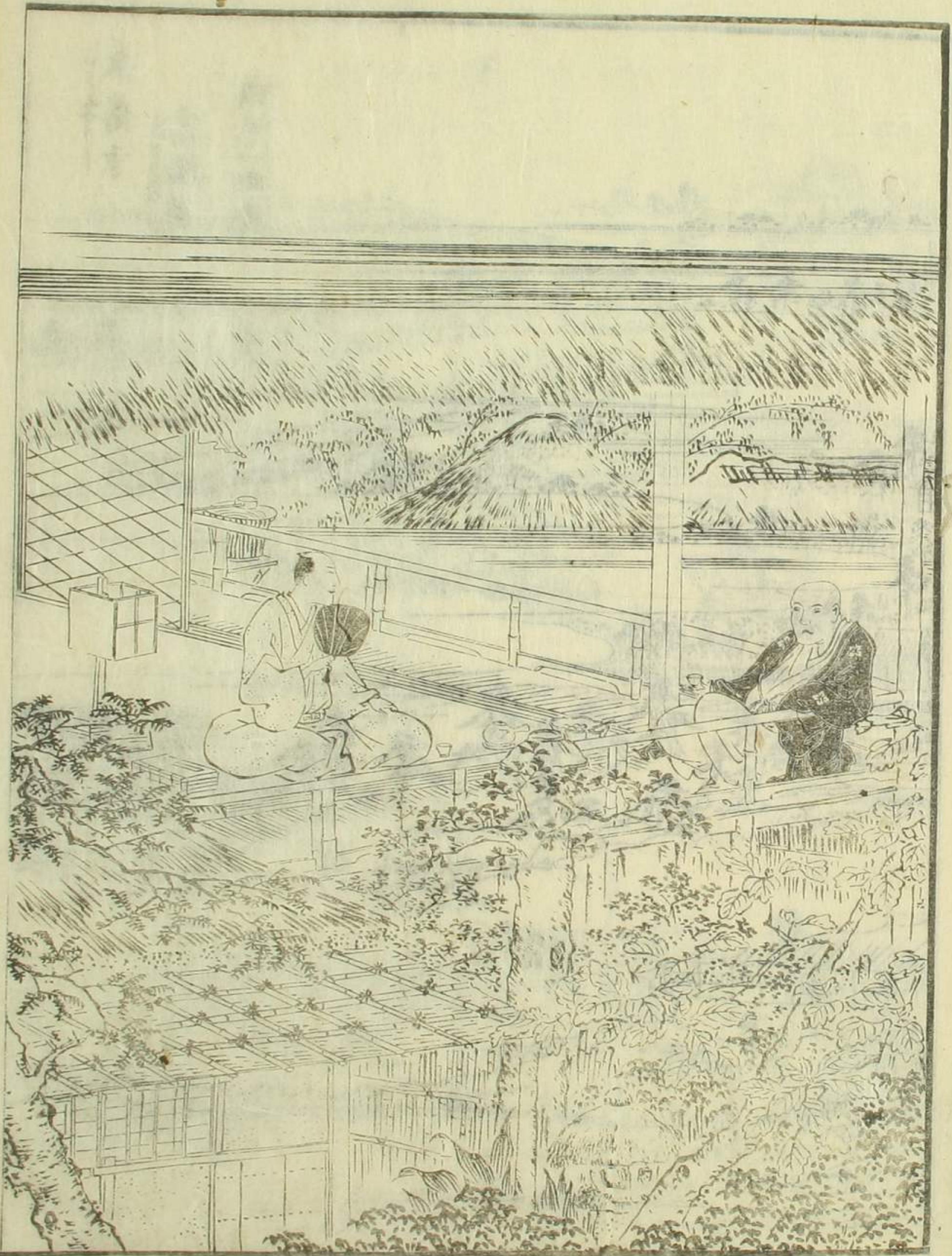
たまねうかと

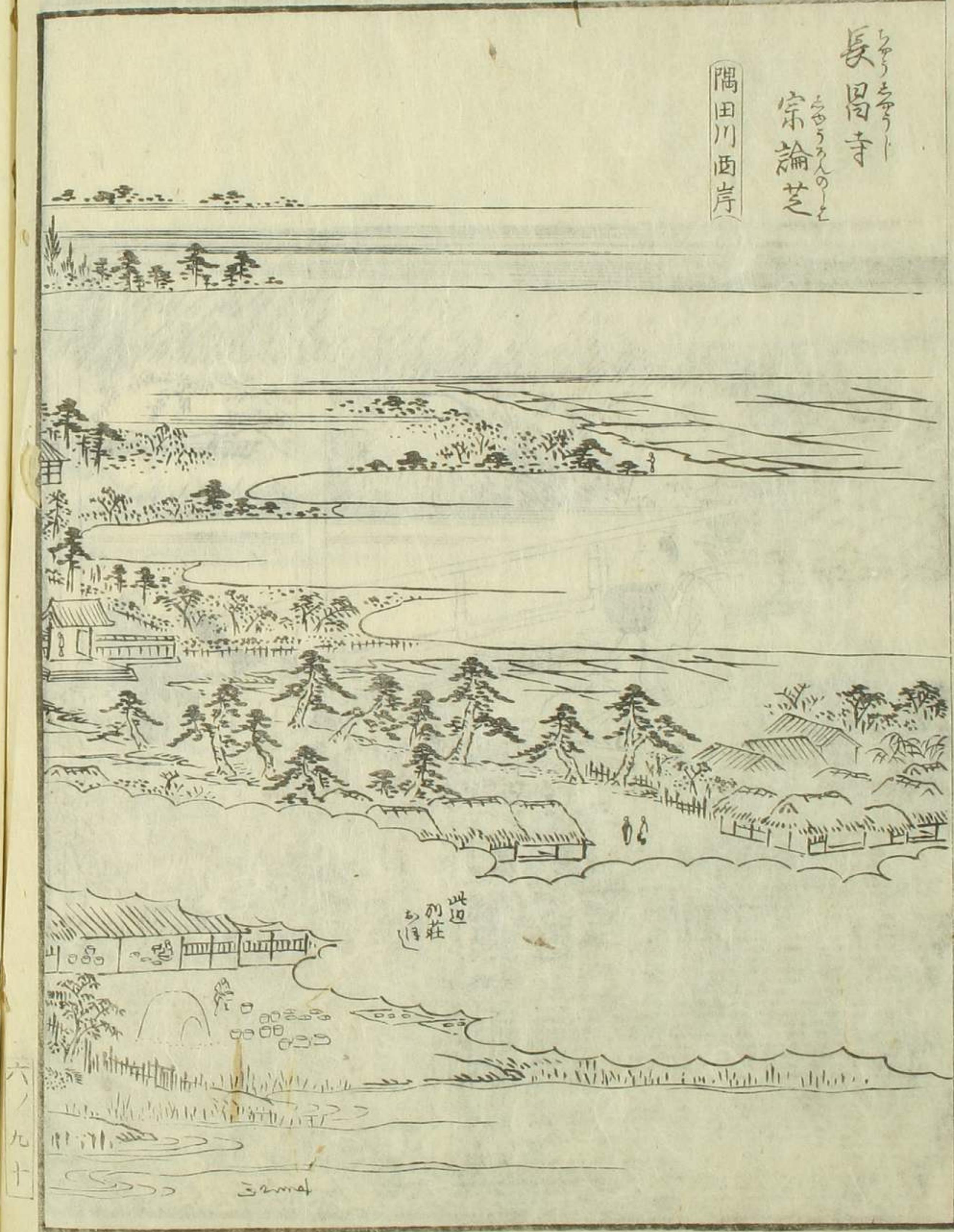
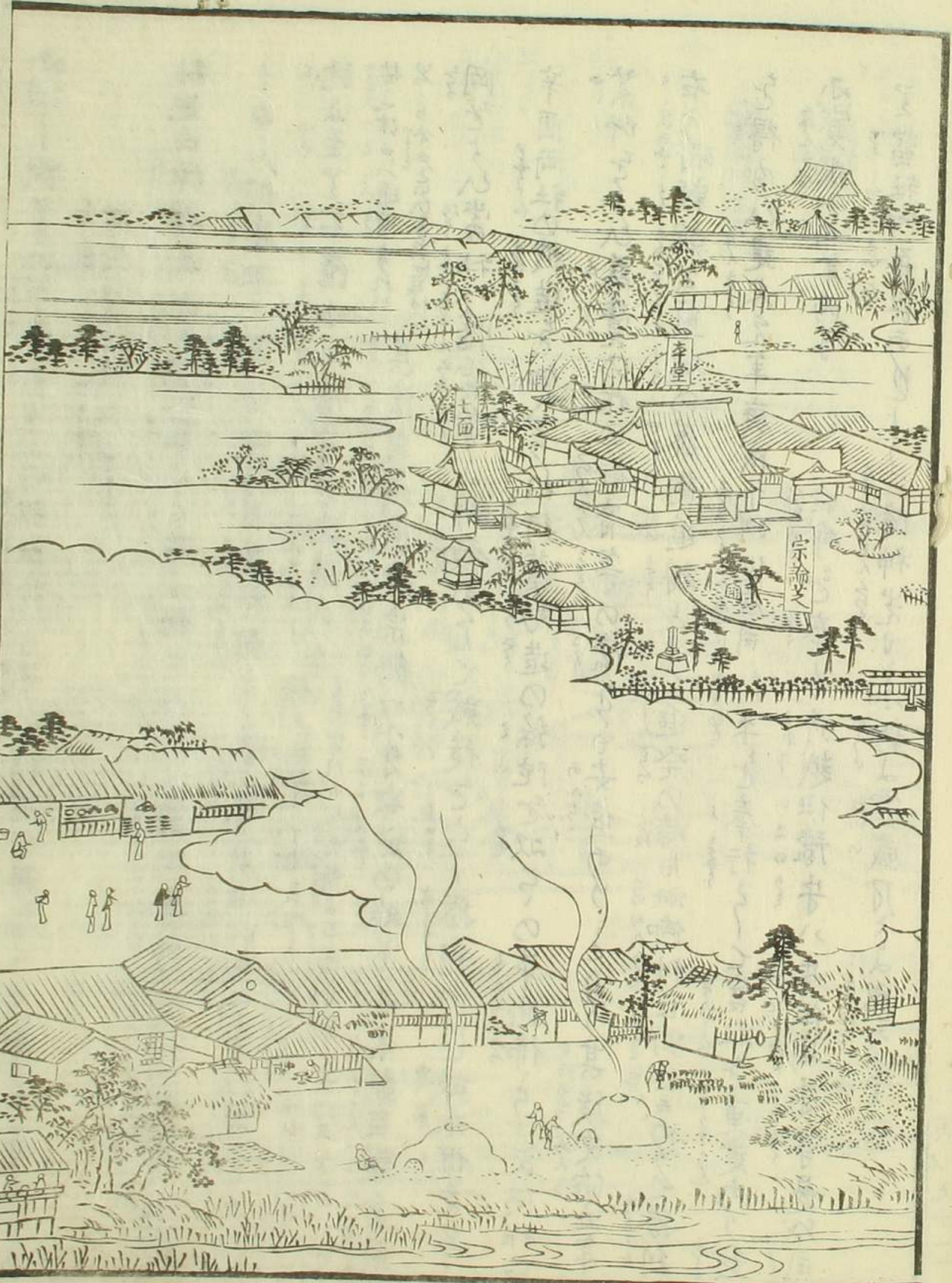
うそとあわれよ

ねねゆう

あらうれ

もへし





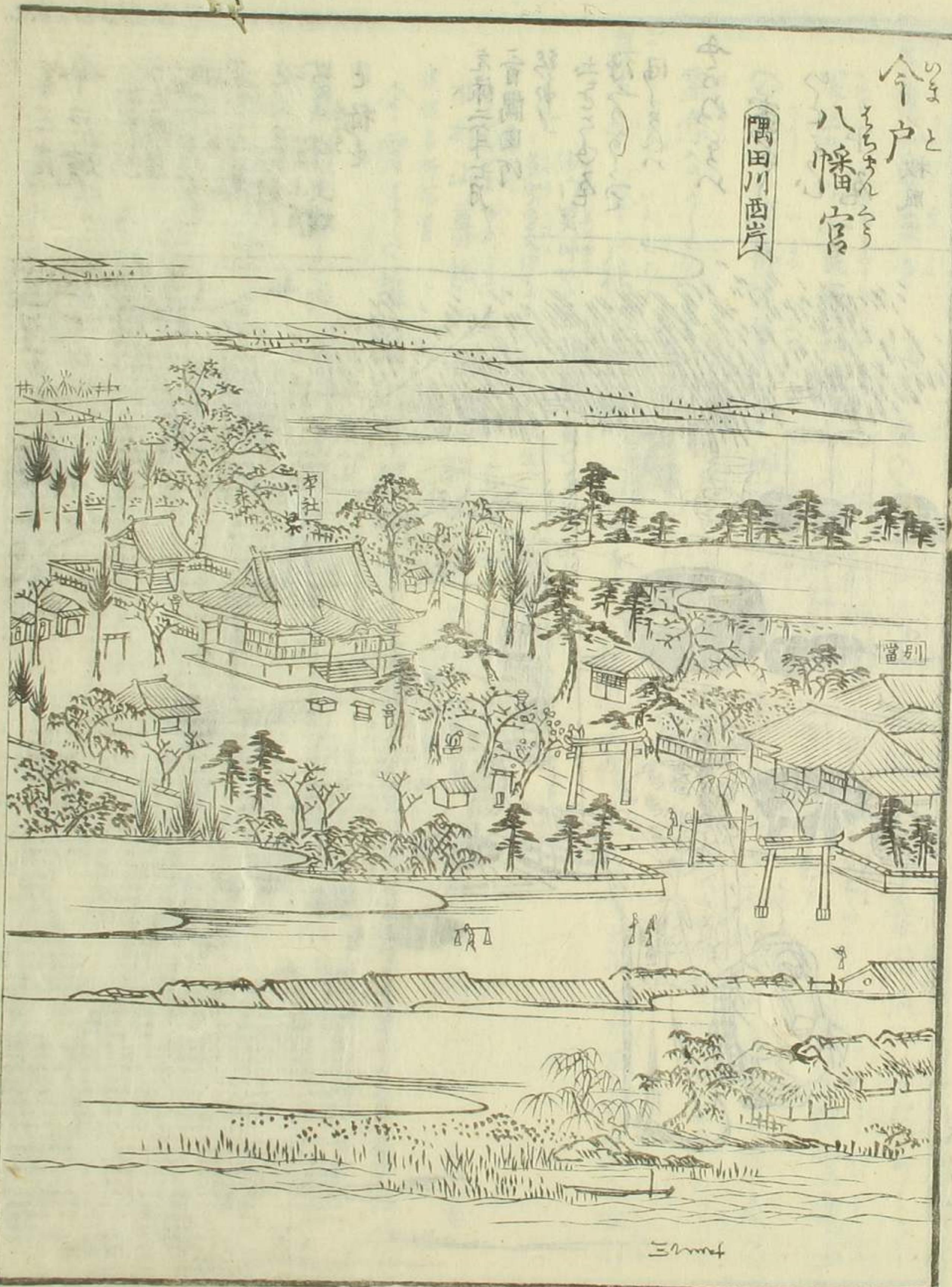
隅田川西岸

長岡寺
宗論芝

小國別當ハ天台宗にて松林院と号を祭禮ハ毎年八月十五日

放生會を行ひ

社記曰源頼義朝臣義家公と其子勅を奉りて奥別安倍負任宗任を誅戮
ノ内仍康平六年癸卯八月其祈願よりて鎌倉由比郷をより出今戸の
地至石清水八幡宮を勧請あり 今戸社記又入津又作る小国北条家の分限帳不
按又津戸へ通音其後奥州武衡宗衡兄才敏逆の時も義家朝臣鎌倉鶴
岡をよりて當社八幡宮等より祈願ありて賊徒を亡て勝利あり故永保之年
辛酉兩社の後造を加くられ行基開造の餘陀を取らる本地佛より又同作の
藥師をよりて慈覺の作の觀音等の像をも安置ありとす其後文治五年
右大將頼朝公奥別の義衡追討よりて進發の時も此御神より誓願
を得たり建久元年庚戌下河辺庄同行卒を奉行として宮社を重建あり然
小寛永十三年丙子 台命を奉り舟越伊豫守ハ木但馬守等是役司
主當社御再興ありて己降神光同く小新より靈感月々盛り



今戸焼

今と石
此邊甕者
陶器通ありと
是を產業
とての本と瓦
セふ今と瓦
と称と

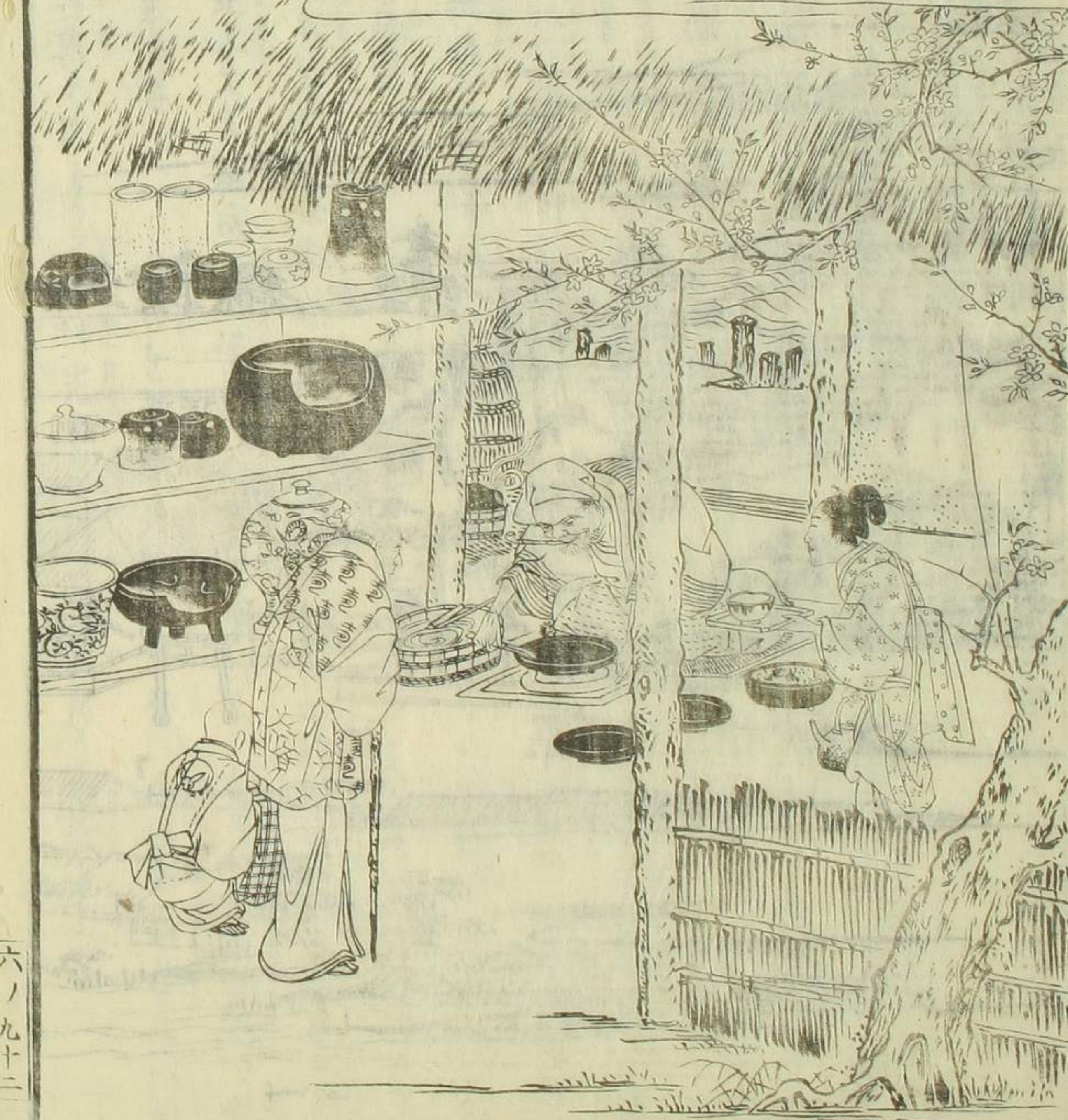
元禄二年七月
二百隅田河
社り

土をとひて
はすうすうて
ほりれい

かねうへ

露や

松風



靈龜山慶養寺 因く南の方今戸橋の北の結より曹洞派の禪刹す
宍山を明山良察和尚とひ 菩提え鳥越西福寺の隣小手後車をようく總門の額靈龜山
の三字ハ頤齋の筆業れぞ辨財天社境内より奉事弘法大師唐より携來の
靈像すくとひま 當まえ鳥越のゆより時伊丹左京舟川米丈とひ兩人の姓士故よりて討罪一たうあと
真土山 今戸橋の南の結よりまて待乳又作もぞ或信土又作る万葉集示打
とと 多字のえはうれりと云
万葉集

亦打山暮越行而廬前乃角太河原爾獨可毛將宿 幸基

今宵また誰畜かうん庵崎の隅田川系の秋の月か多 須徳院

月影のうとや庵崎すとけりまうち山々越行のあの人もれ 定實

あら山々越行の風寒をすとけりあふ鳥れくす

回國雜記 道きく名不とも多かどあるあふ

さくらゆどりふて

のを家子のちもをうぬ東路のまうちのゆふりがまぬらん

道典准后

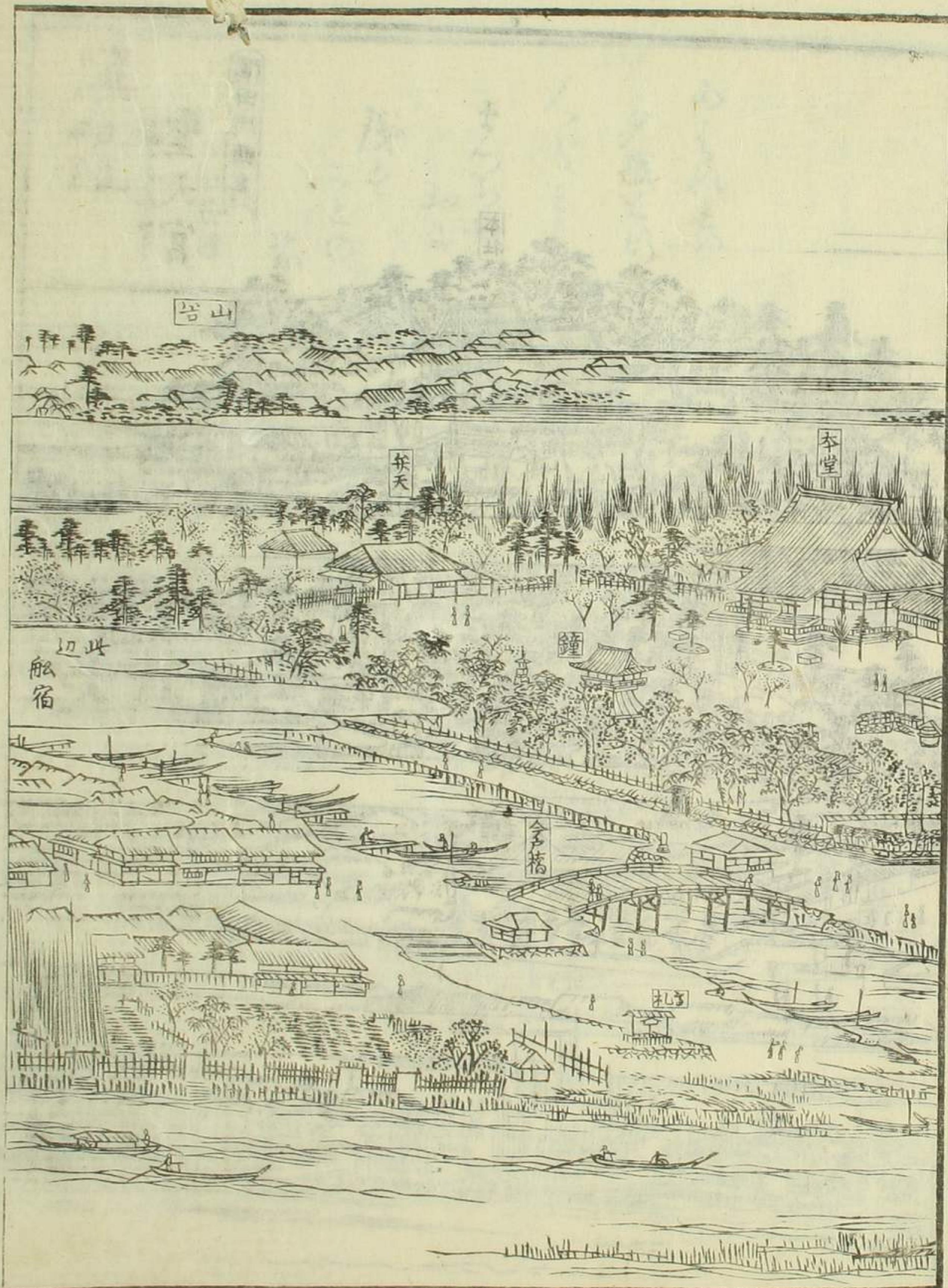
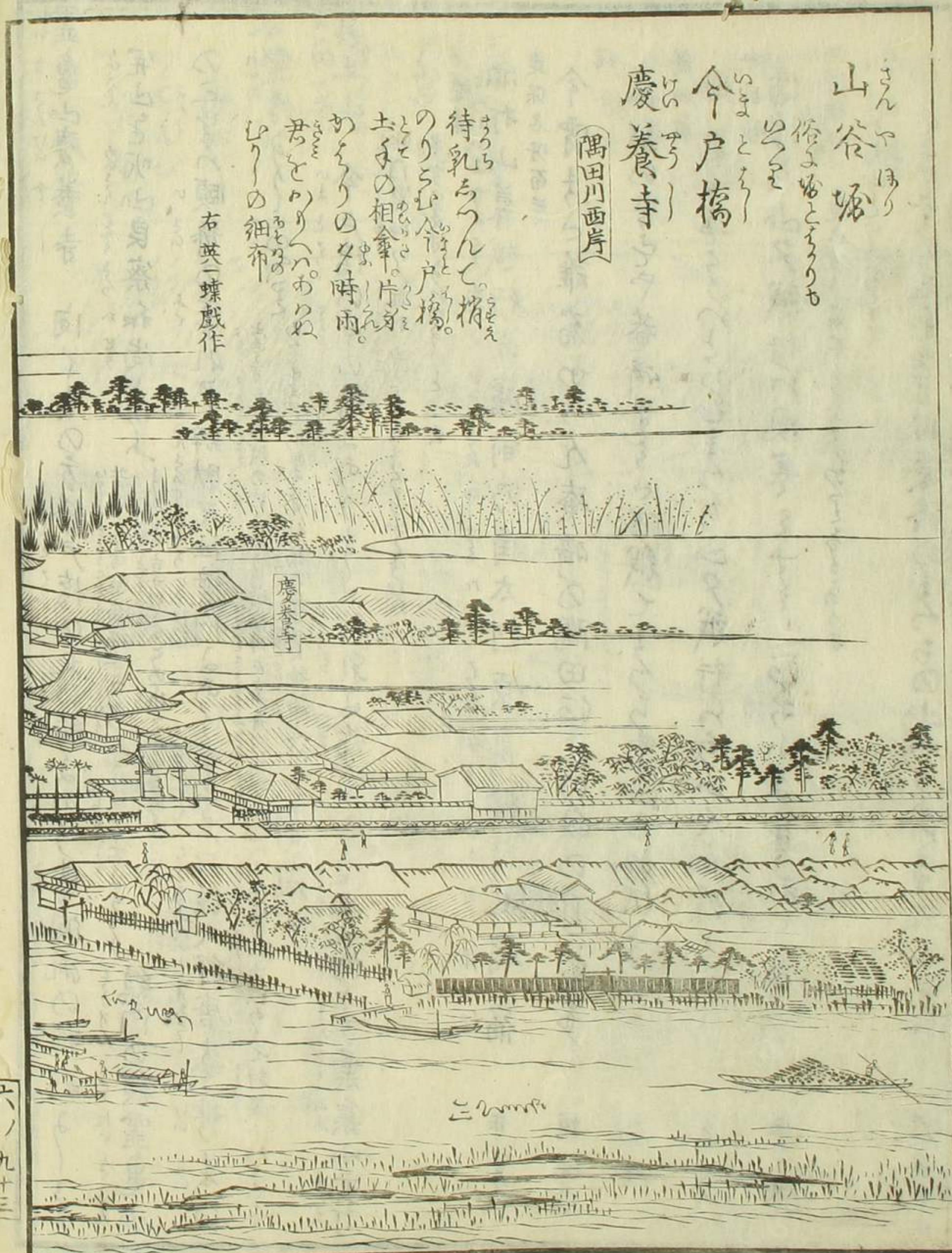
山谷宿

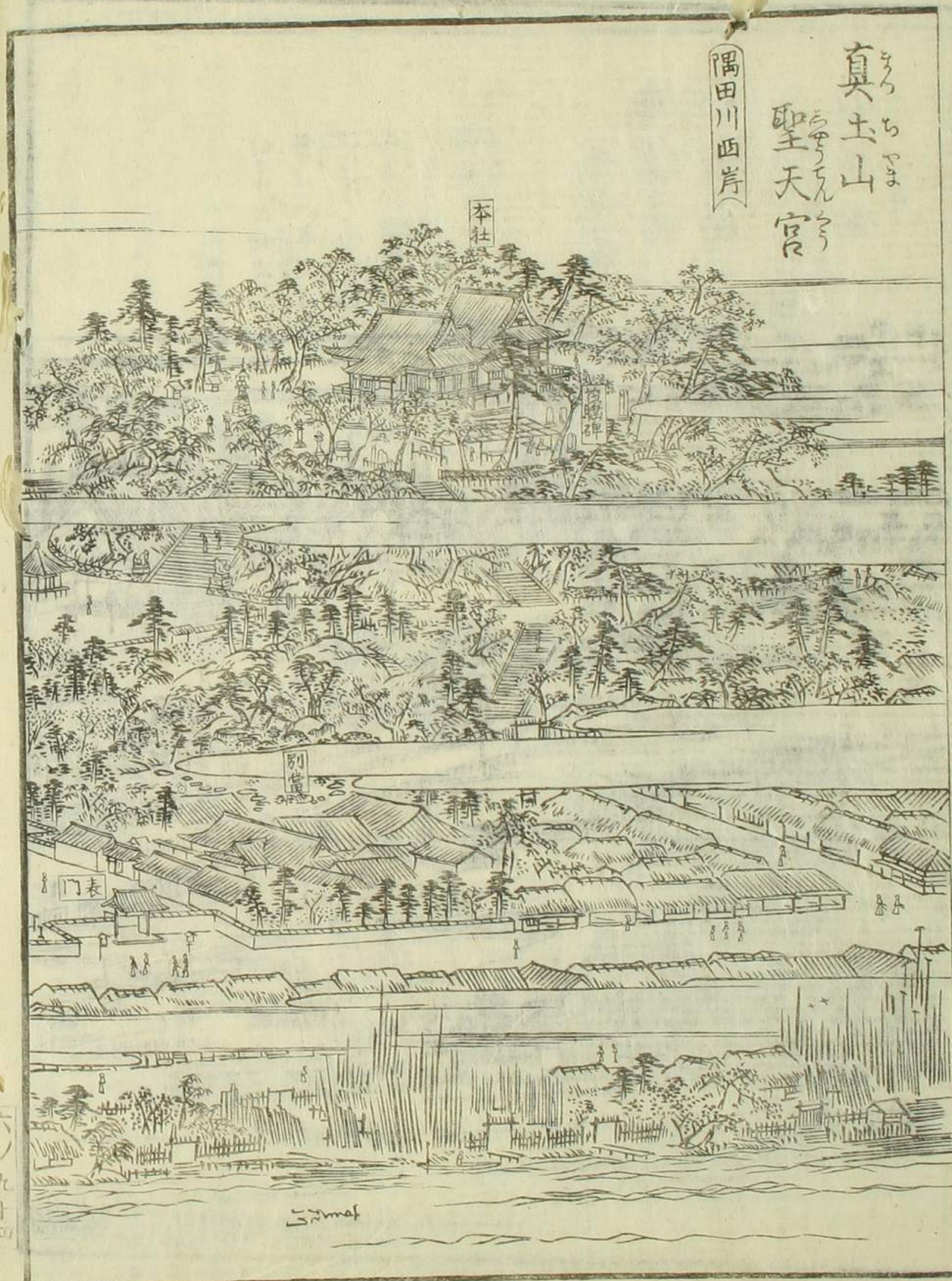
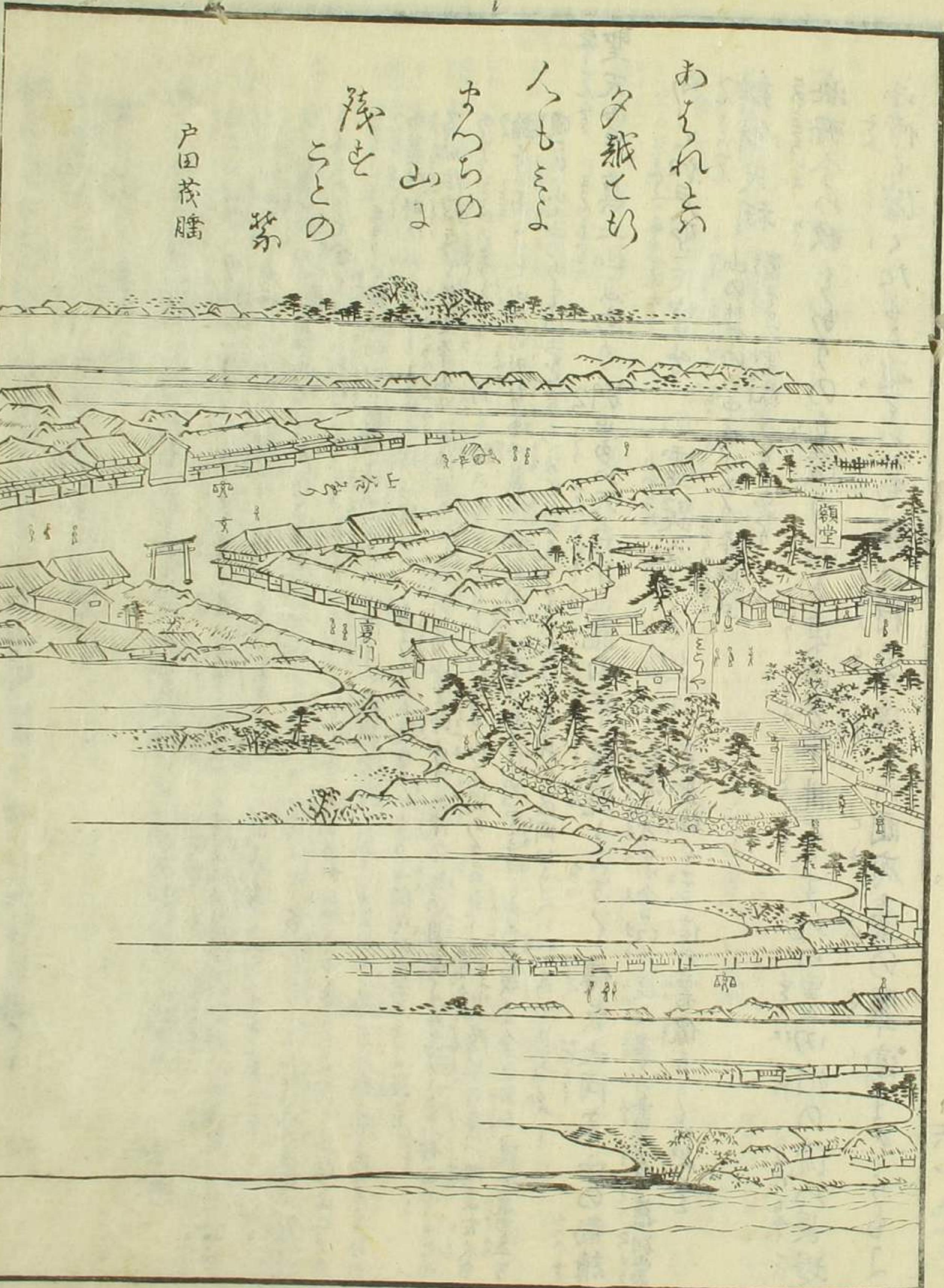
俗ニ名トモリモ

今戸橋
慶養寺

隅田川西岸

待乳らんと。梢え
のりらむ。今戸橋。
土手の相金華。片
かくろの夕時雨。
君とひくへ。わくね
じくの細布。





時あくちのほのかりみらぬまうち山落葉をめとてあじそゆ
とこかたうみうらうもよーすゑん
京

18

戸田恭光入道 茂睡^{モジ}天の宮のかくらよ
碑を建^{タメ}其碑^{そのひ}面^{おもて}又

あらわとて又鐵で行人のアレヨモウの如き
處もああではアーモンテトモ
アミ まんえふもん
のを
スカタカヘー まくらま えい ほうのま

茂鵠

按よ井桂抄八雲御抄等の書より万葉集より載たり。赤基法師は赤土山の後を後河内と云。崔馬赤註秘抄
宗祇の名不子角抄等より大和紀体の圓境とあり。豪傑草より武藏國に入たらしく或書によ云く大和不
信土山角内川ありて盧崎あり。發河又隅田川庵崎ありて赤土山あり。たとひよりふれま赤土山角内川庵崎
ともすあくと全くそむきられるととよされとらひよりま赤土山庵崎あり。後人万葉集より因く名す。しりの
えきよし。按よ西山公の釋万葉集より此書の勅撰の體もあらざる。論焉うれすりあらざることなれば
赤基法師の和あひすまされと後河内入あり。あらんかし野つまひくよ隅田川の名あり。莊を
菊岡治淳云く往古卒石の邊海面より頃に蜀山を仲ト入律の船の因當よもありとを按よ今もとの
あらと山の名と字。新鳥城のゆき山谷今いづく。入律の船の因當よもありとを按よ今もとの
論焉うれすりて山川の形勢も千載を経れり。やうねたり。つまき。或人の説より今の日本漫を名す。蜀
頃の赤土山のあらのちと穿らえて築立りといひはくもへれどの岡よりへり。猿高カリしありべ
聖天宮 真土山 よあく 別當ハ天台宗企龍山卒龍院と号く。傳云大同年中の勅請
ゆて江戸聖天宮才一の靈蹕あり。とくに
えとくとくとく
れいぢん
なまくとく
実鑑院くとく信の靈像ありといふとく

辯財天祠 山の林鹿化の中龜より平政子
まごの雲像

卷之三

蒙古文

此所今の秋もよりの丘陵うねと東の方を眺むすれり墨田川の流へ長堤（よし
まよし）
小傍（ちか

て密（ひそか）くたゞき近（ちか）くの葛饅頭（くわのまんじゅう）の村落遠（とほ）くの國府臺（こくふだい）の翠毫（さみらん）まことともよ

ヨモギツミ
同車提
トモチヒタチ
聖天町トヨヒタチ
ミハラ

其の後、某車の事は、其間何時

縛タテと云
里諺リクイ又須タカニ

六 丰 庚 申 の 嵩

命より依て荒川水除の為より堤を築ボア
故より多く堤よりよまく庄司坂入森よりへらるえ文三
日ナリて成新ノ事ハ日本堤と号すラヒウイ或ヘリハ小
隣の堤一条ある止堤をあらむて二条あり俗モ一車ニ車ニ

里諺よ田水須
國の大諸侯
印本洞房諺室を
原の裏より移場
うらうろみて二木漫

新吉原遊女町 因本堤のり

頃江府門によ増繁系業の

本の地とありあへ日を傳く肉駿列
ともあら
る筆二十余人云々又後生之書頃の事

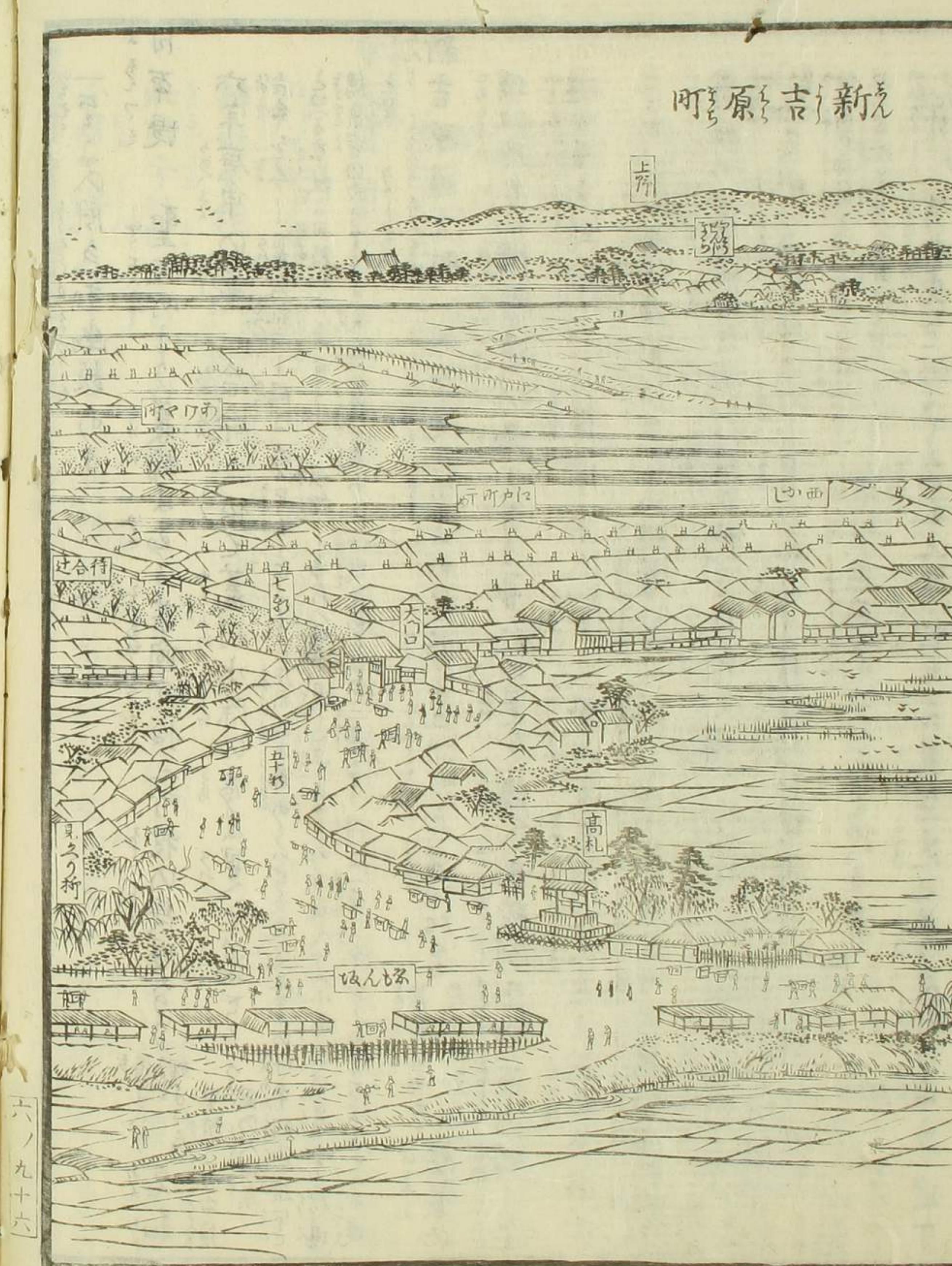
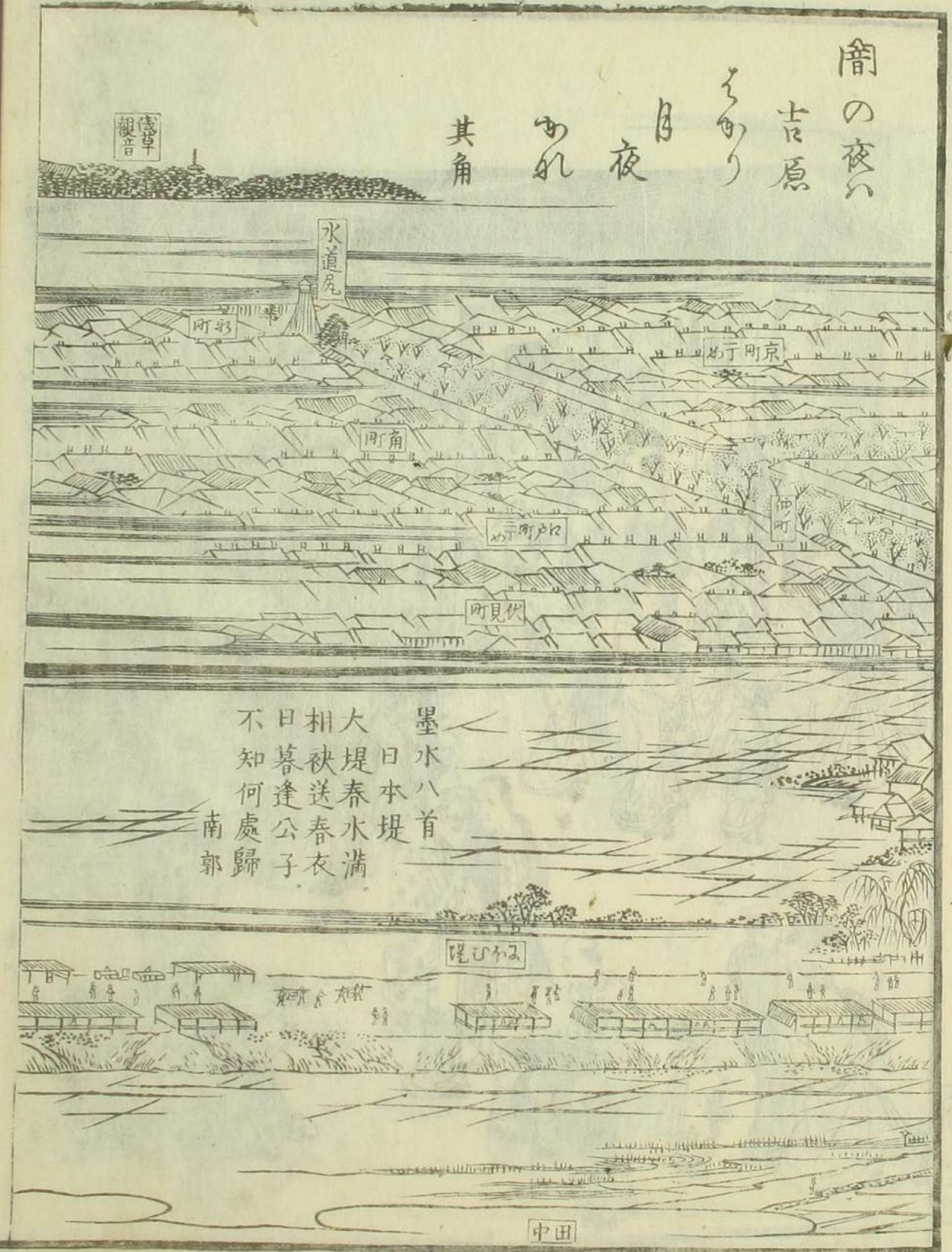
口原の驛

さかこは花屋散在で、久く彼輩官より訴へ

『徳川家宣とまこと』

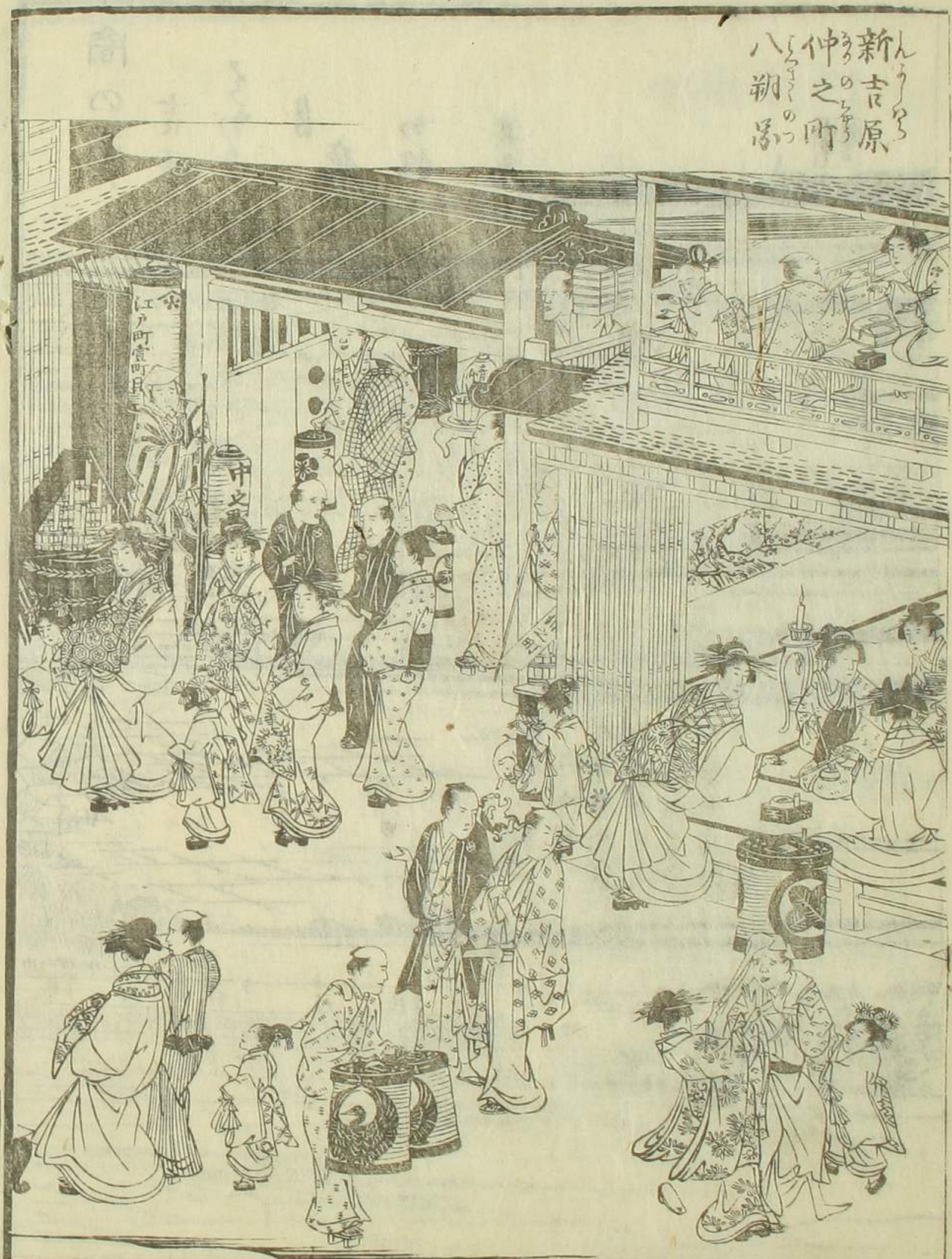
京極

柳町 又中の通を仲の町と守け新地より傾岡町を定めると
仲の町の西端をうしろ側拂々 まわりそばくわらひ
以上事跡合考よ載らども其後庄司甚ち勧めりする者
根別小田原の産より始甚内
とえまへて一説勘むるとも
官の免を得てえ和二年始く花巷を定め葺屋町のまよて貳丁
りひ侍





六ノ九十七



八朔
仲新吉之原
のらまつちの町

四方の地を賜ひ是ノ代吉原町と号す。今所謂の泉町高砂町住吉町難波町等其四地なり。故に霞浦堤ともいふへどを賛へて吉原より作とらつて或に事跡合考をうへて霞浦堤の三ツ鱗萬葉宿定板の江戸鹿児等の書より其始發明え吉原よりうそ故云之の号ありと云々。蟹羊普請落成を祝ひ江府益繁昌。一人丸蔓とあれハ明暦二年冬竟より今之所より荷物を賜へ。明暦三年丁酉八月今之ゆき依て新吉原町と号す。とくに此花柳のよどで小三都の魁焉と其賑ハ特殊生の花の頃をりて癡然たり。春宵一刻の價千金を顧と初秋の燈籠ハ万字屋の玉菊う追復。又ハ朔の向重ハ巴屋の高檣。又起る今も忙日をりて更衣の節と名す。且ハ二度の月見の全盛。ひのよさうらうと悉く其美を擧かりとまわすとよからず跡處ア。是を畧ヒ

江戸名所圖會開陽之卷終

早稻田大学図書館

011688984990